
東方泉遊錄 ~ autumn hot spring ! ~

夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方泉遊録 ~ autumn hot spring ~

【NZコード】

N1252X

【作者名】

夜斗

【あらすじ】

ひよんなことから幻想郷へと誘われた温泉旅館の少年、草津水織。糺余曲折を経て、何故か彼は秋を司る姉妹の神様と共に銭湯を経営することになってしまった！？

戸惑う少年と、憂い嘆く秋の姉妹。

そんな三人の出会いは果たしてどんな物語を紡ぐのか。
始まりは、とある少女の小さな戯言だった……

苦手な人は「遠慮ください。」

序章 それは小さな戯言から（前書き）

このお話は「東方 project」を題材とした一次創作です。作者による独自設定や偏見、解釈等が多く含まれております。それらが苦手な方はすぐに「戻る」をクリックしてください。

序章 それは小さな戯言から

「幻想郷に銭湯とかあれば便利よね」

それは秋も深まり、北に望む妖怪の山全体が朱色に染まり始めた頃。

博麗神社の縁側に腰掛けながらハ雲紫やくもゆかりは何となしにそう呟いた。

「……はあ？ いきなり何を言つてゐるの？」

今まさに湯のみに口をつけようとしていた博麗神社の巫女、博麗靈夢いれいもは紫の言葉にあからさまな嫌悪の表情を浮かべながら半眼で彼女を睨んだ。

紫はほら、と指を立てながら続ける。

「温泉探すのつて大変でしょ？ 地面を調査して、それから掘つて汲み上げなきゃいけないもの」

「いや、ずいぶん前に地霊と一緒に間欠泉が湧いたじゃないの。温泉に入りたければあそこ温泉でいいでしょ」

「あれ一個じゃつまらないじゃない。知らないの？ 外の世界にはいろんな種類の温泉を集めた、スーパー銭湯だなんてモノもあるのよ」

「温泉……ねえ。別に嫌いじゃないけど、自分で掘ろうとは思わないわね」

湯のみの茶をすすつて靈夢が一息つく。……とは言つたものの、決して悪い話ではないと思つた。

度々起ころる異変や宴会の準備、そして博麗神社の巫女としての辛く厳しい活動の日々（自称）で疲れ切った体や心を癒すに、銭湯や

温泉はちょっといいかもしない。

前回は結局地靈のせいで賽銭獲得には繋がらなかつたが、人為的に作られた銭湯となれば危険もないし、案外容易いのではないだろうか。

神社のすぐ近くに作つて『博麗の湯』だなんてちょっと気取つた名前にして、ついでにお饅頭とかお煎餅とか作つて売ればかなりの利益になるのでは？ いやいや、むしろ神社の賽銭よりも断然収入が上に決まっている。いつそ巫女を辞めて銭湯を切り盛りするのも悪くは

と、あれこれと考えを巡らせてみると紫のジト目でギロリと睨まれた。

「……今、何か不純な意思を感じたわ」

「失礼な。自分の将来を本気で真剣に悩んだだけよ」

「どこのつまり、貴女は銭湯の案については賛成ね？」

紫の突然の案に靈夢は少々引っ掛かりを感じたが、首を傾げ思考した後渋々とうなずいた。
すると紫は立ち上がり、そのままスッと右手を水平に薙いで“すき間”を開いた。

「ふふふ。なら、さっそく専門の人を探しに行かないとね」「なら妖怪の山の河童でいいんじゃないから？ アイツなら機械に強いみたいだし、そういうコトに精通してそうじやない」

「何言つてるのよ靈夢。こここの住人じや銭湯なんて文化を知ってる人間や妖怪だなんていないわ」

「はあ？ 文化も何も、そんなの紫が直接説明すればいいじゃないの」

「それじゃつまらないでしょ」

今度は靈夢がジト目で紫を睨む。

何がつまらないんだかさっぱりわからない。ついでに紫の言いたいこともイマイチわからない。

その見かけどおりの胡散臭い言葉に靈夢が怪訝そうに顔をしかめていると、対照的に紫は悪戯っぽく口をつっ上げ軽く笑みを浮かべた。

それは、何か善からぬ事を企むよつた顔だった。

「……そ、外の世界から誰か落ちてくれればいいのこねえ……」

「…………ちよつとまわかアンタ……あツー……」

紫の言葉の真意に気づいた靈夢が手を伸ばしたとき、既に紫の姿は“すき間”と共に忽然と消えていた。

序章 それは小さな戯言から（後書き）

お待たせしました。

東方一次創作シリーズ新作『東方泉遊録』 autumn hot spring ～』がスタートです。

相変わらずあやふやな知識ですけど、そん時は『指摘よりしくです；早速怪しいけど……

序章の間はとりあえず1日1話でいきます。

それと、今作では1話1話のクオリティ向上のため少しだけ更新速度をゆっくりにします。

だいたい、3日に1話ぐらいを目標に頑張つていいくつもりですが、調子が良ければ1日1話に戻つたりするかもですｗつまりは気分次第；

そして今回の主人公は男の子、ヒロインは秋姉妹です。え？ どっちがメインかつて？

それはまあ……お楽しみに。

では、新作をこれからまたよろしくお願ひします。
今日は短くてすみません……；

静「私たち」

穰「まだ出でないよ！？」

夜「悪いが、しばらく出番はないと思え」

第一話 旅館『暁の湯』

「いりあ！ 水織、待ちなさいッ！」

「はッ！ 姉貴に捕まるわけねーだろが！」

草津水織くさつみおりは背後より迫りくる姉の脅威から逃れるため、磨き立ての長い廊下を全力疾走していた。

勢いをそのまま角を曲がり、階段を一段飛ばしで駆け降りロビーを目指し突き進み、突き当たった角を右に曲がろうとした瞬間、突然目の前に人影が現れた。

「きやッ！」

「うおわッ！？」

顔面に何か柔らかいものと正面衝突し情けなく後ろに倒れてお尻を打ちつけてしまった。

痛みに顔をしかめながら水織はぶつかつた何かの方へと視線を向ける。

「あつたた……だ、誰だよこんなトコドボケッとしてるのは……つて！？」

水織が顔を上げると、目の前には黒のカーディガンに身を包んだ女性が同じように尻もちをついていた。

その女性の姿を認めた途端、水織の胸の鼓動が急激に早鐘を打つ。

女性はゆっくりと立ち上ると呆然とする水織に優しく手を差し伸べてくれた。

「『めんね。怪我してない?』

「は、はい！　だ、だだだ大丈夫です！」

大袈裟に声を張り上げ立ち上ると、女性はクスリと微笑を漏らした。

漆のように艶やかで長い黒髪、雑誌のモデルに負けないスラリとしたプロポーションに清楚で穏やかな容姿。この温泉旅館『暁の湯』の客の一人であり、水織が今最も憧れる女性。

「は、葉月さんッ！？　つてことは今の感触……じゃなくてッ！　あの、怪我とかしてないですか！？」

時雨葉月は一瞬キヨトンとした顔になつて、それからもう一度微笑みかけ狼狽える水織の頭にポンと手を置いた。

「うん。私は大丈夫。でも、旅館の中で走つたら危ないんじゃない？」

「す、すみません。凶悪な姉から逃げてる真っ最中で」

「焰佳さん？　だったらほら、早く逃げないと」

「え？」

葉月が水織の後ろをちょんちょんと指差すと、鬼の形相に引けを取らない和服姿の姉が立つていた。

両手を組んで獣のように瞳をぎらつかす、それはまさに水織を喰らおうと立ちはだかる凶暴な鬼そのものだった。

「水織……覚悟はいいかい」

「ば、バカ！？　この旅館の若女将がお客様の前でそんな態度を取る気がよ！？」

咄嗟に後ろの葉月を指差し水織が叫ぶ。

姉はこの旅館の若女将、接客が命である旅館の女将がお客様の前でそんな不作法な真似はしないはず。

そう高を括つた水織に反し、姉は一ツ「ひとつ営業スマイルなんぞ作つて、

「葉月さん、ちょっとだけいいかな？」

「ふふ、どうぞ？」

「たつた今そのお客様から許可が下りたわ」

その間約一秒弱。

バキバキと満面の笑顔で指を鳴らす姉の姿に水織は戦慄した。

「ぐッ……！ 女っ気が無い上に汚い、そしておまけに胸は断崖絶壁ときた。そんなんじゃ一生嫁の貰い手がないっての！」

「んな……ッ！ だ、誰が断崖絶壁だ！？ てか関係ないだろ！ あ、何処行く！？」

「姉貴もちつたあ葉月さんを見習えってのー。じゃあな！」

姉の一瞬の隙をついて水織が飛び出し、しつかりと捨て台詞を吐いてからロビーを出ていく。

後ろ姿を追いかけよつと手を伸ばそうとした止め、草津焰佳は大きくため息をついた。

「ああもうー また逃げられたよ…………つたく

「あつはは。相変わらず元気な弟なんだ。焰佳さんがちょっと羨ましいよ」

そんな葉月の言葉に焰佳は半眼で答えた。

「……あんなスケベでどつこつもない弟が？」

「やうなの？ その割にはずいぶんと楽しそうだったけど？」

葉月の言葉に焰佳の顔がわかりやすく、しかし一瞬だけ赤くなる。

「や、そんなコトなこ。口の減らない弟に毎口手を焼かされてもうつるぞ！」

「ふふ。どうせなら写真撮っちゃえばよかつたかな」

そう言つと、葉月はウエストポーチから小さなデジタルカメラを取り出した。

葉月のカメラの中にはこの旅館の裏手にある赤月山で撮影した自然風景が収められている。

カメラを手にした葉月を見て、思い出したように焰佳は言つた。

「やういえば葉月さん写真家を目指してゐて言つてたね。調子はどうなの？」

「うん、いい感じだよ。流石おじいちゃんが惚れこんだ場所つて感じ」

「天高さん……か。どんな人だったんだうな。うちの爺ちゃんと友達だったってのは聞いたけどさ」

焰佳と水織の祖父にあたる草津委泉は、葉月の祖父である時雨天高たかと友人たがだつたらしい。

この温泉旅館『暁の湯』は、標高約三千メートルの赤月山の麓に位置している小さいながらも古風で立派な旅館。

委泉は生前、この赤月山の景観に心底惚れこみ全財産をつき込んでこの旅館を作り上げたそうだ。

そして旅館を経営している最中、赤月山の風景を撮影に来ていた

天高と出会い、親睦を深めていたらしい。

「本当に綺麗な山だよ。四季をハツキリと感じさせてくれるし、何より紅葉がとっても美しいの」「……紅葉は秋の神様の贈り物」「え？」

焰佳は窓から見える、燃え盛る焰のように真っ赤な山の斜面を眺めながら言つた。

「枯れ木の山を見たつて味気ないだろ？ 人に恋する秋の神様は、想い焦がれた人間のために何か出来ないかって考えて山を紅く染めたのさ。それこそ、恋する自分の頬みたいに真っ赤にね」

「へえ……素敵なお話だね」

うんうんと真摯に感心するように頷く葉月を見て、焰佳は少しだけ意外そうな顔になつた。

「……おや、そんな簡単に信じるのかい？ 葉月さんはもつといひ、現実的な人間なのかと思つてたよ」

「口マンチックで素敵じゃない。私はそういうの、好きだよ」「ふうん……」

それが女つ氣つてヤツかね。

ぼそりと呟く焰佳の表情は真剣そのものだったが、それを葉月が見たかどうかはさておき。

「そこで、今日は何をするんだい？ また山に行くのか？」
「そのつもりです。でも、その前にお風呂借りてもいいですか？」
「ああもちろん。今日の女風呂の朝一番は葉月さんつてわけだ」

「えへへ。ちよつと得した気分です」

露店風呂はわざと掃除を終えたばかりでまだ誰も一番風呂を浴びていない。

この旅館の露店風呂は田の前に広がる紅葉が一番の名物で、焰佳はそれこそが日本一だと自負している。

……ところより、今一番気になるのはそんな露店風呂の景観とかの話ではなく、焰佳の視線は無意識のうちに葉月の胸部に釘付けになっていた。

「……あ、あの、焰佳さん？」

「さ、参考までに訊きたいんだけど、葉月さん、その、いくつ?」

「え、えっと……」

訊かなきやよかつたと焰佳が後悔するには少し遅かった。
がつくつと頃垂れる焰佳に、不意に葉月が訊ねた。

「そういえば、水織君は何処に行つたんですか?」

「ほ、んッ。み、水織のヤツなら多分、あの名も亡き神社に行つてるんじゃないかな」

「名も亡き神社……?」

焰佳はロビーの壁に掛けた地図を示し、現在地である旅館を指で指すとそのままグイッと東に動かす。

指が止まつた場所には神社を示す小さなマークが森の中にポツンとあつた。

「寂れ過ぎて誰にも忘れられて名前が亡くなつたから亡き神社。昔はそれこそ何か大事な神様を祀つてたらしいけど、今じゃ誰も近寄らないボロい神社さ。夏になると若い衆が肝試しによく行くみた

いだけど也

「き、肝試し……」

「」べ、と葉月が唾を飲み込む音が聞こえたが焰佳は話を続ける。

「神社つづりても、大きくも小さくもない中途半端な鳥居の奥に小さな社がポツンとあるだけ。『利益なんて昔に消えちまつてると思うんだけど水織はよく行くんだよ。アタシと喧嘩して負けた時とかにや』

「ふうん……ちょっと、行ってみようかな」

「ふふふ。確かに何にもないってのはホントだけど、実はちょっとした噂話があつてね……」

急に焰佳の声のトーンが下がつて思わず葉月がビクッと体を震わす。

そんな葉月の反応を見てか、焰佳の顔が一瞬マリと少し意地悪そに口の端をつり上がつた。

「その神社、神隠しがあるそうだよ」

「神隠し……？　あの、突然人がいなくなっちゃつていう、あの神隠し？」

不安げな顔の葉月、少しからかうつもりだったのだがその表情は本気で心配しているようだつた。

「やつれ。ずっと前に婆ちゃんから聞いたんだけど、昔神社に行つたお客さんが消えたつて大騒ぎしたんだつてさ」

「その人、どうなつたの？」

「ううん……どうだつたかね。アタシは覚えてないや。小さい時、それこそ十にも満たない時に聞いた話だからね」

「そうですか……」

焰佳は軽く肩をすくめた。

「ま、そういう噂があつたってだけさ。この現代でのバカが神隠しに遭うことなんかないよ」

「……でも、ますます行つてみたくなったかも」

「はあ？」

今しがた怖がつてなかつたかい？　と言おうとしたが、葉月の横顔を見て口を噤んだ。

怖い話をして脅かしたはずなのに、今の葉月はどこか遠くを懐かしむような、それでいて少し寂しそうな顔をしていたからだ。

「……まさか、神隠しに遭いたいのかい？」

「え……？　あ、いや、その」

「ずいぶん変わった人だね。神隠しつてのは、この世の何処でもない場所に連れて行かれてしまつて話だよ？　現実逃避でもしたいのかい？」

「そ、そうじやないんだけど……」

「……？」

イマイチ歯切れの悪い葉月を見て焰佳は少し眉をピクつかせる。確かに葉月は真面目で大人しく良い子なのだが、少し遠慮がちでおどおどし過ぎな気もする。

強気な自分の性格のせいか、焰佳はそんな葉月の態度がほんの少しだけ苦手だった。

「どつか行きたい場所もあるのかい？　それこそ、神様の力でもないと行けない場所か」

「そう……だね。神様なら、私の行きたい場所に連れて行ってくれるかも」

「何処さ?」

「それは……」

葉月の顔が、懐かしさと寂しさが入り混じったような複雑な表情になつた。

「……幻想郷、かな」

「幻想郷……?」

それは、「冗談か何かのつもりだったのだろうか。
でも冗談なら何故、葉月はそんなに寂しそうな顔をするのだろうか。

焰佳はその表情の真意が少しだけ気になつたが、結局それ以上何も言わなかつた。

第一話 旅館『暁の湯』（後書き）

主人公は少年、しかもちょいスケベらしい……？

そして何故かオレの脳内では水織君の声が朴？美さんボイス。

前作キャラの正体は紅葉記の主人公『時雨葉月』ちゃんでしたツ。紅葉記から成長して今やぽんきゅつぽんの大学生となつてます。

え？ 紅葉記で死んだって？

そ、そ、うだつたつかなあ……？ w

第一話は明日公開で～す。

第一話 名もなき神社

水織の手には『魔法の手』が備わっている。そんな突拍子もない話を祖父から聞いたのは今から十年ほど前、水織がまだ小学生にも満たないころだった。

「『魔法の手』…………って何？」

幼い水織が小さな手の平を開いたり閉じたりしていると、祖父の委泉はカツカツカツと老人にしては妙に甲高く元気の良い声で笑つた。

「魔法の手つちゅうもんはな、儂と同じ手つて」とじゅよ
「じーちゃんの手……？」

委泉の手の平に、自分の手を重ねる。

当然だが水織の手の平よりも委泉の手は何倍も大きい、しかし大きいだけでそれ以外の差異はない。

強いて言つなら少し皺があるとかそんな程度。

水織が不思議そうに首を傾げていると、委泉は再び大きな声で笑つた。

「水織、お前さんもお風呂に入るじゅう」

「うん、入るよ」

「儂はな、お風呂の温度や性質を触れただけでわかるんじゅよ」

「おんじゅや、せこしつ……？」

温度はともかく、流石に小学生にも満たない頭で温泉の泉質など理解できるわけもなく、水織の頭の上では疑問符が踊り出す。

委泉は再び大口を開けて高笑い。

「カツカツカ！ まあ、まだわからんかもな。でもそのうちわかるさ。儂の血を引く男衆はみんな『魔法の手』が備わるからの」

委泉の大きな手の平が、水織の小さな頭をわじづかみにしてくしやくしゃと乱暴に撫でる。

「そのひつか、水織の魔法の手が必要になる時が来るかもしねんのう。そうしたら手伝っておくれ」

「うん。わかった」

微笑む水織に、委泉は穏やかな表情で言葉を続けた。

「いつか、その手で誰かを幸せにするんじゃよ。それが『魔法の手』を持つ人間の唯一の使命じやから」

「……？」

そう言つて、委泉は少し憐れな笑みを浮かべて……

・ · ·

「 ッ

気がつくと、ボロボロに朽ち果てた屋根の一部が視界の正面に飛び込んできた。

「そつか、俺寝してたんだつけ。ふわ……あ」

よ、と小さな掛け声と同時に勢いをつけて跳ね起きる。

いつも見慣れた光景をぐるりと眺めると、大きく腕を伸ばしてもう一度だらしなく欠伸をした。

今水織がいるのは、旅館からまっすぐ東に行つたところにある小さな神社、通称『名も亡き神社』。

ほとんど機能していないような道を抜けた森の中に、こじんまりと開けた空間にこれまたこじんまりとした社がぽつんと建っている。社正面へと続く道には塗料の剥がれかかった鳥居がいくつも連なつて並んでいて、見様によつては少し不気味だ。

子供がぐぐるには少し大きくて、大人が通るには少し屈まなければならぬ何とも中途半端な鳥居の道を歩き、水織は少し体を動かしながら神社の正面を振り返る。

「……」

かつては何か偉大な神様を祀つていたらう社にそんな面影など微塵もなく、ただ力無く朽ち果てた哀れな廃墟と化していた。

昔の人は何を思い、ここで祈りや供物を捧げていたのだろうか。

「ま、いいや」

取水場まで行って水を一口飲むと、先刻の出来事でカツとなつていた体を少し冷やす。

……それは言つまでも無く葉月のことが原因だった。

「しかしまさか、葉月さんとぶつかるとは思わなかつたなあ。あん時顔に当たつたのつて、やつぱり、紛れもなく……ッ」

顔面に伝わつた柔らかい感触が再び脳内で忠実に再現され、否が

応でも顔が真っ赤に染まる。

少なくとも、いやもしかしたらそれ以上……ゴクリ。

頭の中で妙な妄想が膨らんで、今自分は恐らくくでもない顔をしているはずだろ。

首をブンブン振つて雑念を払つと水織はしばしほんやりと空を見上げた。

「いいよなあ葉月さん。美人で、優しくてスタイル良いしさあ……」

短気で乱暴な自分の姉とは大違い。

何かとあればちょっとかに出していくし小さな」とでも口づねるべく叱つてくる。

顔立ちはともかくとして、しかしそのスタイルはまな板なんて言葉じゃ温い、もはや絶壁だ。

絶壁は絶壁でも捕まる部分など全く存在しない断崖絶壁。

どうせなら葉月が姉になつてくれればよかつたのに。

そうすれば毎晚のお風呂が楽しみで仕方ないのだが、……

と、ひとしきり思春期にありがちな妄想を浮かべて呆けて、それから水織は神社の端の方へと歩いていく。

そこはちょうど見晴らしの良い崖となつていてこの町のほとんどを一望することが出来た。

実家であり、この辺りで（姉曰く）一番立派な旅館。

そこから南に伸びる道を往けば麓の温泉街で、そこから町の中心部に続いて一日に数回しか電車が来ない小さな駅が見える。

今ちょうど電車が走り出しているよつだ。

水織の記憶が正しければ、あの電車が出発するのは午前十一時十六分のはずだから、恐らく今はそんな時刻なのだろう。

「でも、これからどうしようか。何にも持ってきてないし、特にすむこともないし」

面倒な仕事を押し付けられそうになつてそのまま逃げてきたせいで暇潰しになるような物は一切持つていなかつた。

試しにジャンパーのポケットに手を突っ込むが……案の定何も入つていない。

旅館に戻れば買ったばかりのゲームや漫画などがあるのだが、姉から逃げているというのに戻る理由も無く、仕方なく社の縁側に腰をかけてボーッとすることに決めた。

今日は学校は休みだし、宿題も無い。

ちなみに水織は中学三年生。

本来なら進路やら何やらで悩むのが常なのだが、水織は実家の旅館を継ぐという話になつてるので進路の話はとりあえず考えなくていいことになつていて。

……あくまで、とりあえず、だが。

「オレに旅館継がせるとか、爺ちゃんは何を考えてたんだろうな……

……ん？」

取水所を出てもう一度縁側に戻ろうとして、不意に何者かの気配を感じ足を止める。

周囲に意識を向け全身を使つて探る。

ガサ、と左の方から落ち葉を踏みしめるような音がした。

物音はちょうど水織が昼寝していた縁側の反対方向からだ。

「…………元にはオレしかいないはずなのに、誰だ？」

寂れ過ぎて、年寄りですら滅多に来ないこの場所にいつたい誰が来るといつのだらうか。

観光客が道を間違えてここに来たのか、それとも昼間つから酔っぱらったアホでも来たのか。

……それとも、噂に聞く神隠しの犯人だらうか？

「…………」

息を潜め、なるべく音を立てないよう足を忍ばせ反対側へと向かう。

近づくにつれガサガサと落ち葉を踏む音と、それから何か咳き声のようなものが聞こえてきた。

「ないわあ。何処にいらっしゃったのかしり……」

「……女人の、声？」

甘つたるく妖艶な咳き、しかしそれは水織が全く聞いたことのない声だった。

この町はそう大きな町ではない、むしろどちらかと言えば寂れた田舎町で数少ない町人のほとんどの顔や声なんかはだいたい記憶している。

しかし、その声は水織の記憶には無い声だった。

恐る恐る首だけ覗かせ、目の前の光景に水織は思わず息を呑んだ。

「……ッ！？」

美人、それも今まで見たことも無いようなどんでもない美人が、その綺麗な顔を悔しそうに歪めながら落ち葉を両手でかき分け、何かを探しているかのように乱雑に払いのけていた。

着物とローブを足して一で割つたようゆつたりとした出で立ちに、腰の辺りまで伸びる艶やかな金の髪。

一心不乱に何かを探すその瞳は紫紺に染まつていて、全身から妖しげな魅力が漂っている。

今まで見たことも無い人でしかもどびきりの美人、いや美少女……

……か？

妖艶なその横顔からはハツキリと年齢をつかがい知ることが出来なかつた。

そんな美人を田の前にして、水織の手が微かに汗ばんで変な緊張感が全身を包む。

いつたい何処の誰なのだろうか。

旅館の客？　いや、ここ最近のお客さんになんな美人は来ていない。というか、葉月さんより美人なんじや……いやいや、それはない。だけど負けず劣らずな美人であることは間違いなく……

「……何方？」
どなた

「うう、わ！？」

そんな水織の熱い視線に気づかない訳も無く、紫紺の瞳をした美人にあつさり見つかってしまった。

途端に全身に電撃が走り自然体を強ばらせてしまつ。

「あら、ビックリさせちゃつたかしら？」
「い、いえ！　何でも、ない、です！」

緊張のせいいか上ずつた片言の言葉で、しかも機械的な返事しか出来なかつたが、慌てふためく水織を見て美人はクスリと笑つてくれた。

水織の体がますます硬直する。

「『めんなさいね。落し物を探してゐる最中で……』
「お、落し物？」
「ハンカチなの。すゞく氣に入つてるものなんだけれど見つからなくて……」

たかがハンカチを落としただけだというのに、彼女の表情は心底困った様子だつた。

美人がそんな困った表情をして困つてゐる。

ならばここで水織が取るべき行動はただ一つ。

「ど、どんなハンカチなんですか？」

水織の言葉に、彼女は一瞬驚いたような表情を浮かべ、それから薄つすらと小さな笑みを見せた。

刹那見せたその表情は、まさにしたり顔とでも言つべきか。

「手伝つてくれるの？ ありがとう。優しいのね」

「い、いえ！ これぐらいは、別に……！」

火照る顔を見せまいとぐるりと回れ右して落ち葉を漁る。

一心不乱にハンカチを探す水織の背中を、彼女は品定めでもするかのようにじつと見つめていた。

「レースのハンカチなの。ポケットから出したら、風に舞つて何処かへ消えてしまつて」

「れ、レースのハンカチ……」

背筋がゾクリとするほどの甘い声を耳にするなど、十五年の人生で初めての体験だつた。

火照つて体が熱いのか、それとも声に惑わされて熱いのか、もはや区別がつかないまま落ち葉をひつきりなしにかき分ける。

とにかく体を動かしていないと、どうにかなつてしまいそうだったからだ。

やがて落ち葉を漁る水織の指先に、何か滑らかな感触が伝わつた。

「あつた！ ありましたよ！」

バツと手を引っこ抜いて握りしめたレースの白いハンカチを彼女に見せると、パンと軽く両手を叩き嬉しそうに微笑んだ。

「それよそれ！ ありがとう助かったわあ」

「い、いえ！ これぐらい、お安い御用で……へへッ」

軽く手ではたいてからハンカチを差し出す。と、何故か彼女の手がハンカチではなく水織の手首をキュッと握りしめた。

予想外の出来事に思わず目が丸くなり、水織の全身が再びカツヒ火照り出す。

彼女の妖艶な面がグッとズームして、桜色の唇が魔法の言葉でも囁くように小さく開く。

「わ、わわわ……！？」

「ふふ。何をそんなに恐がっているのかしら？」

「こ。恐がってるんじゃなくて、えと、これは」

「せつかくハンカチを見つけてくださったなんですが。何かお礼をしなくちゃ」

「お、御礼！？」

ならばどうして手首を握りしめるのか。

彼女の滑らかな手は振りほどこうにも頑として動かない。

……いや、別に振りほどく気などさららないのだが、というか御礼とはいつたい何なのだろうか。

十五年で培われた脳がフル回転して彼女の言つ“御礼”を全力でイメージするが……あまりにピンクな想像をしたせいか一瞬でオーバーヒートしてしまった。

「心の中身が外に出ちゃつてるわよ。ふふ、可愛いわねえ」

破壊力満点の言葉が水織に直撃。

水織の精神はあつという間にバランスを崩し、頭の中の下心と良心がミキサーに突っ込まれたかのようにじりじゃ混ぜになつていく。そんな少年の心理など露知らず（いや、そうと知りながら楽しんでいるように見えるが……）手首を掴んでいないもう片方の手でスツとその場で真一文字に切り裂くように難いだ。

突如空間が裂け、その奥に不可思議な空間が映る。それはさながら、空間二出来亡すき間ニシテ言

水織の両目が瞬時に見開かれ、今の今まで全身を包んでいた熱気

が嘘のように消え失せる。

「なんだ、これ！？」

田の前で起る、常軌を逸した謎の現象に水織の体が小刻みに震える。

何だこれは。

どうして目の前に裂け目が、この体を這うような視線は何だ、どうして彼女は、それを平然とやってのけるんだ。

「御札は、貴方を素敵な世界へご招待、何てのはどうかしら」

どうして彼女は、こんなにも愉しそうな表情をしているんだ。

あれこれ思案を巡らす水織の意識が、まるで真上から鉛で出来た

意識が闇の奥底に引きずり込まれるのにたゞどの時間は掛からな

かつた。

意識を失う刹那、水織が記憶していたのは彼女の綺麗な笑顔と、すき間の向こうで跋扈する無数の瞳だけだった。

・・・

水織の姿が忽然と消えた名も亡き神社。

彼女、八雲紫はひどく愉しそうに微笑みながら、神社の壁にもたれ掛かり頭上の紅葉の葉を眺めていた。

「……少し、色付きが薄いわね」

ひらり、ひらりと紫の膝下に落ちる紅葉の葉は、紅にやや近い朱色といった色をしていた。

それはただ単に落ちた葉が紅葉を迎えていなかつただけなのか。それとも、何か別の要因があるのか。

「ま、私の仕事じゃないけど……あら」

もう一度すき間を開こうとして手を薙ぎました瞬間、何故か紫の表情がまたも愉しそうな笑みを浮かべた。

第一話 名もなき神社（後書き）

序章、終了。

明日から第一章が始まります。

早速の評価ポイント、お気に入り登録ありがとうございます。
とはいって、全然お話を進んでないのに評価してもいいぢやつといいん
ですかね……；

第三話 少年、姉妹と邂逅す

幻想郷、北端に位置する妖怪の山。

文字通り数多の妖怪が住まいの山の奥地で、秋静葉は一人紅葉を手にしため息をついていた。

「ううん……やつぱり、ほんの少しだけ色が薄いかなあ」

手にしていた紅葉は確かに赤く色づいているのだが、静葉は憂鬱そうに嘆息した。

紅葉を象った髪飾りに、燃えるように赤いドレススカート。今しがた手にした紅葉の木を見上げ少女は再び嘆息する。

「私たちの信仰が薄くなっているんだよお姉ちゃん」

「……穂子」

静葉が振り返ると、果物の入ったカゴを抱えた妹の姿があった。

「私たちももつと頑張ろうよ。守矢の神社のことまではいかないけど信仰を集めなきゃ」

「だけど、私たちってそんなに大きな神様じゃないんだよ？ 頑張るって言つても難しいと思う」

「それはまあ、そなんだけど……」

カゴを小脇に抱えたまま穂子が器用に腕を組む。

確かに静葉や穂子は守矢の神社ほどの高位な神というわけではない。秋姉妹と呼び称されながら、しかし一人は秋全体を司る神という

わけではない。

姉の静葉は紅葉を、穂子は豊穣をそれぞれ司つている。

他にこれといった力無しに信仰を得るというのは聊か厳しいものがあるかもしない。

何か、妙案はないだろうか。

一人がうんうん唸りながら思案していると、先に静葉の方からアイディアを思いついた。

「そうだ。博麗の巫女さんに何か助言してもらつたらどうかな」

静葉の妙案に何故か穂子の表情が曇り難色を示す。
やや顔を引きつけながら首を振つて、

「だ、ダメだよお姉ちゃん。あの巫女は私を食べようとした凶暴な巫女で……」

「え？ でも、幻想郷の異変を解決してるのであの人だよね？」

「お姉ちゃんも前に戦つたでしょ？ 覚えてないの？」

「ううん……覚えてるような、覚えていないような」

曖昧な姉の言葉に穂子がため息。

しかし、守矢の神社に相談に行くよりかは博麗神社の方が数段行きやすいかとも思った。

守矢神社は一柱の強力な神がいるせいか、少し空気が張り詰めていて行つても自分たちが萎縮してしまうような気もする。
神を祀っているのかいなか、少なくとも博麗神社ではそんな緊張感は感じたことが無い。

どちらかといえば博麗神社の方が気軽に入つて行けると思つ。
巫女がだらしないといつ噂は……この際気にしない。

「……でも、あんまりアテにならないんじゃないかなあ」

「その時はその時でいいよ」

「あひ。お姉ちゃんはマイペースだなあ。結構深刻な問題なのに
「じやあ早速行こうよ」

トコトコと山の斜面を降りようとする姉の後ろ姿を穂子が追いかける。

どうせ行くなら飛んで行こうよ、と言いかけた瞬間静葉の動きが
穂子の目の前でピタリと止まり、思わず背中に顔面からぶつかって
しまった。

「あたッ！　お、お姉ちゃん何で急に止まつて」

「……あそ」、誰か倒れてる」

「え？」

静葉が指差す方向、ちょうど木々の間にぼっかりと出来た空間
に少年が一人大の字で倒れていた。

「た、大変だ！　行こ、お姉ちゃん」
「うん！」

一人が駆け寄り、倒れていた少年の頭を静葉が膝で枕する。
意識があるのかないのか、少年は時折小さなうめき声を上げてい
た。

「穂子、川に行つてお水持つてきて」
「わ、わかった」

存外冷静な姉の言葉に驚きつつも穂子が駆け出す。
静葉は瞳を閉じ軽く息を吸うと少年の額にそっと手を当した。

「……あんまし、効果があるかはわからないけど」

自分の力で簡単な応急処置を施すと少年のうめき声が僅かだが安らかな呼吸に戻る。

ホッと安堵した直後、穂子が自分の帽子を器にして水を汲んできてくれた。

なるべく苦にならないよう、少しづつゆっくりと水を流し込む。少年の体が微かに震えたかと思うと、その瞼がうつすらと開いた。

「い、い、い……は」

「気がついたよ、お姉ちゃん!」

「まだ無理しないで。ほら、もう一口水を」

少年は促されるまま帽子の水を飲み干す。

それからすぐに意識が回復して、少年は自分で体を起こせるようにまで回復した。

「キミ、大丈夫?」

「あ、ああ何とか……よくわからないけど、助けてもらつたみたいだな。ありがとう」

「いいのよ。それより、キミ何処から来たの?」

「は……? 何処、からつて……」

穂子の質問に少年の顔が歪み、それから突然周囲に視線を向けた。

右も、左も、少年にとつては見覚えのない景色。

少年の顔は、まるで見ず知らずの土地に迷い込んだ子供のような、好奇心と戸惑いに溢れた複雑な表情だった。

「い、い、何処だ? オレ、確か神社で美人な人を助けて、それで……」

「神社? この辺に神社なんてないけど……キミ、もしかして外の世界の人なの?」

「外の世界、……だつて？」

穂子の言葉に少年は驚き突拍子もなく叫んでしまった。

その言い方では、まるで自分が別の世界から現れたような言い方ではないか。

「……こには何処だ、教えてくれないか」

「こには妖怪の山だよ」

静葉が素直に答えるのと同時に少年の顔が曇る。

「……今、何て言った？」

「だから、妖怪の山。こには幻想郷の北端に位置する妖怪の山だよ」「げ、げんそうきょう？ ようかいの……やま？」

彼女たちの言つていることがチンパンカンパンで、頭の中がぐらりと揺れたような気がした。

青ざめる少年の顔を見て、静葉と穂子は顔を見合せた。

「……私たちが事情を説明しても、わかり辛いかもしね」「うん。外から來た人つて、確か博麗神社に連れて行けばいいんだつけ？」

「二重の意味で行く理由が出来ちゃつたってわけか。まあ放つておくわけにもいかないから仕方ないか」

乾いた帽子を田深に被ると、穂子は立ち上がり少年に手を差し伸べた。

「ほり、男の子ならわかつと立つ！ これから博麗神社つて所に連れて行つてあげるから」

「はぐれい、じんじや……？」

「詳しいことは向こうでお話するよ。ここだと色々と危ないし……

あ、そうだ。キミ、名前は？」

「草津水織……だ。君たちは？ 恩人の名前ぐらい聞いておきたいんだけど」

「私は静葉、秋静葉つていうの」

「私は妹の穂子。で、まずは博麗神社に向かいましょうか」

そして二人は山の斜面を下りはじめ、水織もそれに続く形で後を追つた。

・・・

一人の後を追つてたどり着いたのは、小高い崖の上にひょんと建つ神社だった。

鳥居をくぐつた正面に、ほびほびの大きさの社が建ち、横には物置と思しき小さな蔵がある。

「ここが、博麗神社つてどこか」

「まずは巫女さんを探さないと。あ、その前にえつと……」

「お姉ちゃん、何してるの？」

社正面の賽銭箱の前に立つ姉の姿に穂子が顔をしかめる。すると静葉は心底不思議そうな顔で振り返つて、

「だつて、神社に来たらお賽銭を入れるんだよ」

「……お姉ちゃん、ここは巫女の事全然知らないのかしら」「む……お金なんて持つてたかな……」

「え……？」

すると水織も静葉の横に立つて賽銭を入れようとしていた。
外の世界の人間だから巫女の噂など微塵も知らないだろうが、穢子が驚いたのはその事ではない。

「水織、あなたお賽銭入れるの？」

「当たり前だろ。神社に来たら必ず五円玉を投げろって爺ちゃんに教わったんだ」

ズボンのポケットから奇跡的に飛び出した五円玉を握りしめるとひょいと放り投げる。

木製の賽銭箱の入り口で一度二度バウンドしてから五円玉がコトン、と寂しい音を立てて吸い込まれていった。

同じく静葉も賽銭を投げ入れ鈴を鳴らす。

「…………」

單純に驚いた。

外の世界でも、賽銭を投げるという習慣がちゃんと残っていたことに。

いつだか聞いた話では現世の人間はほとんどこいつたことをしないとの話だったのだが……

「いいわねえ 賽銭の響き。心が躍るつてもんよ」

不意に声が響き視線を向けると、赤と白の巫女服に身を包んだ少女がのんびりとした歩調で現れた。

黒髪を大きな赤いリボンで結わえた、巫女というには少しハイカラな格好だった。

巫女服も腋全開で何とも奇妙なファッショングラスである。

「しかしま、妙な来客ねえ。そこの男の子はともかく、焼き芋姉妹に用は無いわよ」

「だ、誰が焼き芋姉妹だ！？」

「焼き芋……？」

「そういえば、さつきから焼き芋のような甘い香りがするようなしないような。」

巫女服の少女は水織に近づくと、訝しげな視線で水織の全身をくまなく観察してきた。

「……どう見てもアンタが外の人間よね。私は博麗靈夢。はくれいれいむ見ての通りの素敵な巫女よ」

「素敵な巫女……」

何がどう素敵なのかさっぱりわからない。

パツと見清清楚な容姿で可愛らしいのだが、神社で見た美人や葉月さんには圧倒的に劣る。

申し訳ないが、胸が足りない。

すると靈夢はぐるりと踵を返しちょいちょいと手招き。

「立ち話つてのも何だしこっちへこりつしゃいよ。お茶と菓子^{トベリ}ぐらいは出すわ」

「だつて。ほら、穂子も行こ」

「あの、靈夢さん。私たちも話が

「あーはいはい。まとめて聞いてあげるからさつとこと來なさい」

そして案内された神社の縁側で申し訳程度の茶菓子が用意される。湯のみの中の茶は薄い色をしていた。

一通りの説明を終えたころには、湯のみの茶はすっかり冷え切っていた。

「……つまり、ここはオレのいた世界じゃない、異世界つてことですか」

「ま、そんなところよ」

靈夢が冷めた湯のみをする。

にわかには信じられない現象。

自分の今の状況が理解できず、呆然と言葉を失くす水織。

異世界。

そんな言葉はゲームや漫画の話だけかと思っていたのに、いざ自分が巻き込まれるだなんて夢にも思わなかつた。

「どうすれば、元の世界に戻れるんですか」

「結界を操つてる人に言つて頂戴。当の本人はまだ帰つてこないけど……」

「あら、呼んだかしら？」

不意に声が響き全員が一斉に振り向く。

聞き覚えのある声、それは水織が神社で出会つたあの妖艶な美女の声。

そして振り返つたその先に、紫紺の瞳の彼女はいた。

「あ、あんたは……！？」

「自己紹介がまだだつたわね。八雲紫やくもねりよ。お久しぶり、水織君」

クスリと微笑を漏らし、優雅に口傘をさす美女。

あの時見た愉しそうな表情でこちらを見つめている。

「どう？ 素敵な世界でしょ」「

「素敵な世界つて……！ 何で、オレをここに？」

「ん？ だつて貴方退屈そうにしてたじやない。だからじつちに誘つてあげたの」

「だ、誰もそんなこと頼んで……」

「彼はともかくとして、彼女たちは何？」

「だ、誰もそんなこと頼んで……」

急に話が変わり視線が秋姉妹に注がれる。

集中する視線の中、口を開いたのは穂子だつた。

「あ、あの！ 実は相談があつてここに来たんです」

「相談……？」

「いいわよ。私も協力してあげる。話していらっしゃいな

「ちょっと紫！ 私はまだ何も……」

靈夢の制止を余所に紫が勝手に話を進めようとする。
紫、^{ゆかり}とこうのが彼女の名前らしい。

こんな状況だつたが、水織はこつそりと心の中に刻み込んだ。穂子が真剣な表情で靈夢と紫を交互に見据える。

「実は、私たち信仰が集まらなくて困つてゐるんです。それで、どうにか信仰を集める良い手立てはないものかと助言を頂きたく、ここまで來たんです」

「信仰……？ そういうのは信仰に溢れた神社に相談しなさいよ。

私は関係ないわ

「やつぱり……」

予想通りの言葉に穂子の肩ががつくりと落ちる。
静葉も、何処となく寂しそうな顔をしていた。

「じゃあこの件はお終いね。そういうのは守矢の神社にでも行ってきなさ」

「人の役に立てば、必ずと信仰が集まるんじゃないかしら」

靈夢の言葉を遮り紫が唐突に口を挟む。

姉妹の顔が同時に上がつて紫に向き直つた。

「人の役に、立てば？」

「そうよ。力とか無くても、身近な所で人を助けていればある種信仰に近いものを得られるんじゃないかしら」

「紫、まさかアンタ……！」

微笑む紫、顔を引きつらせる靈夢、そして不安と期待が降り混ざったような表情の秋姉妹。

そして、さっぱり状況が読めず取り残される水織。

一斉に集まる視線を浴び、紫は悠然とした態度で一步踏み出し口の端をつり上げる。

「貴方達、銭湯って知ってる?」

心の底からこの状況を楽しんでいる、紫はそんな笑みを浮かべていた。

第三話 少年、姉妹と邂逅す（後書き）

かなーり強引な展開ですが気にしない。

そしてここで書き溜め分が終了。

明日からは少し更新頻度が落ちますのでご了承ください。

さて、これを上げ終えたらダークソウルだつぜー！

第四話 ゼロから始まる銭湯経営

「……よ」

紫の案内でたどり着いた一行を向かえたのは今にも崩れ落ちてしまいそうなほどボロボロに朽ち果てた廃墟だった。

場所は妖怪の山の麓よりさらに南下した中途半端な場所で、少し先には村のようなものが見えた。

廃墟の大きさはかなりのもので小さなお屋敷といつても差し支えのない大きさなのだが、その窓や戸はひび割れていて屋根の瓦は所々剥がれ落ちたり穴が開いている部分もある。

幽霊屋敷、といった言葉が良く似合いそうだった。

「……これ、何ですか？」

穢子の至極シンプルな質問。

いきなり銭湯を知っているかと聞かれ、今度は意味もわからずこの廃墟に案内された。

何の説明も無しにここに連れてこられれば理解出来なくとも不思議ではない。

「ふふ。なかなか趣のある建物だと思わない？　これは私が外の世界で偶然見つけた銭湯なの」

「銭湯つて……」

どう McConnell に見よとも目の前の建物は廃墟である。

そして、まるで自分の家でも自慢するかのように得意気に胸を張る紫の姿に一同が沈黙。

それを無視して紫は言葉を続ける。

「これを直せば銭湯として再利用出来るでしょう？ そうすれば、

たくさん的人がこの銭湯を利用してくれるわ」

「いや、これじゃ廃墟でしょ。こんなボロイまんまじや人なんか入らないで、逆に妖怪が棲みつくわよ」

「それは困るわ。私の銭湯なのに」

「アンタねえ……」

「それで、秋のお二人さん」

『は、はい！』

静葉と穂子が同時に返事して紫に向き直る。

「『』を貴方達で改修して、人々の癒しを提供できる銭湯として使えるようにしてみてはどうかしら」

「わ、私たちが」

「銭湯を……」

紫の笑顔に見つめられ、困惑する姉妹。

半眼で睨む靈夢、話についていけないので紫を凝視する水織。

「……ち、ちょっとだけ時間をください」

「どうぞ？ だけど、なるべく早くして頂戴ね」

許可をもらい穂子が静葉の手を引っ張つて別の場所でしゃがみ込んで小さな会議。

「どうする？ せんとう、つていうのをやって本当に信仰が手に入るのかなあ」

「わかんないけど……何だか、楽しそうじゃない？」

「ええ？ お姉ちゃん、本気で言つてるの？」

「本気だよ？ 錢湯つて、どんなもののが知らないけど」「……でも、今のところ信仰に繋がりそうな手段ではあるのよね」

答えは出た。

静葉と穂子は立ち上がり紫に振り返ると一人で首肯してみせた。

「わ、わかりました。やります、やってみます！」

「うふふ。こうやって地道に頑張ればきっと信仰を集められるわ。頑張つてね」

「…………アンタ、こいつは妖怪よ？ こんな胡散臭い言葉を信じて頑張るつて本気で」

「ほ、本気です！」

声を荒げる穂子の剣幕に驚き靈夢の言葉が止まる。

「頑張らないと、いけないんです。でないと秋が、どんどん寂れて……」

「…………そう。なら、精々頑張りなさい。私はもつ用もないし行くわ」

「私も野暮用があるし、そろそろお暇するわね」

「ちよつと待つたああああ！」

踵を返す靈夢、すき間を開く紫の手と足が止まる。

全員にすっかり忘れ去られていた水織が全力で叫び思いの丈をぶつける。

「お、オレはいつしたいどうしたらいいんだ!? 元いた世界に帰りたいってのに、何の話題にも出ないじゃねーか!」「ああ、忘れてたわ」

「忘れるなー?」

あまりの扱いの悪さに水織の怒り爆発。

靈夢はかなり面倒くさそうにため息をついた。

「しょうがないわねえ……私の神社にいらっしゃい。すぐに元いた世界に帰してあげ」「ちよっとお待ちなさい」

「世界に帰してあげ」

靈夢の後を追う水織の手を再び紫が掴む。

振り向いた瞬間、紫の顔が至近距離に近づいて思わず赤面してしまひ。

「な、何ですか」

「貴方、確かに実家が温泉旅館を経営しているのよね」

「何でそれを知ってるんだ? ってか、それがどうかし……」

「どう? あの子たちと一緒に銭湯やらない?」

「は、はあー?」

紫の言葉に水織が叫ぶ。

意味がわからない。

突然こんな場所へ落としておいて、今度は自分に銭湯をやれと? あまりに身勝手かつ理不尽過ぎる言動に水織の堪忍袋が限界を迎えるとしたその瞬間、耳元に妖艶な囁き声が響く。

「……この女の子、結構可愛いでしょ? もしも私みたいな可愛い

子が毎日銭湯に行つたら……?」

「……ツ!」

何て事を言うんだこの人は。

それは思春期真っ只中の水織には効果抜群の恐るべき魔性の囁き。顔から全身までもを真っ赤にさせながら、下心と本心の混ざり合つた苦悶の表情を浮かべた。

「……で、でも！ オレは全然関係ないんだしこんな訳のわからぬ世界にいられるか、オレは帰り……たい！ だがしかし、紫さんのような美女が毎日！ 每日だと！？ 每日銭湯に来て一風呂浴びてタオル一枚で牛乳飲んで……じゃない！ だからオレは無関係なんだ！ だから紫さんの入浴シーン何かに吊られるほど脆弱な人間であるはずがない！ 訳が無い！ でも帰らないと姉貴が葉月さんが心配して、だけど入浴シーン……ううあああああ！？」

「紫、コイツは何なのホント」

「可愛いでしょ。心の中で思つたことを全部言ひ切ひやうのよ？」

「世間一般ではそれをバカと言わないかしら」

悶絶する水織を見つめる紫の顔が心底楽しそうなのは言つまでもなく、しかしこのまま悶絶してもらつていては埒が明かない。

紫はむつ一度近づき、普通に言えぱいいものをわざと水織の耳元で囁く。

「でも、知識はあるのでしょうか？ センカク助けてもらつたのなら、その恩に報いるべきではなくて？」

「た、助けてもらつた恩つて……」

水織の視線に姉妹が映る。

どこか不安げな表情をしている一人を見て、水織は脳裏で祖父の言葉を思い出す。

「……受けた恩は必ず返す。女の子だったら、三倍返し」

「あらあら。素敵な言葉ね」

「あの子たち、銭湯を知ってるのか？」

「さあ？ どうかしら」

「…………」

つまり彼女たちは銭湯を知らない、と。

彼女たちは、この世界で最初にお世話になつた姉妹だ。

このまま助けられっぱなしで帰つてしまつたら後ろ髪引かれるような気持ちになるだろうし、何より天国の祖父に怒られそうである。

「…………わかつたよ。あの子たちを手伝う。それが、紫さんの狙いなんだろ」

「あら、狙いだなんてそんな悪者みたいに言わないで頂戴な」

しかしこの至近距離でその笑顔は反則だと思う。

水織は火照る顔を反らし、それから姉妹の元へ向かつた。

突然水織が近づいてきたせいか一人の表情が微かに揺れる。

「あ、あの……？」

「助けてもらつたお礼がてら、君たちと協力することになった。よろしくな」

「キミが、私たちに協力……？」

穢子が怪訝そうな顔をする。

外の世界から来た人間がいつたい何を協力できるというのだろうか。

水織の表情も、何処か自信なさげで頼りなかつた。

「じゃあ、後はよろしくね」

「私も帰るわ。じゃあね」

三人が協力するとなつた瞬間、一人は逃げるようにその場を去つて行つてしまつた。

呆然と残される秋姉妹と、水織。

ほんのり肌寒い秋の風が三人の前を横切り水織がふるふると身を震わせた。

「……ここで立ち話してもしようがないし、中に入らうぜ」

水織が戸に手をかける。

今日からここで厄介になるのかと思うと少し気が滅入りそうになる。

だが、これも全ては紫や来る美女の入浴きた……もとい、秋姉妹に恩を返すためだ。

水織はこれから始まる生活に不安と期待に胸を膨らませ、意を決し戸に掛けた手の力を込めた。

廃墟の戸には鍵がかかっていた。

・・・

「……その、なんだ。いきなり閉め出しきらうとは思わなんだ」

結局廃墟に入ることが出来ず、三人は妖怪の山を歩いていた。しかし何の当てもなく歩いているわけではない。

姉妹が言つには、この山には機械に強い河童が住んでいるという話だ。

河童なんぞいるわけないので、水織は半ば聞き流していたのだが彼女たちの口ぶりからするとどうも本当にいるらしい。

ほとんど獣道といつていい細い道を抜け、やがてその先から轟々と地を鳴らす大きな音が響く。

「滝……かあ！」

その先には轟音を響かせる巨大な滝が流れ落ちていた。流れ落ちる飛沫が冷たくて心地よいが季節的にはやや寒い。

九天の滝という名前だと、横で静葉が教えてくれた。

「凄いな……うちの近くにも滝はあるけど、こんなにでかくは無いなあ」

「ねえ、水織君。水織君のいた世界ってどんななの？」

ちなみに静葉は水織を呼ぶ時『君』をつける。

水織はいらないと言ったのだが、何となく響きがいいからと、何だか訳のわからない理由だけで結局このままだった。

まあ、そこまで気にするようなことではないのだけれど。さりにちなみに、穰子には気がついたら呼び捨てにされていた。

「オレの世界つていうか、オレが住んでた場所はここと同じ感じだよ。家は温泉旅館で、田の前には赤月山つていう大きな山があって、紅葉が名物なんだ」

「へえ……紅葉が名物の温泉旅館かあ」

不思議なことに彼女らは温泉旅館はわかるのに銭湯は知らないらしい。

まあ、前者は温泉と旅館を足せばいいだけの話だからイメージも容易なのかもしれない。

「そこそこ有名な旅館で、この時期はお客さんがよく来るんだよ。

まあ、オレは大した仕事はしていないけど多少は手伝いをしてるのさ」「ふうん。でも、温泉旅館でお手伝いって凄いなあ。ちよつと尊敬する」

「そ、尊敬？」

「うん。だって、たくさんのお客さんの相手をしなくていいじゃないんでしょ？ 私はそういうの、けよつと苦手だから」

「接客なんて、慣れりやどうってことないけどなあ……」

「でもさ水織、温泉旅館と銭湯って違うんじゃないの？」

そこに穢子が口を挟む。

彼女の言つとおり、温泉旅館と銭湯じや全然違う。

そもそも提供するものがワンランク違うわけで、旅館はもちろん宿を提供するが銭湯はお風呂だけを提供する。

しかし水織にとつてはどちらも大差なかつた。

「まあそうだな。でもま、出来なくはないと思つぜ。うちの旅館にもボイラーで沸かす風呂もあつたし、それを弄つてたのは専らオレだつたしな」

「ば、ぼいらー？」

「ん？ ああ、お湯を沸かす機械のことだよ」

「ふうん……じゃあ、ますますにとつの世話になりそうだね」

「二トリ？」

まさか幻想郷に来てその名を聞くとは思わなかつた。

二トリといえば、現世を生きる人なら誰でも知つてゐるほど有名な巨大なインテリアショップではないか。

水織も小さい頃は両親と一緒に行くことがあつて、寝具「一トリ」のベッドで飛んだり跳ねたりしていたのをよく覚えている。

しかし、まさかこんなところにまで支店を出していくというのだろうか。

凄まじいなあのインテリアショップ。

「えっと、にとつせんつていうのは河童さんなんですね」

「……？ か、カッパって雨合羽の？」

「違うに決まってるでしょ。名前よ、名前」

「へ？」

今しがた頭を過ぎつていたダブルベッドが脳内から消え失せる。まさか人の名前とは思わなかつた。

「どうか、河童つて……？」

「妖怪の山の河童は技術者なんだよ。よくわかんない機械とか作つたり研究してたり」

「……『セーラージュウのやつ』なんか装備すると強くなるとか？」

「なにそれ？」

どうやらその、カッパーとは違ひひこ。

何だかよくわからない世界だ。

山の外見や植物なんかは元いた世界とほとんど同じなのに、突然妖怪とか神とかファンタジーな言葉が生活に混ざつてくる。実は夢なんじゃないか。

そう思つて頬をつねつてみたが、痛い。

目の前の姉妹も世界も消えない。

それはつまり、目の前が現実だということ。

「わからない。わからないな……」

「ほら、いっただよ水織！」

穂子の声が響いて我に戻る。

滝の前を横切りそのまま進んでいくと山の岩壁に小さな洞窟が見

えてきた。

「あそこへ、にとりちゃんは住んでるの。ちょっと人見知りな子だけど、優しくて良い子なんだよ」

「とりあえず入ってみようか」

そう言つと姉妹は躊躇にもなくすんすん奥へ進んでしまった。

「ま、待ってくれよー。」

水織も遅れて駆け出し、河童の潜む洞窟にいざ侵入。

……そういえば河童って、どんな姿をしていただろうが。

第四話 ゼロから始まる銭湯経営（後書き）

大変なミスを修正していただき、更新が遅れてしまいました；
すみませぬ……

では、また三日後ぐらいい。

感想、評価、ポイント等、ありがとうございます。
更新頻度のせいか、今作は閲覧者少なめです。

第五話 河童の機械技師

洞窟の中のはずなのに、明るい。

それは洞窟の壁に光源があるからなのだが、何故かその光は松明の明かりではなく人工的な光源。

つまり電気の光だつた。

じめじめとした湿氣漂うこの洞窟の明かりとしてはひどく場違いな気がしてならなかつたのだが、先を歩く姉妹はそんなこと微塵も気にしていなかつたのか何事もなく進んでいく。

「……何で洞窟なのに電気が通つてんだ？」

そもそも今のところの様子からして、この幻想郷という場所に機械的な文化があるとは思えない。

一応確認はしてみたが、元いた世界で見た蛍光灯とほとんど変わらなく、ケーブルは天井伝いに伸びそのまま洞窟の奥へと伸びている。

といつことは、この奥に電源を供給している何かが存在しているということになる。

それが何なのかは、容易に想像がつくようなつかないような。

「にとりちゃん、遊びに来たよ」

「お姉ちゃんつたら。私たちは遊びに来たんじやないでしょ」

「あ、そうだつた」

「はいはーい。どちらさんかな……つて、静葉ちゃんに穂子ちゃん。それと……ひゅ！？」

「な、何だ？ 今そこに誰かいたんじやないのか？」

今しがた姉妹の前に誰かが立つていたような気がしたのに、水織

が顔をのぞかせた瞬間その姿が突然消えてしまつていた。

何事かと目を白黒させていると、静葉が苦笑混じりにその場で指をちよんちよんと何かにぶつけるような仕草をして見せた。静葉の指が、何もないところでふよふよと跳ねている。

まるで見えない何かを突つづいているみたいだ。

「ことりちゃん、相変わらず人見知りだなあ。そんなに恥ずかしがらなくともいいのに」

「静葉、そこに誰かいるのか……？」

「うん。姿消しちゃつてるけど……えい」

両手をドン、と前に押し倒すと『ひやー』という小さな悲鳴と共に突然レインコート姿の少女が何もないところから姿を現し、思わず水織も『うおー』と声を漏らしてしまつた。

「あ、あわわわ……！」

「こ子がにとつた。妖怪の山一の機械技師なんだ」

「み、穢子ちゃん！ それは、言こ過ぎ……ー！」

顔を真っ赤にさせ、なおかつ両手をブンブン震わせる少女。

水色のレインコートは小柄な彼女によく似合つており、その恰好のせいなのか彼女が機械に強いようにはとても見えなかつた。

それと、帽子をかぶっているので皿の有無がわからない。

ひょい。

「うわわわー？ な、何するんだいきなり！？」

「いや、一人からアンタが河童だつて聞いたから、てつきり頭にお皿があるのかと思って」

「そ、そんなもんないやい！ つていうか、河童の頭に皿があるつてこう固定概念はどうにかならないのか！」

「そんなことオレに言われてもな……」

どうせなら妖怪絵巻でも描いた人を呪つてほしい。
といふか、普通河童と聞いたらそれしか浮かばないと思つたのだが。
それなのにいた対面してみれば。

「な、なんだよ？」「

まじまじと見つめられにとつぱ一歩後ずかる。

「いや。河童つて可愛いんだなあつて思つてさ
「か、かか……ツー？」

そんな水織の何氣ない言葉に、少女の顔が爆発寸前の爆弾みたい
に赤く明滅し始めた。

穢子もポカんと口を開けて呆けている。

何かおかしなことを言つただろうか。

何故か今度は少女の頭から湯気が出始めたのだが。

「あつわ、わわ……！」

「こどりちゃん面白ーい。頭から煙が出てるよ
「お姉ちゃん！ あれば混乱してるんだよ！」

少女、混乱中。

湯気が収まるまでけつこうな時間がかかった。

・ · ·

「……」「ほん。では改めて。私は、河城にとつ。えと、君は？」

「構わないよ。それで、三人とも何か用かい？」

「うん。実はね、私たち銭湯をやるの」

「戦闘？だから私のところに武器を作りに来てもらひたとかかな？」

「そ、その戦闘じゃなくてね」

「んん？」

「あのね、銭湯っていうのは、んつと……水織君、バトンタッチ」というか彼女たちは本当に銭湯を知らないのか。

銭湯自体は、大昔の日本から続いている歴史ある商売だと祖父から聞いたのだが、それはやはりここが異世界だからということか。

「早ー、さつきにに来る前に説明したる？……まあ、簡単に言うと無料のお風呂ってことだ」

「お風呂？お金払ってお風呂に入るのか？」

そもそもどうして風呂がわかつて銭湯がわからんのだこの娘たちは。

「そうこいつ」と。それをオレと、この姉妹と一緒にやる」とになつたのだ

「ずいぶんおかしな話だね。何でまたそんなことをやるの？」

「紫さんの入浴シ」ふあ！？」

何故か鳩尾に正拳突きを喰らった。

隣で穂子が顔を真っ赤にさせている。何故だ。

「実はねにとり。今年の紅葉を見て氣づいたんだけど、私たちの信仰が薄まりつつあるみたいなの」

急に真剣な表情になつて穂子が話を切り出す。

何だ、信仰って。

にとりはううんと腕組みしながら小さく唸り声を漏らしている。

「それで、八雲紫つて人に銭湯はどうだつて勧められたの。人間に身近に接することが出来れば、ある種信仰に近いものが得られるんじゃないかって」

「ふむふむ……それで銭湯つてのを始めたことになつたのか」「だけど銭湯に使う建物がボロボロなの。にとりちゃん、何とかならない?」

「機械的なことならともかく、建物つてことはリフォームもかあ。ちょっと大変そうだけど、他の仲間を呼べば大丈夫そうだな」

「仲間……」

河童の仲間つて何なのだろう。

やはり同じ河童か、それとも他の妖怪とやらか。

銭湯とかリフォームとかよりそつちが気になつてしまふがいいんな

だが。

「じゃあにとりちゃん、協力してくれるんだね?」

「秋の神様の頼みを無下に断ることなんて出来ないさ。色々お世話になつてることもあるし」

「うわーい。ありがと、にとりちゃん」

「……秋の、神様？」

今しがたにとりがそんなことを口にしたような気がしたのは気のせいだろうか。

水織の言葉に、にとりはそもそも当然のように答えた。

「何だ、知らないのか？ 彼女たちはこの幻想郷で秋を司る神様なんだぞ」

「……は？」

いやいきなりそんなこと言われても。

普通目の前の人間が『こいつ神様なんだぜ』とか言われても普通だつたら絶対に笑われる。

それどころか下手したら妙な色した救急車を呼ばれかれないし、インターネットの中だつたら散々罵詈雑言を並べられおまけに語尾に草が生えるような勢いだろう。

しかしそれをにとりは平然と言つてのけた。

惜しげもなく、それがこの世の常識だとでも言わんばかりに。

「あれ？ 言つてなかつたかな？」

「いや、あの……さ。普通そんなの信じるアホはないと思うんだよ。てか、もしかしてオレそう思われてたりする？」

「そんなことないよ？ うんと、どこから話したらいいのかな」

「さつきから思つてたんだけど、彼は人里の子なのかい？ ずいぶんと妙な格好をしているけど」

「ああ、それも説明し忘れてた。んつとねえ」

「お、お姉ちゃんの代わりに私が説明するよ」

まず最初に水織が外の世界の住人であるということ。

といふか、このことに関しては自己紹介の時点で自分から言つて

おくべきだったのかもしれない。

話を聞き終えたにとりはぽかんと間の抜けた表情になつていた。

「な、なるほどね。じゃあ幻想郷のことを知らなくて当然だ」「あのね。幻想郷には少数の人間と、それからたくさんのお嬢様が住んでる世界なの」

「にとり、地図貸してもらえる?」

「ほいよ」

本棚から丸められた地図が出てきてそれを広げる。

地図には橢円のような地形に、何やら簡易な建物の絵が描かれていた。

それはゲームにありがちなワールドマップといったところか。

「ここの、と穂子が地図中心のやや上部、巨大な山の絵を指で示す。

「これが私たちが今いる『妖怪の山』。幻想郷で山と言つたら大抵はここを示すわ」

「ふ、ふむ……ん、ここのはさつきの神社か。で、こつちは?」

妖怪の山の頂上に小さな神社が描かれている。

パツと地図を見渡したが神社は博麗神社との神社しか描かれていない。

「そこは『守矢神社』。少し前に神社ごと幻想入りした一柱の神を祀る大きな神社よ」

「幻想、入り?」

「水織みたいに、外の世界や別の世界から幻想郷に入ることを幻想入りと呼ぶの」

「ふうん……」

さつきから相槌を打ちながら聞いているが、本当にゲームの、それこそRPGみたいな話だ。

それが今日の前で現実に起きているというのが未だに信じられない。

「あとね、ここが人間の住む村の人里なんだよ」

「そういえばさ、銭湯って何処でやるんだ？」

「ああ、それは……この辺りだっけか」

静葉が示した村と、妖怪の山との間を水織が指す。位置としては中途半端な場所で、どちらかといえば銭湯の位置は妖怪の山寄りだ。

唯一の人里から少し距離があるのだが、これでは客が入るのか心配である。

「普通、銭湯つてのは町の中とかにあるもんなんだが、これで人が入ってくるのか心配だな」

「そうなの？ ううん、じゃアリフォームついでに引っ越しあるの？」

「か、簡単に言わないでくれよ。廃墟ごと引っ越しだなんて出来るわけないじゃないか」

外の世界なら巨大なトレーラーで住居」と運んだりすることもできるけど。

うんうんと唸りながら思案を巡らせたが、結局良い案は浮かばなかつた。

「この件に関しては我慢せざるを得ないが。

「まあ、引っ越しとかは後で考えなよ。今は銭湯のリフォームを優先しよう」

「やうだね。じゃあよろしくね、にとりちゃん」

「つむ。道具とかの支度とか色々必要だし、とりあえず作業は明日からでいいかな?」

「おひ。よろしく頼むよ」

それから姉妹が少々雑談を交わしてから洞窟を後にする。気がつくと西の空に日が沈もうとしていた。

秋になれば当然日入りも早くなる。

黄緑色に染まつていく妖怪の山は壯觀で綺麗だった。

「もうこんな時間か。そろそろ私たちも帰らないとだね」

「そうだね。じゃあ水織、また明日」

「おひ。また明日な」

山の奥へと向かう姉妹に手を振り麓を降りていく。
と、銭湯予定の廃墟まで来て一つ重大なことを思い出した。

「鍵、閉まつてゐるじやん……」

しかも最悪なことに、腹の虫まで鳴きだした。

よくよく考えれば、姉妹が助けてくれた時に水を口にしただけ

今日は何も食べていない。

餓死するとは言わないが、このままだと何だか腹が切ない。

「そうだ。神社だ、靈夢のとこの神社に行けば何か貰えるかも」

空腹の体に鞭を打つて神社に向かって歩き出す。

女の子に助けを求めるなんて恰好がつかないような気もしたが背に腹は代えられない。

「……？」

ふと、背後が気になつて振り返る。
妖怪の山がそびえる雄大な光景。
それなのに、先刻よりも色が濃いのは氣のせいか。

「……まあいいや」

秋の夜は、思いの外早いということなのだろう。
そして氣に留める事もなく水織は歩き出した。

歩き出して間もなく、幻想郷に夜は訪れた。

第五話 河童の機械技師（後書き）

きつちり二日更新。

ちょっと遅い気もしますが、我慢。

しかし、水織の能力の開花が遅いなあ……

それと、お気に入り登録、お気に入りコーナー登録、並びに感想やコメント、評価ポイント等ありがとうございます。

おかげさまでお気に入りコーナーが30名になりました。

これからも頑張りますね。

第六話 夜と遊ぶ少女

「……もう夜かよ。うう、ちょっと冷える」

歩き出して数分もしないうちに、水織の頭上には漆黒の空が広がっていた。

一つの星も瞬かない闇が幻想郷を包み込み一寸先も黒く染める。それは足元すらも、見えないほどだ。

「おかしいだろ……」

流石におかしい。

確かに水織は田舎者で街灯のない道を歩くのは慣れてはいるがこれは流石に暗過ぎだ。

足を止める。自然自分の足音が消え周囲一帯が闇と静寂に包まれる。

虫の声も、風の音も、何も聞こえない無音の世界。

ゾッとするような静けさだった。

何も出来ずその場で立ち尽くしている」としか出来ない。いや、そもそも自分は立っているのか? それすらもハツキリとわからなー。

「ふふふ。こんな夜更けに一人でお散歩?」

「だ、誰だ!?」

闇から響く囁きにも似た小さな声。

何もかもが見えない世界で突如響いたその声に水織は身構える。

「ダメだよお。いついう夜はね、とっても恐い妖怪が出るんだよ

「恐い妖怪……」

さつき聞いた穂子の言葉が脳裏を過ぎた。

幻想郷は神や妖怪の住まう世界。

そして夜は、妖の世界。それは元いた世界でも同じ話。

といっても、本物を見たわけではないのだが。

「お、オイ！ ど、何処にいるんだよー 隠れてないで、出でこいー！」

声が、震える。

何も見えない世界で聞こえる声がこんなにも恐いと感つたのは生まれて初めてだった。

見えない視界の中で首を動かしそれでも声の主を探そうとするが闇は一向に晴れず目の前は依然として暗闇。

声が、水織の周囲で反響する。

「ううふふ。さあて、私は何処にいるのでしょうかー…………きやーーー？」

ドテツー！ とまるで誰かが転ぶような音が背後からして振り向くが何も見えない。

だがその方向から微かに『痛た……』と呟き声が聞えたような気がしたのだが氣のせいだろうか。

「ふ、ふふふ。私の姿が見えなくて恐いでしょ？ 恐いでしょ？ これからあなたは、私に食べられちゃうんだかむぎゅーーー？」

今の中、まるで蝶つてる最中に壁にぶつかったような感じの声だつた。

どうもむぎゅきから様子がおかしい。

確かに水織の近くに誰かがいる。

それなのに、誰かの声はすれども未だに一度たりともこちらに接触してこない。

「ぐ、うう……」泣なつたら、しょうがない

すると突然今まで目の前を覆っていた闇がゆっくりと晴れていき、歩いていた道と、その向こうで頭を押さえる少女が映った。

「女……の子?」

闇から抜け出したような黒い出で立ち、月明かりに照らされ幻想的に輝く金の髪には小さな赤いリボンが結わえられている。

何故か鼻先が何かぶつけたかのように赤くなつていたが、見た目は少なくとも水織よりかは年下に見える。

一見すると可愛らしい少女、いや、少女といつよつかはもう少し幼い氣もする。

どうやら闇の中で響いていた声の正体は彼女だつたらしい。

涙目な彼女は一度水織を指差し、両手を広げながら構え声高らかに叫んできた。

「どうだ！ 恐かつたでしょーーー！ さあ！ 観念して大人しく私に食べられちゃいなさい！」

「！」恐かつたつちやあ恐かつたけど……」

少女が姿を見せた途端、そんな恐怖など何処かへ飛んでいってしまっていた。

一瞬でも恐怖を感じた自分が馬鹿らしいと思えるほどだ。

まさかこんな小さな女の子に脅かされていたとは夢にも思わなかつた。

「あのせ、そつちにせこんな時間ひづひつこひづや危ないんじやないか？ その、恐い妖怪が出る……んだろ？」

「な……ッ！」

少女の顔が赤く染まる。

怒りか、恥ずかしさか、或いは両方か。

頬を膨らませ両手をブンブン振り回す様は少々愛くるしさされ思つた。

……別に年下に興味はないのだが。

「ば、馬鹿にしてえ！ もう怒つたんだからー！」

頬を紅潮させ少女が手にしたのは、一枚の札。

「お札……？」

短冊のような長方形で、全体的に暗い色をした札を少女が高く掲げ何か呟ぐ。

「闇符『ティマーケイション』」

すると少女が手にしていた札から突然黒い塊のようないものが現れふわふわと手の上で浮かび上がる。

意味不明の物体、何だアレは。

今、あの少女は何をしたんだ。

田の前で起こる不可思議な現象に思わず呆然としていると、少女はニシと口の端をつり上げた。

「そあれ！」

「う、うわッ！？」

意味のわからない物体を、水織は大袈裟に横つとびして回避。振り返ってみると、今まで水織の立っていた場所に大きな窪みが出来上がっていた。

「何だよ……それ！？」
「私の術符。^{スペル・カード}ふふふ。私が勝つたら、あなたを食べるね」
「は、はあ！？」

そんな物騒な提案を、笑顔で少女が言つてくれる。

冗談じゃない、だいたい勝つたらつて何だ。これは勝負が何かだとでもいうのだろうか。

意味がわからない。

いきなり視界が真っ暗になつて、少女が現れて、訳のわからない攻撃、のようなものを仕掛けてきて水織の頭は混乱寸前。次々と起じる理不尽な現象に、どう対処すればいいのか見当もつかない。

とりあえず、今わかっていることは一つ。

「たぶん、絶体絶命のピンチってやツだ……！」

嫌な汗が背筋を走る。

どうすればいい。

逃げるのか、それとも、応戦するのか。

見かけは少女同然だから物理的な力でなら勝てるかもしれない。

……が、首を振る。

女の子を殴るなんて冗談じゃない。

そんなことが天国の爺ちゃんに知られてみる。家族だというのに七代祟られそうだ。

だとすれば応戦は、無し。

つまり、ここでやるべき」とはただ一つ。
グッと足に力を込めて踏みしめる。

少女と対峙したまましばらく睨みあい、そして、

「得意の三十六計でツ！」

「ふふッ。逃げよつたつてそういうはいかなによ」

ヒターンして走り出した水織の頭上を、大きな影が通り過ぎ少女
が水織の往く手を遮るうと立ちはだかる。

「……！」

「せつかく見つけた人々の人間だもの。簡単に逃がすわけないじゃ
ん」

「さよならはとつぜんこ、とはいかないってか。くそツ」
「何の話？」

クスクスと嘲笑う少女の姿が、少し恐い。

少女の赤い瞳が、獲物を目の前にした獣のように小さく細まる。

「逃げたつてことは、私の勝ちで……いいよね」

「……ツ」

渴いた喉のせいで息が詰まり、悲鳴を上げかけたのにそれは声に
ならない。

「のまま、目の前の少女に喰われてしまつというのか。

……といふか、そもそも喰われるつてどういう意味だ。

それは一般的な食事という意味なのか。

それとも……まさかこんな年端もない少女が性的に喰うとか
言いく出すのだろうか。

何という肉食系少女。

嗚呼、どうせ喰われるのならいつそ紫さんに食べられ

「ピュヒュンッ！」

水織の耳をかすめる、疾風のように鋭利な風切り音。
死に際に描いたピンクな世界が一瞬で現実に引き戻され、水織の
足元に白く大きな針のようなものが刺さっていた。

「え？」

「何となく不穏な気配を感じたかと思えば、アンタたち何してんの
「げ、巫女……」

月夜に映える、赤と白の巫女服。

再び振り返ると、そこには靈夢が月を背後に腕を組みながら立つ
ていた。

手には少女と同じような、赤い札を握りしめている。
平坦な声音で靈夢が言つ。

「水織、アンタ此処で何してんの。銭湯はどうしたのよ」

「銭湯どころか鍵がかかってたんだよあの廃墟。静葉も穢子も帰つ
ちゃつたみたいだし、仕方ないからそっちに行こうとしてたんだ」「
あの焼き芋姉妹……人間を放つて帰るとは良い度胸してるじゃな
いの」

「うう、こりや退散した方がいいよね。じゃー」

「待ちなさい
「ひゃん！？」

飛び出そうとした少女のスカートを、水織の足元に刺さっていた
ものと同じような大きな針が貫いていた。

速過ぎて全く田で追い切れなかつたが、恐らく靈夢の仕業だと思つ。

そのまま靈夢が少女に歩み寄り札を構える。

靈夢が近づくにつれ、少女の顔がだんだんと引き攣つっていく。

「また私に見つかるなんて、運が悪かったわね」

「！」、「こうなつたらしょ、勝負だ！　私が勝つて、あの人間を食べる！」

「往生際の悪い……」

針で貫かれたスカートを少し千切つて少女が大きく飛び退き畠に舞う。

「と、飛んでるぞアイツ！？」

千切れたスカートでややセクシーさを増しながらまたしても少女が札を構え詠唱する。

「月符『ムーンライトレイ』」

手にした札から、月光にも似た銀色の光線が一直線に靈夢に伸びる。

威力のほどはわからない、だがさっきの攻撃でも地面を抉るほどの威力があつた。恐らくあの攻撃も同等か、もしくはそれ以上のはず。

「靈夢、避ける！」

「言われなくても避けるわよ、バカ」

有言実行。

靈夢は少女の光線をひらりと飛んで回避すると、田の前で浮遊する少女と同じくふわりと宙に浮かぶ。

田の前で、一人の少女が空を飛んでいる。

あまりの光景に言葉が出ない。

そんな水織を余所に、一者の戦いは続けられる。

少女は光線を撃ちまくつて、靈夢はそれをヒラコヒラコと回避していく。

「……どうなつてんだ」

何度田かの光線を回避した時、突然靈夢の動きが俊敏になり少女の攻撃が追い付かなくなつていいく。

水織もギリギリ目で追つのがやつとだつた。

「術符使つまでもないわね。このまま終わらせるわ」

すると靈夢の周囲に、先刻見せた大きな針のようなものが浮かび一斉に少女へと突き進んでいった。

何本もの針が貫き、少女の体は一瞬で標本の昆虫みたいな張り付け状態となつてしまつた。

「うう……ぐすッ、ひつぐ」

「はい、私の勝ち」

泣きべそをかく少女、それを見下ろす巫女。

パツと見、少女を襲う悪の巫女とも見えなくもない構図だ。

ぐるりと振り返り、背後の少女には田もくれず靈夢が水織に言つ。

「さ、とりあえず神社にいらっしゃいな。その分じゃ、何にも食べてないんでしょ」

「さうだけじゃ……あの」

「何？」

水織は張り付けの少女を指差す。靈夢は首を傾げるだけで何も言わない。

「あの子、びつあるんだよ。あのままにしておくのか？」

「ま、人間を襲った罰つてどこかしら。放つておこでいいの」

「でも」

「少なくとも、アンタは命を狙われたのよ。そんな相手気にしなくていいでしょ」

「うん……そつなんだけど」

気がつくと、靈夢はさつたと神社の方へと歩きはじめていた。

ただの一度も振り返らない。

靈夢を追いかけていた水織だが、背後に残された少女が気になつて踵を返す。

「あれは、流石にやけに過ぎな『氣』がある」

罪を憎んで人を憎まず、だ。

張り付けの少女の元へ近づくにつれ泣き声が聞こえてくる。

水織と田が合つと、真っ赤な瞳が充血してさらに赤くなつていた。

「」の針つてさ、オレでも触れるのかな」

「え……？」

白い針にそつと触れる。

ほんのり温かい不思議な感触だが、どうやら触つても無害のようだ。

一本ずつ抜いていや、やがて少女に自由が戻る。

「な、何で助けるの」

「誰かを助けるのに、理由なんかいるかい？」

「……？」

水織の、人生で一度は言つておきたい台詞第一位。ちなみに一位は『釣りはいらねえ』だつたりする。三位以降は考え中。

「ほひ、ほじにこるとまた靈夢に怒られるぜ。早く行つた行つた」「あ……ありが、と……」

少女は何度も何度も水織を振り返りながらちよつとずつ歩いてい

や、やがて夜闇の中へと姿を消した。

何となく、心がスカッとした。

やつぱり女の子に暴力はいけない。

例えどんな事情があつても、女の子同士でも、だ。

「さて、靈夢を追いかけないと」

神社について靈夢に『やつつき何してたの』と訊ねられたので正直に答えた。

晩飯が無くなつた。

第六話 夜と遊ぶ少女（後書き）

何も更新していないのに気に入りコーナーがどんどん増えるW
登録、ありがとうございます。

三田に一度つてのは意外とバランスいいかもしませんね。

では、また三田後ぐらいに。

第七話 未だ見ぬ世界

「……………む」

視界に飛び込んでくる見覚えのない天井。

掛け布団を吹っ飛ばして飛び起ると水織はすぐさま自分の体を確かめた。

いつものシャツヒズボン、傍らには愛用のジャンパーが無造作に置かれている。

しかし周囲には見覚えのない家具やら襖やら。
そして水織は思い出す。ここは博麗神社だった。

「やつぱ夢じゃないのか……」

半ば諦めつつジャンパーを羽織つて外に出ると神社入り口の取水場で顔を洗う。

寒いとまではいかないが、神社を包むひんやりとした朝の空気に水織は小さく身震いした。

「あら、早いのね」

気がつくと靈夢が水織の後ろに立っていた。
ずいっとタオルを差し出されたので遠慮なくそれで顔を拭くと幾分か眠気が取れてスッキリした。

「まだ朝の六時よ。そんなに早く起きてどうするの」「誰かさんが晩飯くれなかつたから腹減つて起きたんだよ」

「うせなうメザシの一回でもよいでってんだ。」

腹の虫がやや遠慮がちにくうと鳴く。

そんな話をしたせいで余計に腹が減つたではないか

「いいわ。少し早いけど朝食にしまじょうか。色々と話さなきゃいけないこともあるし」

やれやれと首を振った靈夢の後を追つて食卓につき朝食をとる。白米、味噌汁、焼き魚に漬物……元いた世界でも馴染みの、至つて普通の和食だった。

「んじゃ、いただきます」

食事の前で手を合わせ、早速箸で焼き魚をつまむとほぐれた身から湯気が湧き出て香ばしい香りがふわっと漂つ。

料理は出来たて、しかも今の水織は空腹。味のせつめつけ今までもない。

「……美味いや！ 腹が減つてるから余計にそう感じる」「私の料理の腕にはノーコメントなのね。まあいいけど

食器があらかた空になつたころに靈夢が口を開く。
昨日戦つていた少女、ルーミアのことだ。

「ルーミア……？」

「アイツは歴とした妖怪よ。『闇を操る程度の能力』で人を暗闇に閉ざし喰らうの」

「闇を操る能力……」

だからあの時急に目の前が真っ暗になつたのか。
しかし、横文字の妖怪なんて初めて聞いたぞ。

妖怪つていうと、もつと小難しい漢字の名前ばかりだと想像していたのだが。

残っていた焼き魚の尻尾をかじる。

「そのわりには、自分の作りだした闇で視界を失くしてしまつらじいけどね」

「だからあの時鼻先すりむいてたのか。
……？ あそこはただの一本道だったのに、いつたい何に顔をぶつけたってんだ？」

「というかさ、その『能力』って何だよ。ここの妖怪はみんなそういう『能力』ってのを持っているのか」「ええ、別に妖怪に限つた話じゃないわ。私だって持つてるし、あの焼き芋姉妹も持つてるわ」

「靈夢の能力って？」

「私は『空を飛ぶ程度の能力』」「空を飛ぶ……」

あの時靈夢が突然飛び上がったのはその能力の所為か。
残つたご飯を咀嚼しながら昨日のことを思い出す。

能力は、何となくわかった。

じゃあ昨日戦つてた時に使つたあの光や針は何なのだろうか。

「まあ、あれは私たちなりの決闘と言つたところかしらね」

「決闘？」

「そ。めんどくさいから細かい話は端折るけど、要は簡単に勝ち負けを決める方法よ。勝つたら勝ち、負けたら素直に負けを認める」「ふうん……」

味噌汁の中身が無くなつたので椀を靈夢に渡すと嫌そうな顔された。

おかわり禁止なら先に言え。

「今は成長期なんだぞ、成長期。

「とまあ、そんなとこかしら。それぐらいの話ならあの姉妹にもわかるから何があればそっちに聞いてちょうどだい」

「ん、了解」

食事を終えて自分の食器を片づけると、途端にやるーどが無くなつてしまつた。

「そのまま適当にいじふりしてもいいのだがふと何となく廃墟が気になつた。

靈夢に外出したいと告げると数枚の符を手渡された。

昨日の戦闘で見たものとほとんど同じものだが、これは何となく違つよつた気がする。

「護身用よ。道中、また妖怪に襲われそうになつたらこれを持ちなさい」

「え？ 今は朝だぜ？ 妖怪なんて出るわけ」

「夜にだけ活動する妖怪なんてそういういないもの。朝だつて、スキあらば襲つてくるに決まつてゐるじゃない」

じゃ、と素つ氣ない言葉の後靈夢は社の方へと戻つていつてしまつた。

手渡された札を見つめ「ゴク」と唾を飲み込む。

「……まあ大丈夫だろうよ」

鳥居を抜けて石段を駆け降り妖怪の山へと向かう。

朝日に照らされた人気のない田舎道は元いた世界とよく似ていた。そういえば異世界だというのに日本語で通じているっていうのは不思議だ。

よくよく考えれば、神社や妖怪なんて言葉もほとんど日本と同じだ。

「これは日本の何処かなのだろうか。

「何だか、妙な感じだな」

そういう考え方しながら歩き続けて……三十分ほどだろうか。時計が無いので時間の感覚がわからないが、気がつくと最初に紫に案内された廃墟の屋根が水織の視界に映っていた。
……遠い。

本来、銭湯というのは近所にあって気軽に行ける環境の方が望ましい。

「のままでは銭湯としては危つい立地だ。

「妖怪も出るって話だし、こんな辺鄙な場所で客が来るかなあ……ん？」

廃墟の前に、見覚えのある赤いスカートが揺れている。帽子をしてないし、あれは恐らく静葉だろう。

「おはよう、静葉」
「あ！ 水織君！」

振り向いた静葉は水織の姿を見てビックリしたような顔をしていた。

そのままトントと水織に近づき体のあちこちを見つめ始めた。

「な、何だ何だ？」

「怪我とか、ないの？ 大丈夫？」

「いや、何ともねえよ。いきなりどうしたんだ？」

「え、えっと……」めんね

「……？」

何で謝られたのだろうか。

水織が首を傾げると、静葉は申し訳なさそうに顔を俯かせぼそぼそと話しだす。

「昨日、水織君のこと放つておいて帰っちゃってさ。神様なのに人間を追いてっちゃうなんて……」

「ああ、そのことか。別に気にしてねえよ。オレも何にも言わなかつたし」

「だ、だけど」

「いって。そんな顔すんな」

神様だらうとなからうとい、女の子がそう簡単に暗くなっちゃいけない。

女子は笑顔であるべきだ。

そしてその笑顔は、男子が作つてやらねば。

それから適当に雑談をしながらしばし廃墟の前でのんびり過ごす。昨日の夜の出来事、ルーミニアという妖怪に襲われたことと助けたこと。

それから今朝の靈夢の話。

「なあ、静葉たちにも神社とかあるのか？」

「え……？」

水織は何となく気になつて訊ねてみた。

静葉たちの家、というか神社とはどんなものなのだ？

二人は秋を司っているという話だから神社というよりもっと大きな御殿とかになつたりするのだろうか。

うわ、どうせならあんなちっぽけな神社よりそつちに泊りたかったかも。

すると、何故か静葉の顔が再び陰ってしまった。

「も、もしかして聞いちゃまずかつたか？」

静葉は軽く微笑みながら首を振つたが、その笑みにも何処か影が差しているような気がするのは気のせいだろうか。

「う、ううん。私たちの神社は、その……
「お姉ちゃん！」

妖怪の山の方から威勢のいい声が聞こえてくる。
振り返つてみると、山の斜面を裸足で駆け降りてくる穂子の姿があつた。

「あ、水織！ よかつた、無事だつたんだ」
「何とかな。てか、一人ともここで何してんだ？」
「水織を探そうと思つて来たの。だけどすぐ見つかつてよかつたわ」
「うん。水織君が無事で安心した」

神社のことを聞きそびれてしまつたが、静葉の顔が笑顔に戻つていたのでこれ以上は聞かないことにした。

別に今聞く必要もないし、また今度機会があるときに聞けばいい。

「それで、今日はどうするんだ？」

「ひとりちゃんがもう少ししたら来るって言つてたし、それまで待

つてよつか

そうして間もなく、妖怪の山の方からにとりが一人で姿を見せた。仲間は後から合流とのことで、とりあえず廃墟の中を見たいとのこと。

水織が玄関の鍵の旨を伝えると、にとりはレインコートのポケットから小さな針金のようなものを取り出す。む、これ見覚えがあるぞ。確かキーピックとかいうヤツだ。じつちの世界でも女性が装備しているものなのか。

「これぐらいの鍵ならちゅうちょいの……？　どうかしたか水織？」
「い、いや。何でもない」

しかしあんな細長い針金でじつして鍵が開くのだろうか。イマイチわからん。やがて力チ、と小さな音を立てて廃墟の戸が開くと埃っぽい空気がむわっと立ち込めてきた。

「う……でも、割と綺麗なんだな」

正面両手には小さなカウンター。

奥には一つの戸が左右に並んでいて、恐らくそこは脱衣所でその奥が浴場となっているんだろう。

土足のまま上がり脱衣所であろう部屋の戸を開ける。案の定中には衣類などを置く棚が置かれていた。そして最奥の戸を開けるとこれまで予想通りタイル張りの大きな部屋となっていた。

「うお、想像してたよりもかなりデカイな……」

浴槽の大きさは、一言で言うならだいたい小学校の小プール程度、おおよそ20メートル前後ぐらいだろうか。

深さもそこそこあるし、これなら大の大人でもゅつたりと湯船につかれそうだ。

正面に向かって右手の壁際には蛇口がしつかりと備え付けられているし、水さえあればすぐにでも営業できそうだ。

とはいって、もちろんここままでは意味が無いので。

「ボイラー室は何処だらな……」

部屋を出て探すが、ロビーにそれと思わしき扉は見当たらなかつた。

裏口だらうか。ぐるりと建物を一周して歩くと小さな灰色の扉を見つける。

戸を開けて階段を下りていくと薄暗い部屋の奥で明かりがちらついていた。

「お、水織」

「にとりか。何でここに」

「何でつて、ボイラーを見にきたのさ。もちろんここも直さなきやいけないしな」

「機械に強いってのはホントなんだな」

「にとりの足元に散らばる工具の山がそれを物語つっていた。

水織もしゃがみ込んで一緒にボイラーを覗きこむ。

といつても、からうじて操作方法がわかるだけで機械などせつぱりなのだが。

複雑な機械を田の当たりにして水織が小さくうめく。

「……ホントに直るのか、コレ?」

「直さないと銭湯出来ないんだろ。これぐら直してみせるよ」

「頼もしいカツパだな」

「『これぐらごじつ』ことなこのを」

にとりが工具を手に早速作業に取り掛かる。

仲間が来てからでいいんじゃ、と聞いたら『細かいところは今のうちに終わらせてしまつ』とのこと。

作業を始めたにとりの表情が真剣そのものになつたので水織は大人しく退散した。

このままいくてもしようがない。後できゅうりでも渡してやるつか。

……好きなのかどうか知らないけど。

「水織くーん！ 何処へ？」

静葉の声が上から聞こえてくる。

何の用だらうか。

ボイラー室を出て玄関の方へ向かうと、静葉と穂子と、それから紫の姿を見つけた。

「あー、おはよう水織君」

「おはようござこます、紫さん」

「……私たちの時と態度が違い過ぎない？」

「氣のせいだ」

「うつふふ。どう？ この建物使い物になりそつ？」

「もちろんです紫さん。ただ、ちょっと問題が

「問題？」

水織はこの銭湯の立地について紫に説明した。

妖怪が蔓延るこの世界で、しかもこんな辺鄙な場所では客が見込めない。

そこで、以前話に聞いた人里に銭湯を移設したいと水織は訴えた。

「人里に移設……そうね。そうしないと儲からないものね。わかつたわ。その件は私に任せてちょうだい」

「ありがとうございます、紫さん」

「だつたら、人里に下見に行つてはどうかしら?」

「下見……か」

そういうえば水織は妖怪の山と博麗神社以外の場所にまだ訪れない。

銭湯の経営もさうだが、単純に幻想郷がどんな場所なのかは水織も興味があつた。

「じゃあ一緒に行こつか。私たちが案内してあげるよ」

「そう……だな。どんな場所で商売するのかは知つておかなければいけないし、よろしく頼むよ」

「うん、頼まれた」

姉妹の簡単な説明を受けながら人里へと向かつ道を歩き出す。期待と不安で何だか胸がドキドキしてきた。

と、静葉が目の前を差し声を上げる。

だだつ広い平原の真ん中に小さな集落が見えてくると、自然との足取りは加速していた。

第七話 未だ見ぬ世界（後書き）

少し修正してたら遅くなりました；
すみませぬ。

ちよつと話のテンポが遅い気がするけど氣のせい。

そして、恐らく一章の中で水織君の能力が覚醒することはなもそつ
です。

では、また三日後くらいで。

第八話 幻想郷の人里

それはまるで、自分がタイムスリップをしたかのような不思議な感覚。

人里に辿り着いた水織がまず最初に抱いた気持ちはまさにそんな感じだった。

「まるで歴史の教科書みたいだな」

何となく想像はしていたのだが、いざ田の辺たりにするとその衝撃は凄まじい。

行き交う人は皆一様に古めかしい着物姿。

水織が着ているようなズボンとかジャンパーとか、そういう類の恰好をしている者は誰一人いない。

しかしそんな彼らから見れば奇抜である恰好をして歩いているのに、周囲の視線が大して集まらないのは何故なのだろうか。水織はそのままあれこれと考えながら姉妹と人里の中を歩いていく。

「あ、静葉様だ！」
「穂子様！」

里を歩いていると姉妹に手を振る少女や両手を合わせて挙げる老婆の姿がちらほら見えた。

静葉も穂子も笑顔でそれに応えている。流石は神様といったところだろうか。

歩き続けて里の中心部辺りにつくと三人で少し休憩することになり、静葉は近くの茶屋から饅頭と湯のみを持ってきた。

「おばさんがサービスだつて」

「ふうん。神様つてのは役に立つんだな」

「ちょっとはありがたいと思いなわけよ」

「ううん……」

貰った饅頭を口に放り込んで考える。

確かに凄い話なんだろうけど現実味が無いといつも、何度も聞いてもイマイチしつくりこない。

別に海を割つたりするわけでもなし、静葉と穂子の姿から見てもそんな力があるようにはまるで見えないし。

隣で饅頭を美味しそうに頬張るその姿は何処からどう見ても普通の女の子のそれだ。

「やついえばさ、静葉にも穂子にも『能力』つてあるんだよな?」「あるよ。私は『豊穂を司る能力』。そしてお姉ちゃんは『紅葉を司る能力』さ」

「豊穂と、紅葉……」

豊穂とは、その名の通り作物の穂みのが豊かに実ることだつ。

そして紅葉は……やはりあの、モミジやイチヨウが色付くあの紅葉だろうか。

豊穂はともかくとして、静葉の紅葉つてこののは……

「何だか、地味な能力だな

「あ、あひ……」

む、静葉の顔がわかりやすく暗く沈んでしまつてオレの田の前に右フックが迫りぐがつはあ！？

「な、何しやがる穂子！？」

「お姉ちゃんが気にしてることを平然と言つた、バカ！」
「んな口で言つたって、オレは思つたことを素直に」
「い、いいんだよ穢子。気にしてないから」
「お姉ちゃん、顔が真つ暗なんだけど」
「は、ははは……」

今の静葉にはじょんという効果音が世界一似合つと思つ。
しかし、妹は豊穣だなんて立派な能力なのにどうして姉はショボ
いのか。

某大佐曰く『兄に勝る弟などいない』ではなかつたのだろうか。
この場合は『姉に勝る妹』だけど。

「お、お姉ちゃんは』の能力で紅葉を操つて、秋の侘び寂びを表現
するのが役目なの！」

「侘び寂び……？」

間を取つたらワサビだな、とか言つたら間違いなく穢子のテンプ
シーロールが待つてゐるので口の中に閉じ込めておく。

「侘びと寂びは、言わば閑寂かんじやくと清澄せいあうの世界。お姉ちゃんは紅葉で世
界に秋の雰囲氣ふんきを出してあげてるの！」

「侘び寂びってアレだろ？ 茶道とかで重視する雰囲氣の」

「侘びは『わぶ』という『氣落ち』や『辛いと思う心情』を表す動
詞から生まれた言葉で、寂びも同様に「わぶ」という『古くなる』
や『色褪せる』という意味の動詞が出来ているの」

やや顔を上げながらぼそぼそと静葉が説明する。

侘び寂びの通り、今の静葉の顔は穏やかで物静かで、少し寂しげ
だった。

「だから、私が頑張れば幻想郷が、この世界が秋に変わっていくの。

それは静寂と、ほんの少しセンチな季節で……」

「あわわ……！　お、お姉ちゃんネガティブになるの早いよ！　ま

だ私たちの秋は始まつたばかりで」

「そつか。でも、案外悪くない能力だな」

「え……？」

静葉と、ついでに穢子が意外そうな顔してこちらを覗きこんでくる。

湯のみをすすつて一息つけてから水織は言った。

「風情があつていいいじゃん。オレはそういうの好きだし。地味つて言つたの、気にしてるよつなら謝るよ。『ごめんな』
「う、ううん。別に、私もそこまで気にしてないし。それに」「それに？」

暗い顔が途端パツと明るくなつて笑顔に戻る。
静葉の頬が仄^{ほの}かに紅葉色に染まつていた。

「褒められたの、初めてだから。嬉しい」

「ん。そつか」

「……えへへ」

水織は残つた饅頭を口に放り込んで飲みこむと、茶屋の外に出てしばし里の様子を観察する。

今いるここはちょうど東西南北に道が伸びていて意外と人通りが多い。

真ん中にはぽつかりと広い空間が開いていて今は子供たちがわいわいがやがや鬼ごつこらしき遊びを楽しんでいる。

……もしも、ここに銭湯を建てたらどうだろうか。

「これなら里の何処からでも気軽に立ち寄れて客入りはかなり期待できる。」

「錢湯を移設するならこれ以上のベストポジションはないと思つ。」

「移設するとしたら、ここがいいな」

「錢湯？　だけど、子供の遊ぶ場所無くなっちゃうよ？」

「無駄にだだつ広いからその点は心配ないんじゃないか？　……むしろ、オレはどうやって移設するのかを心配してるんだけど」

「そういえば、紫さんは任せてもとか言ってたね」

「あの人って、何か胡散臭いんだよなあ」

「バカ。そこにはミステリアスと言つてやるんだ」

「神様相手にバカ呼ばわりつて……というか水織、紫さんと私たちとで扱いがほしいぶん違つよね」

「気のせいだつての」

茶屋を出てほんの少し進み移設候補地を確認する。
十字路のど真ん中とこつのは非常に便利な立地だ。移設するなら是非ともここが望ましい。

「じゃあ、一旦あの廃墟に戻らつぜ。その事を紫さんに話さないと」

「そうだね〜」

「水織、そういえば今日の宿はどうするの？　決まってないなら私たちと行こうよ」

「ん〜、そうだな。また靈夢のところに泊介になるのも悪いしな……」

「これなら図らすとも姉妹の神社に向かえそうだ。」

「素晴らしい御殿を頭の中で想像しながら水織たちは妖怪の山の方へと引き返して行つた。」

・・・

水織たちが戻ると、ついさっきまで廃墟だった建物が消え失せていた。

いや、消え失せたという表現は正しくない。

「す、すっげえ！　まだ半田ぐらいしか経つてないのに、もう直つてる！？」

水織たちの田の前には廃墟改め、立派な銭湯が出来上がっていた。

「おお、水織か。リフォームも全部終わったよ」

あまりの仕事の速さに驚愕する水織の前に、スパナを抱えたにとりが誇らしげな顔を見せた。

何ということでしょう。

あれだけ荒れ放題だった廃墟が河童の手により生まれ変わつてしましました。

いつたい何処のリフォーム番組だ。

そしてあのリフォームの資金つて何処から出てくるのだろうか。説明で出てくる資金以上に人件費が凄そうなのだが。

「ま、私たちが本気を出せばこんなもんぞ」

「私たちって、仲間とやらは？」

「リフォームが終わつたもんだから焼き鳥屋に打ち上げ。私は説明がてら残つたのさ」

「そつか……へえ、すげえなあ」

正面玄関を抜けると、まず田についたのが予想以上に広々とした

ロビーだった。

両側のカウンターはピカピカに磨きあげられ自分の顔が映るほどにまで綺麗に仕上がっていた。

「脱衣所も完璧。残るは……！」

ガララ！と小気味いい音を立てると浴場に踏み込む。純白の壁に、薄く青みがかつたタイルが敷き詰められ、元いた世界でも見た、それはまさしくオーソドックスな公衆浴場。シャワーも蛇口も新品同様に光り輝き、今すぐにでも熱いお湯を注いでくれそうだ。

「……あ

「どうだ水織。これなら銭湯とやらが経営できそうか？」

「あ……ああ、バツチリだ。河童の技術って凄いんだな」

「ふふん。もっと見直してもいいんだぞ。ハッハッハ！」

妙にご機嫌なにとりがボイラーハウスの使い方を教えるからと言つて水織を残し浴場を出る。

確かに、あの廃墟を半口程度でここまで修復する技術は凄い。完成した浴場を見て水織はそう思うのだが、一つだけ、心残りがあつた。

「……まあ、知らないんだから当然か」

浴場入って正面の壁は、真白なまま何も描かれていなかつた。

・ · ·

やがて日が沈み、説明を終えたにとりが妖怪の山に帰ると、水織は銭湯隣に新しく作られた小さな小屋で寝転がっていた。

「この小屋はにとりのサービスだそうで、水織の自宅代わりにござりかとのことだ。」

「おかげで寝る場所には困らなくなつたな。へへ、一人暮らしみたいで緊張するな」

とはいえ、家具は最低限なものだけしかないので今現在のこの部屋はがらんとしている。

物々しいよりかはマシだが、逆に何もないと妙に落ち着かない気もする。

さて、これからどうじょうか。

去り際に穰子から貰つた柿をかじりながらボケツとしていると、部屋の戸がコンコン、とノックされた。

こんな時間に誰だろうか。

静葉が何か忘れ物でもしたのか、それとも穰子だろうか。

「へいへい。今開けますよ」と

引き戸を開けてフツと顔を上げると紫紺の瞳と目があつた。

「こんばんわ、水織君」

「ゆ、紫さん！？」え、ちょ、わ、な、なな何の用ですか！？」

「何の用つて、ついさっき貴方が銭湯を移設する場所が決まつたつて言つたから」

「え？ 紫さんにそんなこと言つたかな……？」

今日紫と会うのは朝と今とを合わせて一度目のはずなのだが。

紫は部屋へと上がりちゃんと座布団の上に座り込む。正座してゐる姿も美しい。

「それで、人里の真ん中に銭湯を移設したいのよね？」

「は、はい！ 一番人通りも多いし、客入りが一番見込める場所だと思いまして」

「試しに聞くのだけれど、博麗神社の傍はどのつかしら？」

「え？ 博麗神社ですか？ ううん……」

あの神社、いつも言つては失礼だが参拝客があまりなつようない氣をする。

里から見ても遠いし、その道中には妖怪も出るし危険で客入りとしては微妙だらう。

神社の近くに銭湯、といつと逆に何か「利益がありそなうな」のが。

「まあ、それは冗談だからいいわ。今日はもう少し遅いし、移設は明日でもいいかしら？」

「は、はい！ でもあの、どうやつてこの建物を移設するんですか？」

「ん？ 聞きたい？」

紫は扇子をそつと口元に寄せ、ふふふと何か意味ありげな妖艶な微笑を漏らす。

怪しい、いや、妖しく美しい顔だ。

自分の顔が意味もなくどんどん熱くなつていいくのをただただ感じていると、やがて紫が声を上げて笑いだした。

「ふつふふ。そんな顔していつたい何を考えているのかしらねえ？」

一度貴方の心の中を覗いてみたいわ

「ど、どうぞ遠慮なく！？」

「ふふふ。じゃあまた明日、ね」

帰る直前、茶田つ氣たつぶりにウインクを残して紫は部屋を去つていいく。

ポカーンと呆け、そのまま呆けたままいつしか水織は眠りについてしまつていた。

そして……

・・・・

「……あれ、オレ寝てたのか」

何も着替えず、そのままの姿。

適当に雑魚寝したせいしか少し体が痛い。寝違えたかも知れない。苦にならない程度に体をほぐし、洗面台で顔を洗いタオルで拭く。……と、何やらがやがやと人のどよめき声のようなものが聞こえ顔を上げる。

「え……？　ここ、妖怪の山の麓だぞ？　何で人の声なんか……」

気になつて窓辺に近づきカーテンを開く。

目の前には訝しげにこちらを見つめたり指を差したりする人々の姿。しかも大量に。

それはまるで、下見に行つた人里の住人がこの銭湯に集結したかのような光景だった。

「つお、すゞ……！　まだ開店もしてねえつてのこ……」

とにかく、今にも押し寄せてきそうな彼らに事情を説明しなくては。

慌てて靴をはき玄関の戸を開け放ち外に出る。

「……す、すみません！　まだお店は開……店、してな……」

突如姿を現した水織に一時よめきが止まり、そして水織の言葉も止まる。

何故か。理由は至極単純。

「は……？　は……？」

見覚えのある木造建築群。

田の前の人は古めかしい着物姿。

親の背に隠れる少年少女の姿は、昨日鬼ごっこをしていた子供たち。

「ど、どつなつてんだああああああ！？」

水織が寝ている間に摩訶不思議な天変地異が起つたとでもいうのだろうか。

それは、寝起きの頭では理解できないような、あまりに突拍子なく信じ難い光景。

水織は今、人里の中心で張り裂けんばかりの奇声を発した。

第八話 幻想郷の人里（後書き）

またまたユーザーも、お気に入り登録件数も増え、ありがとうございます。

読者の皆様にはいつも感謝感謝です。

そして今日も調整して遅れてすみませぬ；

最近チェックが雑なので、また誤字とか脱字とかあるかも……ガク
ブル。

感想、コメント等、何方でもどんなことでも、気軽に書きこんでいただければ嬉しいです。

ではまた三日後くらいに。

それでは。

第九話 名付けて『秋の湯』

「ほえ……ホントにあつさり移設しちゃったんだねえ」

人里のど真ん中、静葉は出来上がったばかりの銭湯の屋根を見上げながらぼんやりと呟いた。

屋根の向こうには見事な秋晴れが広がっていて、まばらな雲が空を泳ぎ澄み切った青の空に彩りを添えている。

「朝起きて外に出たら里の人たち全員に変な目で見られた。恥ずかしいわ気まずいわ……」

静葉から貰つた栗をつまみながら水織がやれやれと嘆息しながら呟く。

おかげで静葉たちが来るまでずっと部屋にこもりつきりで何も出来なかつた。

「あの紫つて人の仕業なんだろうけど……とんでもない人だね」「流石紫さんだ。そこに痺れるし惚れる」

「……水織、ハ雲紫は妖怪だつて」

「おはよう、三人とも」

「うわ！？ 紫さん！？」

いつしか水織と姉妹の間に日傘を携えた紫が現れていた。

ほんの少し眠たげな表情で、小さな欠伸を扇子で優雅に隠していった。

「銭湯の位置はここでいいのかしら？ 人里の真ん中だと聞いたから

「で、でもいきなりやる」とはないんじやないですか？ オレ朝起きたら人里でめちゃくちゃビックリしたんですけど

「夜じゃないと田立つてたまらないもの。まあ、結局田立つてしまふんでしょ」
「そりやあ……」

人里のど真ん中に突如現れた巨大な謎の建物。

元いた世界なら新聞の一面を余裕で飾れるし、朝のニュースならまず一番最初に紹介され生中継ものだろ？

……そういえば、この世界のメディアってどんなものなのだろう。やはり古式ゆかしくかわら版とかだろ？ 今とのじゅうせんな看板見かけたことないけど。

「さて、私はそろそろ退散するわね。少し疲れてるし、ここにいたりかかる追及されるのも面倒だから」

「え？ 追及？ いつたい誰に」「しつづれ～いしまつす！」

突如水織の目の前に漆黒の影が過ぎたかと思つと、そこには黒髪の少女が立つていた。

白シャツに黒のスカートといつシンブルな姿で、手には小さなメモ帳とペン。

無垢な好奇心な瞳の少女は、パツと見かなり可愛い。

しかしながら一番田についたのは彼女の背の、漆黒の翼だった。

「うわ……！？」 空から女の子が落ちてきた…？

「失礼な。私は華麗に着地したじゃありませんか」

「あ、天狗の新聞記者さんだ」

「天狗の、新聞記者……？」

天狗つて、あの鼻が高くて赤い顔のあの妖怪だらうか。

だが目の前の少女は漆黒の翼はあれど、別に顔が赤いわけも無し特別鼻も高いわけではない。

静葉は彼女を天狗の新聞記者と言つていたが……

「どうもこんにちは。私、清く正しい射命丸と申します。はい、こ

ちら名刺」

「ど、ども」

名刺なんて初めて貰つた。

小さな名刺には『射命丸しゃめいまる 文あや 文文。新聞編集長』と書いてある。

「ぶんぶん新聞……か？　ずいぶんダサイ名前なまえの新聞だな」

「そんな読み方する人初めて見ましたよ。文文。まる新聞！」ですよッ

「……結局ダサいな」

横で静葉と穂子が口元を手で覆つて笑いを堪えている。

この『文文』の後の句点はそう読むのか。おかげで妙な恥をかいてしまつた。

こほん、と仕切り直し文は手帳を開きペンを水織の鼻先にズバッと突きつける。

「さて、早速取材です。えと、まずお名前は？」

「み、水織です。草津水織……」

剣幕のせいか思わず敬語が出てしまつた。

名前を聞いた途端、文はすぐさま手帳に何かを書き始めた。恐らく水織の名前だろうけど。

「では次。こちらの建物はいったい何なんですか？　先ほど、あな

たはあちらの小屋から出でてきたようですが

「こ、これは銭湯です。えと、あの小屋はオレの血筋といつか、何というか

「ふむふむ……して、あなたは何のために銭湯を？ 何故ここに？

あなたの出身は」

「えつと、それは……」

矢継ぎ早に繰り出される質問に押されっぱなしの水織。

勢いのまま様々な質問に答えさせられることとなってしまった。もちろん水織が外から来た人間だということも。

そして何故か個人的な情報まで根掘り葉掘り洗いざらいに。

「はいはい。これにて取材は終了です。お疲れさまでした」

パン、と手帳をたたむ音で取材終了。

文の取材を終えた水織はマスクに追われる芸能人のような気持ちだった。

ただの質疑応答だというのに、この短時間で体にドツと疲れが押し寄せてきた。

「では、早速号外を出させていただきますね！ それでは、つとま
ツ！」

何をそんなに急いでいるのか、文は手帳を胸ポケットにしまい込むとすぐさま地面を蹴って飛び上がった。

気がつくと文の姿は彼方へと消え失せ、銭湯前にはポカンと立ち尽くす水織と姉妹だけが残された。

「……何なんだ、あの人」

「幻想郷最速の新聞記者さんだよ。私たちも、時々新聞読ませても

「うつてゐる」

「早速銭湯のことが記事になるんだろうね。ちょっと楽しみだけど、あの人の記事は玉石混交ぎょくせきもんこうというか、何というか」

「ふうん……」

しかし、ある意味では幸先の良いスタートかもしれない。

新聞というメディアにこの銭湯のことが書かれていれば良い宣伝となる可能性が高い。

誰かしら記事を見れば興味を持ち、この銭湯を利用しててくれるかもしれない。

最も、まだオープンしてはいないしその日にちも決まっていないのだが……

「水織君」

「ん？」

「それでの、銭湯のことなんだけど」

「ああそうだな。ここで立ち話してもしょうがないし中に入ろうか

銭湯自体は出来上がったのでこれから経営のことを考えなくてはいけない。

三人は正面の玄関をくぐり銭湯内へと入っていった。

・ · ·

「水織君、それでね」

「わかつてゐるよ。お店自体は出来たんだから次は経営の話だよな」

カウンター奥の事務所で三人で座つて早速会議。これから決める

「」、やる」とが大量にある。

「まず最初に決めるのは」

「お店の名前ね」

「……多分違うと思つた様子」

最初に決めるのはもちろん……残念ながらそこから先が出てこなかつた。

「……な、何から決めたらいいんだろ?」

「え? 水織君、しつかりしてよ」

「なんこと言つてもなあ……」

「」から経営の話。

そもそも、まだ中学生の水織に銭湯とはいえ一つの店を経営しようと
いう方が無理難題なのだ。

本当に銭湯の名前から決めるのか? それとも料金? いや、営業日や営業時間か? 肝心の銭湯はどうする? 石鹼などの備品は
何処から?.

考えることが多過ぎて水織の頭の中が思考で埋め尽くされていく。
何からやればいい。
何処から考えればいい。

そんな中、穂子がひょいと手を上げた。

「……何だ?」

「そもそも、銭湯つてどうやって使うのかなって思つてさ」

「あ? んなもん金払つて風呂に入るんだろ」

「だからさ」

穂子が「」と何故か得意気な笑みを浮かべている。

何か妙案でもあるのだろうか。

水織が首を傾げていると、指を上げてこう言つた。

「私たちにさ、最初から順序通り教えてよ。まず最初は何をして、次に何をやるのか」

「何つて……そうか」

「ん~?」

穂子の考えが読めた。

反対に静葉はさっぱりわからない様子で首を振り子みたいに左右に揺らしていた。

「そうだな。最初から考えりゃいいんだ。んじゃ実演しますかね」

「ま、待つてよ二人とも」

水織は事務室を出て、銭湯正面の入口に立つ。

「まず最初はこのカウンターで料金を払うんだ」

店によつては後払いという店もあるが、とりあえずここでは最初で。

「じゃあ、まずはお金だね」

いつの間にか穂子の手にはメモ帳が握られている。用意がいいじゃないか。

第一に、料金。

料金を一律にするのか、それとも年齢層で分けるのか。
ここはやはり大人と子供で分けるのがセオリーか。しかしあまり細かく分けてしまつても面倒なだけで。

「穰子、メモに大人と子供で料金を分けるつてメモしておいて」

「うん。それじゃ、肝心の金額はどうするの？」

「ううん、そうだな……」

ちなみに、実際の銭湯での入浴料金は物価統制令という勅令の規定により、各都道府県の知事の決定で料金の上限が定められる。平均で考えると地方によつて多少の差異はあるが、大人ならだいたい四百円程度、子供はその半額ぐらい。

さらにちなみに、上記の料金分けは幻想郷用にと大人と子供だけと簡略化してあるが、実際は『大人』（中学生以上）、『中人』（小学生）、『小人』（未就学乳幼児）と細かく三つに分けられる。

そういうえば幻想郷のお金つて、元いた世界と同じなのだろうか。試しに穰子に聞いてみると、見覚えのあるようないょうな銅銭を差し出してきた。

……何だっけコレ。

確かに、和同開珎わどうかいちんだっけか。

それとよく似ているような、元いた世界じゃ滅多に見られないような穴の空いた古ぼけた銅銭だ。

価値は……古銭収集家というわけじゃないしよくわからない。

「ううん……イマイチ価値観がわからないから、そこは穰子に任せるよ」

「うん、了解」

ふんふんと鼻歌交じりにメモをとつていく。

さて、基本料金が決まったところで次は何だらう。

「水織、銭湯に入る時気をつける事とかあるの？」

「気をつける」と、「

脱衣所を抜けで出来上がりたばかりの大浴場で穣子が水織に訊ねた。

銭湯で気をつける」と……か。

「石鹼で滑つて遊ばない。うつ伏せで口ケットスケートやると色々悲劇……」

「何の話よ」

「昔そんなことをした巡査がいたって話」

「??？」

「冗談はさておき、銭湯では色々とマナーがあるのは事実だ。穣子は恐らくそれを自分に確認してくれるのだろう。姉が少しマイペース過ぎるせいか、彼女はどうやらじつかり者らしい。

「そうだな……風呂のお湯がどんなに熱くても、水で温^{ぬる}くしちゃダメだな」

「え？ 何で？」

「銭湯は共同の浴場だからな。個人の都合で勝手に水を足したりしちゃダメだ。熱いお湯が好きって人に迷惑だろ?」

「でも、それじゃ熱いお風呂苦手な人は入れないよ?」

「普通お風呂に入る時は最初に体を洗つて体を慣らすもんだろ。だから多少熱くても我慢すること」

「ふえ……」

ほとんど銭湯を知らない子供向けの注意書きを、箇条書きで穣子が一通りメモしていく。

これを後で脱衣所辺りに張つておけば大丈夫だらう。

それから三人で水織の実演を交えながら細かな部分を確認すると、いつしか茜色の空模様となっていた。

やはり秋の夜は早い。

何時しか人里にも提灯の明かりがぽつりぽつりと灯り始めた。

「……じゃあ、営業時間は普段は夕方から深夜まで。たまには早朝営業もして、水曜日が休業日ってことでいいか」

「うん。うわあ、何だか緊張してきちゃった。これから忙しくなりそうだね」

「これも信仰のためだよお姉ちゃん。三人で協力して頑張らないとね」

「あ、水織君。この銭湯の名前は？」

おっと。ここまで考えて肝心な事を忘れるところだつた。
しかしこの銭湯の名前に関しては既に一つの候補を考えてあつた。

「そうそう。この銭湯の名前なんだけれど」

「うんうん」

一ツと笑みを浮かべ水織は銭湯の名を一人に告げた。

「静葉と穂子は秋の神様だろ？だからさ、シンプルに『秋の湯』つてどうゆふよ」

ちょっと気を利かせた水織会心の命名。

姉妹一人の表情は言うまでもなく、こうして幻想郷に初の銭湯『秋の湯』は誕生したのであった。

第九話 名付けて『秋の湯』（後書き）

どうにか人里の中心で銭湯を開店した水織と秋姉妹。
現世の人間と、幻想の秋の神。
奇妙な形で繋がった三人の銭湯経営は、果たして上手いくのだろうか？

静「私たちの物語はこれからだ」

穰「つて、これじゃ打ち切りみたいじゃないの！？」

それと、幻想郷のお金の設定はわかりやすくするためのオリジナル設定です。

次回更新はやつぱり三日後くらい。
そして次回より第一章が始まります。

第十話 絵揃わんを探して

「なあ、お兄ちやん」「せや

週に一度早朝営業をする日曜日。

浴場をテックブラシで掃除をしていた水織は、湯船につかる老人「じょいじょい」と手招きされて視線を向けた。

「ん? どつたの爺ちやん」

老人は真後ろの壁を指差して水織に言つた。

「この壁、真っ白で味気ないの? 何か絵を描いたりせんのか?」

「あ……それは」

実は水織も秋の湯が出来た時からずっとこの壁が気になっていた。
何も描かれていない、真っ白な壁。

本来の銭湯なら、ここにペンキ絵と呼ばれる銭湯の象徴ともいえる特殊な絵を描くのが普通なのだが依然として秋の湯の壁は未だに白いまま。

このままでは少し、いや、かなり寂しいものがある。

「じめんな爺ちやん。本当は大きな絵を描く予定だったんだけど、出来上がったばかりでまだ描いてないんだ」

「そうかそうか。ちいと残念じやの?」

「うん……」

真白な壁を見上げ水織は眉を寄せた。
やつぱり、真っ白なままじゃダメだ。

どつにかして、この秋の湯の象徴となる“ペンキ絵”を描かなくては。

掃除用具を抱えた水織は老人に「じゅつくり」と一言残してから男湯を足早に出ていった。

・・・

「え？ 絵の上手い人を知らないかつて？」

カウンターでお客さんに釣銭を渡していた様子はつうんと小さくうなつて、該当しそうな人物を思い描いたが、やがて首を振った。

「……私の知り合いには、そんな人いなかなあ」

「ん、そっか……」

「どうしたの急に。もしかして水織の趣味？ イモ判でよければ作つてあげよつか？」

「いや、いらねえ」

小さ過ぎてペンキ絵に使えるわけがないし、というか何故イモ判だ。凝つた年賀状作るとき以外で耳にしたの初めてだぞ。

「あれ？ 何の話してるの～？」

休憩を終えた静葉が事務所から顔を出す。
ちょうどいいから一人にも事情を説明しようか。

「実はさ……」

・・・

「なるほど。それで絵の上手い人ってわけね」

事務所に場所を移して三人で小会議。
水織は早朝の老人のことと、それから元いた世界でのペンキ絵のことについて話をした。

静葉も穂子もうんうん頷きながら話を聞いてくれている。
穂子はともかく、静葉の方はちゃんと理解しているのか少し心配だつたが。

「でも、幻想郷で絵の上手い人って聞いたことないねえ」
「私も思い浮かばないな……」
「ちなみに一人とも絵は描けるか？」
「へのへのもへじなら上手いよ～？」
「……それは落書きじゃないのか」

それぐらいならオレも描ける。

しかもただの絵ではなく、銭湯専用のペンキ絵となるとずいぶん
勝手は違う。

仮に絵の上手い人を見つけたとしてもそう簡単に描けるような代
物ではない。

「ほら、前に言つてた能力。絵が描けるって能力の人とかさ、い
ないのか？」
「いるんならとっくに教えてるつて」
「そうだよなあ……ううん、困ったな」

水織自身も流石にペンキ絵となると描けない。

ただ絵筆を走らせる絵画とは違つてかなり大がかりな作業になる。

もちろん人一人では描けないから、誰か他の人の助けも借りなくてはいけない。

「お困りのようですね？」

と、いつの間に現れたのか射命丸文が事務所の戸にもたれながら立っていた。

「うお、あんたはいつぞやの新聞記者の」

「清く正しい射命丸です。覚えてくれたんですね」

「――」笑顔の文はペンをくるくる回しながら手帳を取り出すと、ぱらぱらとページを捲りやがて止まる。
何が書いてあるのだろうと水織が覗きこんだら額を叩かれた。

「ダメですよ。」の手帳は幻想郷のトップシークレットです。さて、お探しの絵描きさんですが、森に行ってみてはどうでしょうか?」「森?」

「ああ、魔法の森だね」

穂子が水織のフォローをする。

文は場所を知らないという水織のために手帳に手製の地図を書きだしそれを千切ると水織に手渡した。

「この里からそう遠くない位置にあるようだ。」

「魔法の森の近くに香霖堂と呼ばれる道具屋さんがあります。その店主は外の世界のものも集めてありますし、話をすれば何か力を貸してくれるかもしれませんよ?」

「香霖堂……外の世界のものも集める道具屋か」

外の世界のもの、か。かなり興味がある。

それに、いざとなれば画材やペンキを買わなければならないのだから都合がいいかもしない。

……まあ、売つていればの話だが。

「決まりだね。香霖堂に行つてまずは道具を揃えると」

「先に道具を集めるつてのも何だかなあ。タヌキの皮算用みたいな先に絵描きを見つける方が順当な気もするが、水織は魔法の森へと向かうことを決めた。

「それじゃ、明日にでも行つてみるか」

「おー」

「うん。そうだね」

「いや、静葉か穂子はここに残らないといけないぞ。店番がいなくなっちまつか」

「明日は臨時休業つてことで」

「……仕方ないな」

こきなり臨時休業する銭湯というのはどうなのか。

結局何をしに来たのかわからない文を見送ると、水織は次の日に備えて早めに寝ることを決めてからボイラー室の方へ向かっていった。

・・・

そして迎えた次の日の月曜日。

本日の空は生憎の曇り空で、遠くには薄く黒ずんだ雲まで見える。

「ひづや、一函きそうだ
「森の中なら多少は雨宿りできるから大丈夫でしょう。ほり、見えてきたよ」

人里から北東へ向かつて歩き出してから十程度だらうか。
視界の先にうつそうと広がる森林地帯が見えてきた。

入り口にいたと、暗い。

森の木々がただでさえ少ない陽光を遮り、奥は一層の闇が広がつている。

顔のようにも見える樹木の表面が何とも不気味な霧囲氣を醸し出している。ここで肝試しかやつたらしく樂しそうだ。

「んじや、香霖堂とやらを探し……お、おこ。どうしたんだよ穂子

姉妹は水織の背中にくつついたまま一向に離れようとせず、がくがくと小刻みに震えていた。

穂子が青い顔して震えた声音で告げる。

「い、いにい恐くないよ？ 全然、まつたぐ、これっぽっちも…」「んじや手を離せよ。動きにくいつたらぎやあああッ！？ おま、ばッ、それ関節入ってるぞオイ！？」

「穂子ちゃん、オバケとかダメだもんねえ。寝る時いつも私にくつもじもじって」

片手で水織にしがみ付きながら、もう片方の手で静葉の口を塞ぐ
といふ何とも奇妙に器用な動きを見せる、穂子は涙ぐんだ顔で叫ぶようにしていった。

「い、いいから行つて！ わ、私は水織の背中と守るからさ、水織

は365度全方位見張つてちょつだい…

「全方位つて、5度多いじゃねえか」

体にくつ付いたままの穂子を引きずるよつしながり歩きだす。田の光があまり届かないせいか、この森に入つた途端一気に体感温度が下がつたような気がした。

薄闇の中でもうにか見える視界では奇妙な色をしたキノコがうねうねと身をよじつているのが見えた。

何なんだこの森。

薄気味悪いつレベルじやない。

本当にこんな場所に道具屋を営んでいる人がいるところのだらうか。そしてそれはいつたいどんな人物なのだろう。

興味があるような、しかし出来たら知りたくないような複雑な心境だ。

ジメジメとぬかるんだ道を適当に進んでいくと、やがて道の向こうが白み始めてきた。

光の向こうには開けた場所、それから小さな小屋が見えた。

「あれが……香霖堂つて道具屋か？」

古びた外見に、所々剥がれ落ちている瓦屋根。

店先の看板はボロボロで、何か書いてあるだらうはずなのに全く読み取れない。

恐る恐るといった感じで水織が近づいて中を覗きこんでみると、店内は雑貨なのかガラクタなのか区別のつかないよつな物でじゅうやじゅうしていた。

「いーいめんくだぞーー……」

声が店内に響き意味もなく虚しくなる。

埃っぽい店内は見た目通り古びたカビと埃の匂いで包まれていた。

「……誰も、いないのか」

「だけど、いたような跡はあるよ。ほら」

静葉に指差され気がつく。

店の奥、店主の自室と思わしき部屋のちやぶ台に、湯気ののぼる湯のみが見えた。

それはつまり中身を入れてまだ久しく時間が経っていないということ。

「つてことは、待つてればお店の人があるのか」

「じゃあ、ちょっと待つてよっか」

「……穰子、いい加減離せ」

「も、もうくつ付いてないでしょー！」

そうしてしばらく店内でぼんやりと過ごす水織たち。

水織は店内のガラクタを適当に眺めたりして、静葉と穰子は、何処かの温泉旅館の紅葉饅頭のパンフレットに釘付けになっている。まさか実家じゃないだろうな、と覗きこんだが見たこともないような旅館だった。

「おや、お客様かな」

凛と澄んだ、落ち着きのある声が聞こえて振り向くと、そこには

銀の髪で眼鏡の少年が何かを抱えたまま玄関で立っていた。

「よかつたら、手伝ってくれるかな。一人で運ぶのは意外と苦でね」「り、了解です」

そのまま少年の荷物を倉庫のような小部屋の奥へ運ぶと、少年は水織に微笑みながら礼を述べた。

とても誠実そうで優しそうな少年だ。落ち着いた印象もあつてか、少年は水織よりもいくらか年上に見えた。

「ありがとう。おかげで助かった」

「いえ、これぐらいどうってことないっす。えと……」

すると、少年は水織が言わんとする言葉をわかっているかのよう

に水織の口元を手で制し、少しづれた眼鏡の位置を直した。

「血口紹介がまだだつたね。僕は森近霖之助。もりうちかつらのすけ」（）で商いをさせてもらつてる者だ」

「草津水織です。あの、実はちょっと訊きたいことが」

「ああ、いいよ。とりあえず店に戻るつか。神様を待たせちゃいけないしね」

霖之助と名乗った少年は水織の腋をぬけて店の方へと戻つていつしました。

「……あれ？ オレ、静葉たちのこと話したつ？」

「水織君、じつちだよ」

「う、うーつす」

霖之助に呼ばれ、水織は小走りでその後を追いかけた。

第十話 絵描きさんを探して（後書き）

新章、突入。

そしてこつそり飛び出したバカテスネタ。

お気に入り登録件数40件突破、ありがとうございます。

今回、全体的にちょっと地味なお話だなあ……

二章のタイトルを更新したら、今日はパパッと寝ちゃいます。

最近片頭痛が酷くて酷くて……；

第十一話 秋の湯のペンキ絵

「なるほど。銭湯の象徴ともいえるペンキ絵を描く材料と、そしてペンキ絵の描き手を探してゐるわけだね」

事情を霖之助に話すと、彼は興味深そうに眼鏡の縁を少し持ち上げた。

よく見るインテリのポーズだ。

水織は眼鏡などかけないから無縁だが。

「それあの、霖之助さんはペンキ絵を描ける人を知りませんか？」
「ペンキ絵か……ふむ」

瞳を閉じ、腕組みしながら思考するその姿が眼鏡と相まって様になつてゐる。

やがて霖之助は口を開いた。

「残念ながら、僕にも思い当たる人物が浮かばない。絵描きを能力ちからとしてる人もいないんじゃないかな」「そ、そうですか……」

霖之助の言葉に、水織は落胆しがくんと肩を落とす。

これで秋の湯のペンキ絵計画がふりだしに戻つてしまつた。

あの爺ちゃんが悲しむ姿が脳裏に浮かぶ。
せつかくの銭湯なのに、秋の湯の壁は何も描かれない真っ白な壁。
それはまるで、ジャムの入っていないジャムパンをかじるような気持ちだ。

どうにか、ペンキ絵を描けないものだろうか。

と、不意に霖之助は一つうなづきこんなことを口にした。

「でも…… そうだな。僕でよければ協力しようつか」

「え？」

突然の霖之助の言葉に首を上げ水織は目を丸くする。

「といつても、下手の横好き程度の画力しか持ち合わせていないけど。それでもいいかな」

「霖之助さん……！」

「霖之助でいい。さんは要らないよ」

ガッシと霖之助の手を握り（ほとんど潰すような勢いで）、水織は何度も何度も上下に振りまわした。

「ありがとうございまっす！」「これで、ペンキ絵が出来るッ！」
「やういえはさあ水織。ペンキ絵つてホントに必要なおあだあッ！
？」

水織の鉄拳が穂子の脳天に直撃し、その愚鈍な言動を止める。
当然穂子は涙目で水織に訴える。

「な、何するんだ水織！？ 神様を殴るとか罰当たりだ！」

「罰当たりもくそもあるか！ 錢湯には必要不可欠なんだよ。本當は、もつと前にオレも描きたいと思ってたんだけどさ。にとりたちにまた手伝わせるのも悪いと思ったから、言つに言えなかつたんだ」「そ、そつ……なんだ。あたた……」

他者にはなるべく迷惑をかけるべきではない。

それが女の子なら尚更、自分がお世話になつた女の子なら絶対、だ。

だから水織としては自分の力で、あるいは自分の行動で解決したかったのだ。

水織の手がほどけると、霖之助は早速小さな紙と筆を取り出し、ペン回しの要領で筆をクルクル弄びながら訊ねた。

「さて、ペンキ絵として描くなら何を描くのかな？」

「あ……えつと」

「……今までやつて、すっかり忘れてた、とは言ひづらじ。

その場で脳みそをフル回転させ浮かび上がったイメージは、ペンキ絵としては最もベーシックな絵だった。

「……山っす、山。あっちの世界じゃ、ペンキ絵って言つたら大抵富士山つて言つ日本で一番大きな山を描くんです」

「なるほど。幻想郷で言つなら妖怪の山と言つたどこのか」

すると霖之助がフリーハンドで紙に筆を走らせていく。緩やかな曲線で山の斜面を描き、背景には雲と太陽を上らせる。驚くべきことに、彼は下書きも何もなしに見事な水墨画を描いてしまった。

今すぐ額に飾つたらいくらか値が付きそうだ、それはとても下手の横好きとか言つレベルの代物ではなかつた。

「す、すげえ！？ 霖之助、絵がめちゃくちゃ上手い！」

「それほどでもないよ。これは落書きさ。実際はこんな小さな紙に書くんじゃなくて銭湯の壁に描くんだろ？ もっと大掛かりになる」

「そ、そつか……それもそうだな、うん」

「他にはどんな絵があるんだい？ もっとイメージを膨らませて、候補を描いていこうじゃないか」

「う、うつす！」

水織が絵のアイデアを出し、霖之助がそれを描いて、一人で思考する。

この一連の流れを、彼らはこのまま夕刻まで続けることとなつた。

「私たち、暇だなあ……」

「これなら、水織だけで来た方がよかつたんじゃ」

「おい、静葉、穂子も」

姉妹が退屈で不貞腐れていると、水織が数枚の紙を握りながら手招きしていた。

何の用だらうか。

一人が首を傾げていると、水織は純粹無垢な子供のよう笑いながら一枚の絵を取り出した。

「秋の湯のペンキ絵なんだからさ、当然秋の山の方がいいよな？」「あ……」

それは、妖怪の山を背景に紅葉を散らす、秋満載の風情ある絵だった。

・ · ·

そして次の日。

この日、秋の湯は一日連続しての臨時休業となつた。

里の人には迷惑をかけるかもしれないが今日だけは我慢してほしい。

「まさか昨日出たあの絵をいきなり描くとはね。驚いた」

「善はマッハだって言つからね」

「音速で善い口トをする、か。それはそれで『利益もマッハで来そ
うだ』

昨日分かったことだが、霖之助はかなり頭が切れるらしい。少な
くとも水織よりは確実に。

水織としては、まるで兄のよつた存在で非常に頼もしい存在だっ
た。

……どうせなら霖之助のような兄が欲しかった。

……出来ればあの姉と交代してくれないだろうか。

「それにしても、これが君たちの秋の湯か。綺麗な店じゃないか
「まだ出来て間もないですから」

「……そういうえば、どうして秋を司る君たちがこの店を?」

「まあ、色々と事情が……」

「ふむ……まあ、余計な詮索はしないでおくれ。や、作業を始めよ
うか」

香霖堂から持ってきたペンキ絵用の特殊な塗料や大きな筆などの
画材を抱えると浴場へと向かう。

今日はもちろん誰もいないしお湯も出していなかったため、大浴場は
ひんやりとした空気で満ちていた。

向かって正面の壁、湯船のすぐそばにある真っ白な壁。
霖之助は湯船の中に道具一式を置くと早速支度を始めた。
水織もジャンパーを脱いでアンダーウェア姿になる。

「う、ちっと寒い」

「むしろ着てた方がいいんじゃないのかい? ペンキが肌について

しまつよ

「いや、このジャンパーは気に入ってるんで」

丁寧にジャンパーを折り畳んで邪魔にならない場所に置く。霖之助はペンキ絵専用のペンキを用意していてバケツにそれぞれの色ごとに分けて流し込む。戸を全開にして換気扇も回し空気の循環は確保。そして、この秋の湯に描くペンキ絵のラフイラストのメモを取り出すと、一人して壁とイラストとを何度も見比べる。

「それで……どこから描けばいいのかな」「えっと、確か

頭の中の記憶を掘り起こし思い出す。

ペンキ絵は細かな下書きをあまり必要せず、フリーーハンド且つ大雑把に描く。

例えば、最初は山の斜面のラインだけだと、背景の雲の位置を適当に目印付けるとかその程度だ。

ふと、ペンキ絵は芸術ではなく男氣だ、とか委泉が楽しそうに言っていたのを思い出した。

そういえば祖父は妙に銭湯というか、お風呂が好きだった。

別に水織は嫌いではないが、かといってそこまで情熱注ぐほどでもない。

そんな自分が今ペンキ絵を描こうとしていると思つと、何だか不思議な心境だった。

「ホント適当で大丈夫っす。最初に背景ちゅーじつと描いて、それから妖怪の山のライン描いて色をつけて」

「なるほど。じゃあこんな感じでいいか」

黒のペンキの入ったバケツに大きな筆を浸すと、霖之助は早速筆を走らせた。

背景には茜色の空と雲、それから紅葉を描く予定で、霖之助はそれらのだいたいの位置に薄く描いて、さらに山の斜面を描いていく。流れるような動作に水織は思わず見とれてしまっていたが、慌てて背景用のペンキを取り出しバケツに注ぐ。

水織も脚立を使って壁の上部に雲を描いていく。

その下で霖之助は妖怪の山の斜面を描き終わり、今は木々の部分を塗る色を調合していた。

「あ、ちょっと待つてください」

「ん？ どうかしたかな」

左右を飾る紅葉の葉を描いつとしていた霖之助を水織が止める。

「えっと、ペンキ絵は遠い方から順に塗り重ねていいくのがベストだと思つんです。だから最初に山と背景を完成させて、それから紅葉なんかの飾りを」

「ん、わかった。じゃあ僕もそつちを手伝つよ」

一人で上から下へと少しづつ絵を描いていく。

背景は空色に、山の斜面を紅と、所々にイチヨウの黄を混ぜながら染める。

段々と出来上がりしていくペンキ絵を見つめながら、ここまで全く仕事のない姉妹は呆けるようなため息をついていた。

「しかし、やることないわね……ちょっと面白そうなのに、見てるだけじゃつまんないわよ」

「……あの絵、綺麗だね」

「そりゃ、私たちの秋の山を描いてるんだから綺麗に決まってるよ

「だけど、今年はやつぱり色が薄いような気がして……」

「気にし過ぎだよ。信仰とかそんなことより、ホントはお姉ちゃんがネガティブ過ぎるからいけないんじゃないの？」

「そひ……かなあ？」

実際、人里から見える妖怪の山は見事なまでに紅一色で、静葉の言つよくな色の薄さなど微塵も感じられない。

やっぱり、姉の考え過ぎなのではないのだろうか。

役目を終えた冬になれば一人して落ち込むことはあるが、今はまだ冬じゃない。

「あ、そうだ。お姉ちゃん、私ちょっとだけ出かけてくるね」

「え？ うん……？」

何故か穂子は浴場を出て何処かへと行ってしまった。

私も一緒に、と思ったがペンキ絵のことが気になつて結局追い掛けはしなかつた。

そうこいつしているうちにペンキ絵はどうどん出来上がつていく。いつの間にか半分以上出来上がつているではないか。

「わあ…………す」「…………」

「あれ？ 穂子は？」

「さつきどつか行つちやつた」

「そいつか。ここまで感想でも聞こいつかと思つたんだけどな

「綺麗だよ。すつじぐ。本物より、綺麗」

静葉の田の前で広がる、紅に染まる妖怪の山は出来かけではあったが本当に綺麗だった。

本心での発言だったのだが、水織はぶんぶん首を振りながらそれを否定した。

「いやいや。本物には負けるさ。絵で見る妖怪の山と、田で見る妖怪の山は別物なんだし」

「負けず劣らず、つてとにかくなんじやないかな。僕も初めて描いたけど、なかなか良い出来だと自負しているよ。後は、残った部分を塗つてそれで完成だ。男湯が終わったら女湯も描かないと」

そして一言二言適当に言葉を交わすと一人は再び作業に取り掛かつてしまった。

仕方なく静葉は壁から距離を置いて一人の作業を見つめた。

「お姉ちゃん」

「穢子。それは……？」

いつの間に帰ってきたのか、穢子は浴場の戸口で息を切らせながら立っていた。

手には何やら良いくらいのする紙袋を握りしめていた。

多分、穢子の大好物の焼き芋だと思つ。

「水織も、あの人も頑張つてゐるのに何にもしないのって悪いと思つたからさ。差し入れについて」

「穢子は偉いなあ。私なんて何も出来ないのに……」

「じゃあ、お姉ちゃんも手伝つて。お茶も淹れてあげたいからさ」

「あ……うん。わかった」

そして水織たちが男湯の絵を描き終わったのを見計らつて一人は焼き芋とお茶の入った湯のみを差し出した。

「さ、差し入れです！」

「お、ありがと静葉。はい、霖之助のも」

「ああ、ありがと。ちゅうど喉が渴いていたんだ」

出来上がりったペンキ絵を見上げながら水織はお茶を一息で飲み切ってしまった。

そして受け取った紙袋から漂ってきた甘い香りに水織は苦笑を漏らした。

「……この焼き芋は穂子か。お前本当に芋好きだな」

「い、いいでしょ別に！ 文句があるなら返してちょうだい」

「しかもお前、何を勘違いしたのか三つしか入ってないぞ」

「ええ！？ そ、そんなハズは……」

紙袋から出てきたのは小振りの焼き芋が三つ。

穂子が勘違いして三つと頼んでしまったのか、それとも店主がうつかり間違えてしまったのか。

何にせよここにある焼き芋は三つだけだ。

「い、ごめんなさい！ あの、えっと、また買つてくるから」「ちよつと待つた

駆け出そうとした穂子の肩を掴むと、水織は自分の焼き芋を半分に割つて差し出した。

「オレの半分やるからさ。それでいいだろ」

「でも、それじゃ」

「いいつて。それに、たかが焼き芋一つで泣くな

「だ、誰が泣いて……！」

声を荒げた瞬間、穂子の瞳から一粒だけ零が零れ、水織は一ツと笑い、穂子は顔を深紅に染めた。

「差し入れ、ありがとな」

「あ……」

それだけ言つて水織は壁の方へ戻つていくと、早々に後付けを始めた。

ポカンとその場に立ち尽くしていると、背後から静葉が一コ一コしながら耳元で囁いた。

「どうしたの？ 頬、赤いよ？」

「そ、そんなコトないよ！？ ちょっと、お芋が熱かつただけで」

「いいなあ。私も半分こしてもらいたかったなあ」

「お、お姉ちゃんってば！」

ただでさえ赤くなつていた顔をさらご赤く染めると、穂子は逃げ出した姉を追いかけて浴場を飛び出して行つた。

第十一話 秋の湯のペンキ絵（後書き）

最初、ペンキ絵は妹紅に描いてもらひ予定でしたが、そもそもせひうやつて彼女と会うのだろうか、と考えたらボツになっちゃいました。妹紅だと豪快に描いてくれそうだったんだけどなあ……w

ひとまず、これで秋の湯のペンキ絵は完成ですかね。

さて、これからお話をどう転がしていくのか。

拙い文章で申し訳ないんですけど、「ひづ」期待なのです。

むむむ……穢子のキャラがぶれだしてきた；

第十一話 秘湯の噂

それから一日ほどで営業を再開したその日。

水織は出来上がったばかりの秋の湯のペンキ絵を見上げながら「テキブラシの上で器用に類杖をついていた呆けていた。

別に掃除をサボっているとかそういうわけではなくて、ただ何となく、元いた世界を思い出していたのだった。

「あれから結構経ったけど、姉貴や葉月さんはどうしてるんだろう……？」

この世界に来るというか、半ば無理やり引きずり込まれたというか、そのせいで家族や親しい友人には何の連絡も告げていない。向こううじや今頃大変な騒ぎになつてているのではないだろうか。突然、一人の人が消えたのだ。

水織の実家がどんなに田舎だとしても警察は動くだらうし、少なくとも新聞にだつてなつてているはずだ。

旅館を経営する姉貴の迷惑になつていなければいいが……

「こら水織！ サボるな！」

「サボつてねえよ！ ちょっと考え方してたんだ」

頭の片隅で元の世界のことを考えながら「テキブラシで床をガシガシと乱暴に擦る。

今日から仕切り直して銭湯を始めるわけだから綺麗にしておかなければならぬ。

しかも今日は霖之助が秋の湯に遊びに来ることとなつていて。尚更綺麗にしておかねば。

そして浴場の掃除を終えて石鹼の補充などの適当な雑務も済ませ

ると、水織は自分の担当しているボイラー室へと向かつた。

銭湯のお湯を管理する大事な場所。

利用してくれるお客様の好みもあるだろうが、ひとまず温度は熱めの42度。

来てくれる子供も最初は熱いだの何だの文句を言つが、結局最後には牛乳片手に笑顔で帰つていく。

その笑顔を見ると、ちょっと嬉しいというか、楽しいというか。委泉も、こんな気持ちを体験していたのだろうか。

「さて、と」

ボイラーの調整以外でこの部屋に用はないために出て秋の湯正面に立つ。

妖怪の山に沈みかけた夕日が黄昏色に染まつてゐる。

もう間もなくすればお客様が秋の湯に足を運ぶことだ。

「水織君、夕御飯の支度出来たよ」

「おう、わかつた」

夕食を済ませたら早速営業再開だ。

ほんの少し気合いを入れ直すと、水織は皿の方へと向かつた。

・ · ·

「秋の湯に、ようこそ」
「いらっしゃいませ！」

秋姉妹が笑顔でお客さんをお出迎え。

そういえば幻想郷の人たちにとつて、秋の神様に微笑みかけられながら暖簾をくぐるというのはやはり神聖な気持ちになるのだろうか。

でも、普通に接する人もいればちゃんとお辞儀をしたり、中には銭湯の料金とは別に費銭を置いたりする人もいる。

しかし、これって銭湯としてはどうなのだろう。神様商法つてちょっと卑怯なんじやないだろうか。

「やあ、水織」

「あ、霖之助。こんばんわ……ん？」

すると、霖之助の後ろから見覚えのある赤いリボンの少女と、見覚えのない金の髪の少女が現れた。

「リア充爆発しろ」

「な、何でそんな恐い顔してるんだ水織……？」

「おーおー、ここが銭湯つてヤツか。へえ……」

見覚えのない方、金の髪の少女は不思議な格好をしていた。

御伽噺の魔法使いがかぶるような三角帽子。

服は黒地に白いレースがあしらわれたドレスのよう、ローブのような出で立ち。

一見すると、典型的な魔女のような姿だった。

「いつもシャワーばつかだと風呂も恋しくなるからよ、銭湯つてのはありがたいぜ」

「魔理沙、ちゃんと金は払いなさいよ」

「銭湯つてのは読んで字の如く金を払うもんなんだろう？ それぐらいは図書館で予習済みだぜ。お前にそちゃんと払うんだろうな？」

「水織、私はツケで」

「銭湯でツケは利かねえよ！？」

「でも紫はほぼツケだと黙っていたのだけれど」

「それはそれ。これはこれ」

静葉が水織の言葉に反応して口帳を掲げてきた。

「え？ 水織君、紫さんの料金つてツケだったの？」

「色々お世話になつてゐし当たりま」

「あ、水織！」

「？」

「そういうえば、私も前に一度アンタを助けたわよね」

「し、しまつた……」

時既に遅し。

靈夢は我が物顔でカウンターを越えるとずんずん脱衣所に入つて行つてしまつた。

もちろん料金など微塵も出さない。霖之助の苦笑が横で聞こえる。

「ま、まあ、彼女の分は僕が払つから。気を悪くしないで」

「あ、ずるいぞ香霖。それならアタシの分も払つておいてくれよな。じや」

「おい！ 魔理沙の分まで払つとは一言も」

脱衣所の戸がピシヤリと閉められその声は届かず。

霖之助の苦笑いと、水織の鋭く突き刺さるような視線だけがこの場に残る。

「『』、誤解してるようだけど、彼女たちとは何の関係もないからね

？ ただの友人だ」

「そういうことにしておいてやる」

「手厳しいなあ……ハハ」

三人分の料金を払つて脱衣所に向かう彼の背中は、心無し猫背の
ように見えた。

……しかし、まさかこの世界にもリア充がいるとは思わなんだ。

「あ、売り物の牛乳補充とかないとな」

「コーヒー牛乳、フルーツ牛乳は鉄板だ。

風呂上がりのこれのためだけに秋の湯を利用してくれるという人
もいるくらいだし補充は欠かせない。

個人的にはイチゴ牛乳が好みなのだが何故か銭湯では見かけない。
何故だろうか。

「だ、ダメですって！　まだ痛みが引いてないのに歩いちゃ……！」
「……何だ？　女の子の声？」

倉庫から牛乳の入ったケースを持ってきてカウンターに戻つた時、
甲高い声と口論するのが聞こえてきてふと手を止める。

声は秋の湯の玄関から聞こえてきて、水織が早足で向かうとそこ
には見覚えのある老人と少女の姿があつた。

「あ。爺ちゃん」

「おお、兄ちゃんか。こんばんは」

水織の呼びかけに、その老人はニカツと歯並びの悪い笑顔で振り
返つてみせた。

しかし、何故か後ろに立つている少女はご立腹の様子で、老人の
腕を握つたまま放すことはなかつた。

「まだ動こぢやダメですつて！ 家で安静にしてないと危ないですよー。」

「たかがぎつくり腰程度で大袈裟なんじや。わしゃ別にこのぐらい何でも……はうッ！」

「じ、爺ちゃん！？」

痛みのせいか、老人は苦悶の表情を浮かべるとその場でぐりっと揺れ崩れてしまった。

少女がその体をどうにか受け止め支え、水織も肩を貸した。

「すみません。」迷惑をかけて

「いいよ。気にすん……？」

改めて少女の姿を見つめ思わず言葉に詰まる。

幻想郷の住人は、一部例外を覗いてほとんど和服や着物のような古めかしい姿をしているはずなのに、彼女の姿はどう見ても学校の制服のようだった。

セーラー服じゃなくて、ブレザータイプの。

そういえば水織も幼稚園の時に一度着たような覚えがある。

いや。特筆すべきは衣服だけではない。

彼女の頭には何故か、綱タイツ姿で、胸ぼーんの腰きゅうなお姉さんが付ければバツチシ似合いそうなウサギの耳がピコピコ揺れているのだ。

ブレザー姿にウサ耳とはどうこうセンスだ。

この老人に付き添つているとはつまり……

「あ、アンタこの爺ちゃんの孫娘か？」

「え、ええ！？ 違いますよお。私は鈴仙と申します。今は、お師匠様のお仕事の手伝いでこの方のお薬を届けに来たんです」「薬……お医者さんってことか」

「えっと、まだ見習いのようないのですか？」

ブレザーでウサミミで看護婦見習い？

どつかの大きなお友達向けな属性だなオイ。

「この人、腰を痛めているといつのに銭湯に行くんだと聞かなくて
「湯治といつものを知らんのか！ 腰も温かくしてりや 治るわい、
ツツツ……」

「だから、無理しちゃダメだつて……」

痛みを伴い尚も立ち上がりとする老人を鈴仙が制する。
言動は元気だがその額にはかなりの汗が滲んでいる。相当な無理
をしているのは火を見るよりも明らかだ。

「あの、どうしてそんなに銭湯にこだわるんですか？ 前はそんな
ことなかつたのに」
「もちろん、出来上がったばかりのベンキ絵を拝みに行くためじゅ
よ」

「爺ちゃん……」

水織の心がブルッと震える。

早朝に会つたあの時から、この老人は秋の湯のベンキ絵をそこまで
楽しみにしていてくれたのだろうか。

でも、何故だ？

幻想郷に銭湯の文化はないはずで、故に素人が見てここまで感動
されるほどのものだろうか。

……いや、違う。

水織は心の中で首を振つた。

そんな細かな理屈とかはどうでもいい。

今は、この老人のために出来るることをしてやればいいのだ。

「鈴仙、ちょっとといいか?」

「はい?」

「オレがこのまま爺ちゃんを抱いで行くから、今日だけ勘弁してもらえないか?」

「いや、でも症状が悪化したらお師匠様に怒られちゃうし……」

「医者の見習いだって言ってたつけな。一つだけ教えてやる。世の中にはな、湯治^{とうじ}っていう治療方法があるのさ」

「湯治……?」

鈴仙にとっては知らない言葉だらうし聞き慣れない言葉だらう。首を傾げるのも無理はない。
と言つても、水織自身もそこまで詳しく知つてゐるわけではないが。

「銭湯とかで体を温めるとな、筋肉痛とか皮膚病とかに効果があるのさ。昔つから伝わつてゐる伝統的な健康法つてヤツだ」

本当は、半分嘘で半分事実なのだがこの場を誤魔化すにはちょっといい。

少なくとも、目の前の鈴仙の瞳がキラキラと輝いてゐるから効果はあつたみたいだし。

……? こいつ、本当のウサギみたいに紅い目をしてゐる。

「湯治……ですか。今度、お師匠様にも質問してみないと」「今日だけ勘弁してくれ、な?」

鈴仙は渋々と言つた感じで小さく頷くと老人を水織に任せ、夜の人里を去つていった。

しかし、こんな夜に女の子一人で大丈夫だらうか。

水織の時同様、妖怪に襲われなきゃいいが……つと、鈴仙も気になるが今はこの老人が最優先だ。

「でも、銭湯のお湯じゃあんまし効果ないんだよなあ。結局はただのお湯だし」

「そりゃう。せめて、噂に聞く鬼の秘湯ならば、効果はあるかもしれん」

「鬼の秘湯……？」

「少し前に、新聞で見た噂なんじゃがのう」

少し前、この人里から遠く北東で間欠泉が吹きだすという事件があつたらしい。

その一連の騒動の中、地底世界のある場所で偶然小さな秘湯が出来上がったという。

しかし、そこはどうも鬼の住処となっているらしく、現状ではほぼ鬼たちの占領状態なのだとか。

いつたいどんな物騒な記事だ、と言いかけてあの新聞記者を思い出した。

そういうえば、静葉たちが彼女を幻想郷最速の新聞記者だと叫んでいた。

つまり、逃げるのも容易だつたということだろうか。

実はどんな新聞記者なんじゃないか、アイツ。

「そんな秘湯にでも入れれば、こんなぎつくり腰なんぞあつという間に治るんじゃね？」「ううだなあ……」

老人の手伝いをしながら、水織は少し思考を巡らせていました。
この秘湯とやら、上手く活用できないだろ？
例えば、そのお湯を……いや、ダメだ。

「いくらなんでも、パイプ使うとしても距離が遠すぎる。未来から来たネコ型ロボットじゃないんだし、空間と空間繋げるなんて出来な……ん？」

水織はあることを思い出す。

この秋の湯を、たつた一晩で妖怪の山から人里まで移動させた彼女。

もしかしたら、彼女に協力してもらえば何とかなるのかもしれない。

「……明日、ダメ元で聞いてみようか」

老人の歎声が聞こえる脱衣所の中、水織は神出鬼没なハ雲紫とトンタクトを取る方法を考えていた。

第十一話 秘湯の噂（後書き）

静「じつもんばんは～。今日は夜斗さんの代わりに、私たちがあとがきを担当させていただきます」

穰「え？ アイツは何処行つたのよ？」

静「んつとねえ、なんか小奇麗なスーツ着て『オレ、千早をトップアイドルにしてぐる（キリッ』とか言つて出かけちゃつた」

穰「……千早つて誰よ？」

静「ああ……？」

穰「せつかく昨日誕生日だつて聞いたから、スイートポテト作つて持つてきてやつたのに」

静「残念だねえ。さて、次の更新は10月31日更新予定で～す

穰「うん。お楽しみに」

静（穰子、タグには気づいてないみたい……くすぐす）

第十二話 繋げ、スキマパイプライン

「おはよう水織君。やつやくで悪いけど、朝一番のお風呂を頂いたわ」

早朝営業の日曜日。

今の今まで水織が何とか会えないかと画策していたのに、当のハ雲紫は水織のそんな努力をあざ笑うかのような形であつさつと秋の湯に現れた。

朝風呂を浴びてさつぱりとした顔で、白く滑らかな肌が輝きを増してつやつや輝いている。

「今日も素敵ですね紫さん」

「ふふふ。褒めたつて何もあげないわよ?」

店の冷蔵庫を勝手に開けて牛乳を飲む。腰を片手に一気飲みする姿が眩しい。美人は結局、何をしても美人なのである。

「……あのー、お金は」

「(口)に秋の湯を移設させたのは誰の」

「あーあーわかりました。ツケですねえー」

半ば投げやりに眩き穢子が台帳に赤線を引く。

「(口)や(口)紫のツケは全部しつかりとメモをしていぬりしこ。

……そういえば、どつかの高校生もパシリにされた時のツケをメモしてたっけ。

回じよりに返す時は恐ろしこのだらつか。

「それで、私に何が」用？」

「ああ、はい。実はちょっと訊きたいことがある」

水織は老人から聞いた地底にあるという鬼の秘湯のこと話をし、それからそのお湯をどうにか紫の力で引けないものかと訊ねた。
一応、引く、という言い方にどうやら通じたらしく、紫はふんふんと頷きながらほんの少しずつ口の端がつり上がりついた。

「なるほど……つまりこれを利用すれば、私はただで温泉に入り放題、と……」

「いや、アンタなら勝手に地底世界にでも下りりや入れるでしょうよ」

「えへ、やだあ？ 地底の世界とかこわあーい」

静葉、ティッシュ。

「…………ほん、それで、あの、出来るんですか？」
「そうねえ。ただ空間を繋げるだけだし他愛もないでしょ」「ありがとうございます！」
「あら、まだ手伝つだなんて言つてないわよ？」
「つぐつ……」

期待せせて、あつさり落とされた。

それはまるで紫の手の上で転がされてるような気持ちだったが、あの老人のため。
ここで簡単に引き下がるわけにはいかない。

「え、えっと。毎日牛乳をサービスで付けます！」
「うん……」

首を縦に振らない。

「どうか、これは毎日やられてるから意味がないな。

「じゃあ、オレが毎日お風呂上りの紫さんをマジサーうぼがあッ！？」

「変態水織いッ！」

「そうねえ……でも、マジサー・ジ・チ・エアとかは欲しいわねえ。あの河童にでも依頼しましょつか」

穢子にバツクドロップ喰らってる間に話が違う方向に反れた。

……それにしても、どうにか紫の首を縦に振らせるような良いアイデイアはないものだろつか。

「あ、そうだ」

天地がひっくり返った状態の水織が思案しているとポンと紫が手を叩いた。

「温泉タマゴ。私あれが食べたいわあ

「温泉……タマゴ？」

「ああ！ それなら私も食べてみたいかも」

「ええ……？ 温泉タマゴなんか食べたいの？」

田を輝かせる紫と穢子を交互に見ながら水織は姿勢を直して強打した首をさする。

死ぬかと思つたが、一応折れてなかつた。うん。

「そうよ。温泉と言つたら温泉タマゴでしょ

「私も、一度でいいから食べてみたいと思ってたんだあ。水織、温泉行けば作れるの？」

「一応作れるけど……そんないいもんじや」

「……ヒデカイ音がしたかと思つて、こいつの間に用意したのか、力ゴいつぱいの卵と何故か雌鶏一羽。

卵はともかく、雌鶏は必要ないだらうと思つたのだが。

「じゃあ、水織君と貴女たちで行つてらっしゃいな。地底の大穴の場所は知つてるでしょう?」

「いや、でも店はどうするんだよ」

「臨時休業だね」

「……開店してから臨時休業多いなこの銭湯」

迷惑ではなくお湯をかけるのが銭湯なのだが、

何だかお客様に申し訳ないな。

すると、紫が水織の方を見つめながら小さく唸つていた。

「あれ? どうかしたんですか?」

「いやね、流石に何の装備も無しに地底世界に行くのは危険だと思つたから」

「お、オレのこと心配してくれるんですかツー?」

「ううん。何か武器かなにかを持たせないとと思つてね」

「……武器?」

そして思い出したのだが、水織たちが今向かおうとしている場所は鬼の住処となつてゐる地底世界。

確かにそんな場所に丸腰で行つたら命の保証はない。

……といふか、今頃になつてそんな危険な場所に向かうと思つたら体が震えだした。

一步間違えたら死んでしまう。

少なくともこの世界には本物の妖怪がいて、神様がいて精霊がい

る。

そんな世界だから、この世界の鬼も、恐らく水織の頭の中にある通りの筋骨隆々な化け物であるはず。

「あの、そんな危険な場所に静葉や穂子、ましてやオレなんかが行つて大丈夫なんですか？ 普通にオレ死んじゃうんじゃ」

「そつならぬために武器を用意するの」

そこはどちらかと言えば防具を用意するのでは？

まさか攻撃は最大の防御とか言つんじゃないだろ？

それとも紫は、RPGで言つとこりの、防具よりも武器に金をかけるタイプなのだろうか。

水織の不安など露知らず、紫は適当に用意すると言つて右手を薙ぐと、また何処かへと姿を消してしまった。

静葉も穂子も、別段恐怖を感じているようには見えない。むしろ嬉々とした表情で談笑している。

この先、大丈夫なのだろうか。

「ああ～あ。どつかに緑色の自分が一つ増えるキノコ落ちでないかなあ……」

出来れば本当に欲しい。

今ほどあの配管工兄弟が羨ましいと思つたことはない。

・ · ·

そして迎えた次の日月曜日。

臨時休業の立て看板を置いた秋の湯は何となく寂しそうな顔をし

てこるよつに見えるのは、氣のせいなのか、それとも水織の心情なのか。

水織は紫に家で待つていろと言われ待つてているのだが未だに姿を見せない。

姉妹の方はもう少しすれば来るだろつ。

欠伸をしながら玄関の前で待つているとトントン、と肩を叩かれ回れ右。

「お待たせ」

「うお、紫さんか。おはよハジヤコマサ」

今日も変わりなく美しい。

朝日を反射する金の髪はライ麦畠の穂のようにキラキラと輝いていた。

「それで……そつそつ。貴方の武器持つてきたわよ」

「あ、ありがとウサギモコモス…………？」

ほい、紫に手渡されたものは、元いた世界でも見覚えのあるものだった。

木製の棒にグリップ、先端は西洋の剣のような先端をしていてスローンのように僅かな窪みがある。

それは、それは地面を掘る時にあれば間違いなく役に立つこと間違いなしのアレ。

何処からどう見ても、アレ。

「…………これ、スコップですよね」

「そうよ。スコップ」

冷たい風が一陣雜いで沈黙が流れる。

早朝だといつに、水織の思考回路はオーバーヒート寸前まで加速する。

どうしてスコップなんだ。これって武器じゃないし、というかただの道具、道路工事のあれだよ。これが武器つていつどんな世界だ。緑色の勇者のように魔法弾跳ね返せつてか。地面掘つてお金稼げつてか。ひっくり返してみても斜め四十五度から見下ろしても至つて普通の剣スコップだよコレ。え？　え？　いつたい紫さんは何を考えているんだ？　ああ！　わかつた。このスコップでボケるつてことだな。つまり紫さんは、早朝からオレのウイットに富んだジョークを期待してるんだな。そうと決まれば何か一芸を披露せざるを得ない。そしてあわよくば紫さんが水織君キャラステキー！とか言つてくれるんじゃないかと。あれ、ハッピーハンドなんじやないかコレ。

「……結婚してください」

「いつたい朝から貴方は何を考えてるのかしら？」

それはこいつちの台詞だよ！　とか死んでも言えない。死んだら言えないけど、絶対言えない。

一応水織は紫に異論を申し出た。

「あの、普通武器つて言つたらもうひとつ……殺傷能力のあるものをですね」

「スコップで刺されたら痛いわよ？」

「いやもうですけど……もつとこつ、剣とか槍とか、そういうのを武器つて言つんじやないんですか？」

「何の技術も持たない人間が、いきなりそんなもの振り回したらそれこそ危険よ」

「そりゃあ、そうですけど……」

紫の言つことももつともなのだが、だからって何でスコップなんだ。
「これなら洗濯物を干す物干し竿の方がマシな気がする。」

「あ、水織ぐ～ん」

「うーひしてこむひけひに秋姉妹も駆けつけて全員がそろつた。

「何でスコップなんて持つてゐの？」

「いや、紫さんに武器だって渡された」

「はあ……？」

「あそひやう。水織君にこれを渡しておくわ」

紫は胸元を「うーひ」と探ると小むな一枚の札を取り出した。
あ、靈夢から貰つた術符とか言つヤツだ。
そんなことより胸元からそんなもの出さないでください。

「静葉、ティッシュ」

「はい」

一枚の札は何やら異なる紋様が描かれており、紫色の縁に一方は赤い字で、もう一方には青い字で書かれていた。

紫がそれぞの術符を指差しながら解説。

「これは私の能力に似せた術符で、この一枚で空間を繋げるの。赤いほうが入り口で、青い方は出口よ」

「へえ……何か、天狗の抜け穴思い出しちゃつたな」

「何それ？」

「いや、何でもない」

あつちはテープなんだけど。

受け取った術符はジャンパーの内ポケットにしまい込み、水織は温泉タマゴ用のタマゴが入ったリュックサックを背負つ。

「じゃあ、気をつけて行ってらっしゃい。良い報せを期待してるわ
「はい。必ず紫さんの元まで帰ってきます」

「温泉タマゴ、忘れないで頂戴よ。私の友達も楽しみにしてるんだ
から」

「んじや、れつひーー」

紫さんの友達？

いつたいどんな人物なのだろうか。

多分おそらくきっと紫さんと同じくらいの美人なのだろうけど、
何だか想像つかない。

「あの、水織君」

「ん？ 何だ……あれ？」

振り返ると、いない。

静葉と穂子の姿が影も形もなくなっていた。
くすくすと小さな笑い声が頭の上から聞こえてきて見上げると、
二人はふわりふわりと飛んでいた。

「歩いてちゃ日が暮れちゃうよ。ほら、掴まって」
「お前らはいいよなあ……オレも空を飛んでみたいや」
「ほり、私とお姉ちゃんの手に掴まりなつて」
「いや、待ってくれ。もう少し」
「え？ 何で？」
「もう少しでパンツ見えぶふッ！」

穂子に踏み潰された。

大きな足跡とあざが出来てパンダ顔になつた水織は、二人の手を借りて空へ飛び上ると地底へと続く大穴を目指した。

「あれが、地底の大穴……」

人里からまつすぐ北東。

綺麗に円形にぽっかりと口を開く大空洞は、まるでブラックホールのように何もかもを吸いこんでしまいそうな闇が広がっていた。

第十二話 繋げ、スキマパイプライン（後書き）

すげえタイトル、そして温泉タマゴのためだけに手助けしてくれる紫さんって……

夜「そして、私は帰つてきたあ！」（こゝ大塚明夫風味）

静「お帰り～」

穰「で、今度は私たちをトップアイドルにしてくれるの？」

夜「ティンと来ないから無し」

穰「……解せぬ」

静「ほら、あそこで紫さんがプロデュースしてほしそうな田でこいつを見てるよ」

夜「え、アイドルって少女しか（ピチュー）

……し、しかし。もし東方キャラでアイマスやるんなら、早

苗さん2、桜3、幽香だな」

穰「歌つて踊れる幽香さんを想像できないです」

夜「奇遇だな。俺もだ」

お気に入り登録、評価ポイントありがとうございます。

ホントはあてな主役のハロウイン短編書くつもりだったんですが、手違いで消しちゃった（死にてえ……）

次回更新は11月3日。

いよいよ水織君の能力开花か？

そして地底で待ち受けるものとはいつたいて……！？

感想やご意見、作品作者に対する質問などなど、サイト登録の有無関係無しに書けるよう設定してありますので。何かあればいつでも何でも気軽に書き込みくださいな。

それでは、待て次回。

第十四話 姐御肌な鬼娘

「ゆづくつ下りるからさ、ちゃんと掴まつてよ」

麗らかな日の光すらも吸い込み、漆黒の闇へと帰してしまった大空洞。

一人の手を強く握りしめながら三人でゆづくりと降下し、水織はその闇の向こう側の世界に期待と不安の両方がない交ぜになつたような気持ちで臨んだ。

大空洞の闇が文字通り地の底から這い上がるようにして広がり、不意に上空を見上げると静葉と穂子の後ろには針で空けた穴のよくなほんの小さな光源だけが見て取れた。

いつの間にこんなに下りたのだ。そして、いつになつたら地面に着くのだろう。

自分の足が地に着かないこの感触は初めてで落ち着かない。

そうした不安に駆られていくと、やがてトンと水織の靴が地面に触れ同時に姉妹の手が離れた。

「なあ、明かり……あれ？ 明るいぞ……？」

確かに自分たちは闇の中を降下していたはず。

それなのに自分の手足も見えれば影だつて伸びている。

視線を上げると、何やら白い光を放つ物体が洞窟の天井をまるで夜空を埋め尽くす満天の星空のように輝いていた。

「そりいえばさ、鬼の秘湯つて何処にあるんだ？」

「え？ 水織知らないの？」

「いや知らねえよ。オレはあの爺ちゃんからそりこつ噂があるって聞いただけだし」

「……そういうの、もつと早く言って頂戴よ。はあ」

穢子が心底呆れた様子でため息を吐く。

しかし、いつまでもここに留まっていてもしょうがないので先を往くことにした。

妙に綺麗な洞窟の道を歩きながら水織は一人に訊ねた。

「なあ、ここってどうこいつ場所なんだ？ 鬼の住処とは聞いていたんだけど……」

鬼どころか、虫の一匹すら見当たらない。

時折前方から生ぬるい風が拭いてくるだけで、特に危険な場所には到底思えなかつた。

こんな洞窟があれば、家の近くにあれば秘密基地にして遊びたいような気もする。キャンプとかもいいかも知れない。

「ここは地靈が住まう地底の世界よ。大昔は地獄として機能していたの。前に一度、間欠泉と一緒に地靈が沸き起こる異変があつたのだけれど、靈夢や魔理沙がこれを解決したの」「じ、地獄……？ っていうか、異変って？」

「んつと、この世界で言つ事件つて思つてもらえばいいのかな？」
「そう……か。あの靈夢つて凄いヤツなんだな」

あと魔理沙つてヤツも。

しかし二人ともそうは見えないんだけどなあ。

そのまま何度も質問を繰り返しながら道を歩いていくと、やがて目の前に人工的な道が現れ雰囲気が一変した。

石を敷き詰めて出来た長い道を抜けると、やがて目の前に巨大な木造の橋が見えてきた。

「立派な橋だなあ。元いた世界じゃもつこんなの見れないと思……？」

橋の中央に人影を見つけ足を止める水織。

人影はどうやら少女らしく、地底の明かりに輝く金の髪が見て取れた。

コジ、コジ、と橋を鳴らしながらゆづくつといちいちに近づいてくる。

「ここの地に何の用かしら。人間ど、それから……？」

水織と、それから横の姉妹を見つめ訝しげな表情をする少女。色の薄いやや地味な服装で、何故か彼女の耳は尖っていた。

……たぶん、俗に言つエルフ耳つてヤツだ。実物を見るのは初めてだった。

若干キツめな視線に威圧するような聲音、こちらを警戒しているのは明らかだった。

「えつと、こんにちは。それとも、こいつじやこんばんはなのかな？」

「呑気な挨拶はいいのだけど……貴方達のような者が何の用かしら。少なくとも、ここは貴方達が来るような場所ではないわ」

「え、えつと……水織君、お願ひ」

「またかい。……えつと、実はその」

田の前の少女にこちらの事情を全て話してもよいものか少し悩んだが、ここの地理に詳しくないこちらとしては何か手掛けりが欲しい。

水織は外から来たということ、それから自分たちが経営している銭湯のこと、ここに来た目的、一通りのことは全て話しそして本題

へ。

「それでさ、鬼の秘湯つていうのを探してるんだ。何か知らないか？」

「鬼の……？ 私は心当たりがないからわからないわ」「そつか……」

でも、と少女が付け加え答える。

「知り合いに鬼ならいるから、彼女に聞いてみたらどうかしら」「ホントか？ 助かるぜ……？ ん？ かの……じょ？」「

聞き間違いだろ？

目の前の少女は、鬼を、彼女と言っていたような鬼にも性別があるのか？

水織が知っている御伽噺の中で、女の鬼といつもの見たことも聞いたこともないのだが。

トライ柄パンツに晒さらつでも巻いているのだらうか。

「」の時間ならいつもの酒場で飲んでるはずだから……いいわ。少しだけ手伝つてあげる。別に私たちの力担当でつてわけでもないみたいだし

そう言つと少女はついてきてとだけ言い、水織たちに背を向けて歩きだした。

「……なあ、」は何なんだ？ 地底世界、なんだよな？」「そうよ。そしてここは地底の都。旧都と呼ばれることが多いわ

水織の質問に、淡々と答える少女。

橋を越え旧都の内部に入る。都と言つだけあつて活氣づいた声があちらこちらから聞こえてくる。

「そり、視線を動かしてみる。

活気に溢れていいいのだが、その全員が人外で居心地はお世辞もいいとはいえた。

人生に絶望したのか路地に座り込む妖怪。今日の獲物でも見つけたかのように爛々と瞳を輝かせる団体の大きい人のような形をした者。

スラム、とまではいかないがパツと見あまり治安はよろしくなさそうだ。

「……幻想郷つてのはよくわからねえな」

地の底にまで蔓延る妖怪。

だが、どうして彼らは外に出ないのだろうか。

ここにいるのは頑強な妖怪たちと、例外はあるがどう見ても凶暴そうだ。

睨みこしてくるが、皆一様にこぢらに襲いかかってくる様子はない。

夜ではないからか？

でも地底に夜もあるのだろうか。……頭が混乱してきそうだ。思考を止めて前に向き直ると、赤い提灯を吊るした一軒家が見えてきた。同時に香ばしい匂いまで漂ってくる。

何を焼いているのかはわからないが美味しそうな匂いだ。

「勇儀、いるかしら？」

ガラガラと店の引き戸を開けた瞬間、強烈なアルコールの香りがむわっと広がり思わず水織は顔をしかめる。

未成年にはキツ過ぎるほど強烈なアルコール臭は飲んでもいい

のに体がふらつきやうだ。

「お、パルスイじゃないか。橋の守護はどうしたんだよ？」

「今少しだけ休んでいるわ。外の世界からの珍客のせいで、ね」「ああ？」

少女と誰かの話し声が「こちら」まで聞こえてくる。
彼女、パルスイと言つらしい。

そういうえば名乗つてもいいなし名前を聞いてもいなかつたな。
店の前で棒立ちしていると、暖簾の向こうから腕だけにゅつと出てきて指がちょこちょこと動いた。

「ひいらご來い、と書かれていた」という感じ。

「……でもよ、未成年がそういう店に入るのは」

「いいからホラ！ もうさと入る」

「お、押すなよ穢子」

当たり前ですが、お酒は二十歳から。

もちろんお店に行くのもダメです。ゼッタイ。

くたびれた暖簾を押し退けて店に入るとアルコールの匂いが数段強くなつた。

心無し視界がぐにゃりと揺れる。

マズイ。飲んでもいいのに一日酔いになりそうだ。

「う……く、ツ」

あまりに匂いが強過ぎるせいか、それとも水織に耐性がないのか、
或いは両方なのか。

水織の視界が、まるで天地が逆転するかのようにぐにゃりと歪み

立っているのでさえ覚束なくなり　トン、と誰かの腕が水織を抱きとめた。

「お、おいおい。大丈夫かお前？　待つてな。今冷たい水でも用意してやつから」

霞む視界の向こうで声だけが聞こえる。

この声は……穂子か、それとも静葉？　さつきの少女？　まるで思考が定まらない。

次いでタタタ、と足早に駆け寄る足音。そして大きく振りかぶる謎の人影。

……おかしい。

さつきの声は、冷たい水を持つてきてくれると言つて　バシャーンッ！

「つおわあああ！？　つ、冷たあああ！？」

突然顔面に冷水を叩きつけられ、水織の体が否が応にも飛び上がる。

一回酔い（？）は確實に醒めたがおかげで全身がびしょ濡れ。

「だ、誰だ！　冷たい水を寄越すんじやなくてぶつかれたアホは！？」

冷水で冷えた体を烈火の如く燃え上がらせると、視線をあちこちに動かしてこんなバカげたことを仕出かした犯人を探す。

店には苦笑するパルスイと、おろおろと狼狽える静葉と穂子、それから……

「せっかく助けてやつたってのに、開口一番アホ呼ばわりかい？」

最近の人間つてのは礼儀つてのを知らないみたいだねえ

カウンター席の椅子で器用に胡坐をかく、朱色の杯を手にした少女の姿。

その隣には恐らく冷水の入っていたと思われるバケツが無造作に転がっていた。

犯人は間違いなく、ヤツ。

「だ、誰だよお前は……ッ！」

少女が振り返り、そして水織は驚愕の表情を浮かべた。
額に一角を生やしたその少女の姿は、まさしく伝承や御伽噺の鬼そのもの。

……いや、そんなことはどうでもいい。

水織が最も驚いたのは、その鬼が金棒を持っていないとか、トラン柄パンツに晒を巻いていないからでもない。
ただ、単純に。

「……綺麗だ」

「あ？」

彼女が綺麗だったから。その一言に尽きる。

流れるように華麗なスタイルには無駄がなく、洗練されつつも女性らしさを損なわない見事なまでのプロポーション。

水織の頭の中で踊っていた筋骨隆々の鬼のイメージが一瞬で塗りかえられ、そして同時に今しがた吐いた暴言の数々を思い出し、すぐさま無礼を詫びなくてはとババッと土下座の構えを取った。
その間僅か0・05秒ほど。

驚くべきことに、あの宇宙刑事が蒸着するのと同じ速さである。

「す、すんません！　あの、助けていただき、ありがとうございました！」

「ハハ。今度は打つて変わつて平謝りか。面白いねえ」

カツカと笑いながら杯の酒を豪快に、一息で飲み干す。
体操着みたいに真っ白な服に、見たこともないような不思議な生地のスカート。

腕には何故か鎖のようなものが付いている。恐らくアクセサリーか何かの類。少なくとも水織はそう判断した。

「あの！　オレ草津水織って言います！　それで、こっちは『言われなくともわかるさ。秋を司る姉妹神だ』

静葉と穂子が無言で頷く。

何故わかつたのだろうか。それは彼女が“鬼”だからなのか。杯をカウンターに下げる水織を見据える一角の少女はニッヒーと白い歯を見せた。

「山の四天王が一人、星熊勇儀。ほじくまゆうぎ鬼の秘湯を探してるとか言つてたね。ほのか遙々外の世界からここまで来たんだ。特別に教えてあげやつてもいいよ」

「ほ、ホントですか！？」

「但し」

勇儀と名乗つた美女はグツと拳を握りしめ正拳を打ち、水織の顔面で寸止めする。

凄まじい拳圧と風が襲いかかり一瞬後ろに倒れそうになるがどうにか踏ん張つて堪える。

「ぐ……っ」

「弱い人間にや興味がないんだ。」これは一つ、私と勝負といいつじ
やないか」

「勝負……？」

負ける気など更々ない。そんな余裕たつぱりの笑みを浮かべ勇儀
が指を立てた。

「もちろん決まってるだらう。 弾幕勝負さ」

第十四話 姐御肌な鬼娘（後書き）

勇儀のキャラが安定しないので、最近地靈殿をひょいひょいやってます。

ううん……イージーでもお燐までが限界だなあ；
そしてお気に入りユーモー減っちゃつたい；
でも、へいき、へっしゃら！

……ぐすん。

次回更新は11月6日。
時間はいつもの通りです。

では、また次回。

第十五話 怪力乱神

弾幕勝負のため、水織たちは旧都から東に抜けた先にある荒野に場所を移した。

勇儀は酒場を出てからやる気満々のようで、先ほどから柔軟体操をしたり、腕をバキバキならしたり、近くの大岩を素手で軽く碎いてみせた。

……その剛腕、女とはいえ流石は鬼と言つたところか。

エネルギー・シユかつアクティブ。

煌めく汗は勇儀の周囲で弾け、彼女を引き立てるかのように輝いては消える。

元の世界にいたら間違いなく運動部、出来れば陸上部あたりが望ましい。

真っ白な体操服がよく似合いそうで、濡れた上着が彼女の引き締まったボディラインをくっきり余すと「こなくさらけ出し、「先輩、タオルっす！」とか言ってタオルを渡せば、ちょっとと照れ臭そうに頬を染めながら「ありがとよ」とぶつきり返す先輩的な……

……いかんいかんダメだダメだ、惚れる。

と、水織の脳内はピンク色の青春真っ盛り。何と場違いなことだろうか。

「さて、早速始めようじゃないか」

「あ……いや、でもオレは何の能力も持つてないし」

「ああ？ 何寝ぼけたこと言つてんのさ。私が戦いたいのは」

そつち、勇儀に指を差されたのは秋姉妹。

突然の指名に静葉は一瞬ポカンと呆けて、穢子はぎゅっとその表情を強ばらせた。

「え、えつと……わ、私たちじやお話にならないよう……な……？」「いいじやないか。私としては、今ここで神様と戦えるつていう千

載一遇のチャンスを無駄にしたくないのさ。アンタらが勝てば秘湯

を教えるよ

「もし、負けたら……？」

「そういうのは後で考えりやいい」

姉妹は一度顔を見合させた後、頷く。

水織では弾幕勝負は出来ないし、指名を受けているのは私たち。逃げるなんて無様な真似は出来ない。

水織の前なら、尚更だ。

「わ、わかつたわ。じゃあ、私から戦う」

「そつこなくつちや。ほら来なよ」

指先で軽く挑発。

穢子は一度大きく息を吸つて心を落ち着かせると、ポケットから薄いオレンジ色の術符を取り出し握りしめる。

勇儀は杯を手にしたまま笑みを浮かべてこちらを見据えている。警戒しているのか、それとも余裕なのか……恐らく後者だろうけれど、こちらとしても迂闊に動くのは好ましくない。

まずはけん制して様子を見る。

「……ツ！」

予備動作を見せず、穢子は術符を握りしめていない方の手を薙ぐと勇儀に向けて複数の光弾を放った。

緩やかな放物線を描くそれは、しかし相当なスピードで襲いかかり、勇儀を一瞬にして光の中へ消し去ってしまう。だが相手は妖怪、ましてや鬼。

これしきのけん制攻撃程度では効き田など微塵もないだろ？。

「遠慮なんか要らないよ。最初から本気でかかつておいで」

白煙の向こうから聞こえる勇儀の声。

案の定彼女に傷を与えることは出来ず、穂子は小さく唸つた。
動じないということは、この程度の弾幕では意味を成さないということ。

なら、単純に威力を上げればいい。

握りしめた術符を構え詠唱する。

穂子の符が鮮やかな光に包まれると、パチン、と弾けるような音
と共に彼女の周囲に光弾の群れが出来上がる。

「秋符『オータムスカイ』」

穂子の周りで群れを成していた光弾が一度大きく広がると、彼女
を中心大きく円を描くようにして展開される。

その光景を遠目で見つめる水織は、目の前で起きていることが本
当に現実なのかと再び思った。

「ゲームの魔法みたいだ。あれが、弾幕勝負ってヤツなんだよな？」

何となしに隣にいたパルスイに訊ねると、緑色の目が少し細くな
った。

「……そうよ。ルールに則つた正当な決闘。それが弾幕勝負よ
「ルールってのは？」

「細かなルールは端折るけど、簡単に言えば、妖怪が異変を起こせ
るように、人がその異変を解決できるように、人と妖怪との実力差
を無くすため、決闘よ美しくあれ、と言つたところ

「妖怪が異変を起こせりよつて、妙に物騒なルールだな

いつそそんなルール無い方がいいのでは？

しかし、パルスイは首を振った。

「妖怪は元来、力を競いたがる種。常に他者と競い合い力を高めたりすることが常なのだけれど、ここは幻想郷。とても小さな世界なので。だから妖怪の小競り合いが影響でバランスを崩し、崩壊に繋がるかもしれない。それを防ぐためにこのルールがあるの」

「よくわかったような、わからないよつな……」

「端的に言えば、この世界で勝ち負けを決める程度のルール。その程度で覚えてくれれば結構よ」

「ふうむ……」

そうこいつ話しているつ中にも穢子と勇儀は戦闘を続いている。
穢子は創った光弾を放ち、勇儀はそれを避け、往なし、かわ躰し、それはさながら舞踏のよう。

そして弾幕勝負を知らない水織の目から見ても、勇儀がかなり強いということだけはわかつた。

かれこれ数十分。

穢子が肩で息をしているのに對し、勇儀の方はちつとも乱れず威風堂々と胸を張つて仁王立ちしている。

……あの膨らみはDだな。間違いない。

「どうしたどうした。最近の神様ってのはそんなに弱つちいのかい？」

「く、う……」

「こちらが一方的に攻撃しているというのに情けない。

「だ、だつたらこっちで！」

ポケットから別の術符を取り出し構え投げる。

符が弾け、先ほどと同じような光の弾が連なり飛んで行く　が、全て彼女の拳によつて弾かれ消え失せる。

穂子は歯噛みする。

いくら相手が山の四天王とはいえ、私だつて一柱の神なのだ。それなのに自分の攻撃がいとも容易くかき消されてしまう。実力差なのだろうか。自分の力が妖怪に劣るだなんて、出来れば認めたくない。

「おいおい。それで本気のかい？ 期待外れも甚だしいね……」

「ま、まだこれからだよ！ 私は、まだ本気をこれぼっちも出してない！」

「へえ…… そうかい」

刹那、勇儀の姿が目の前から姿を消える。

慌てて視線を動かした直後、ドン！ と地響きのような音と共に穂子の懷で不敵に微笑む勇儀の面が見えた。

「『大江山嵐』」

「あうッ！？」

気づいた時には既に遅く、穂子は勇儀の光弾を下腹部に直撃し、凄まじい勢いで遙か後方へと吹き飛ばされてしまった。

傍観していた水織の顔が瞬時に凍りつく。

「……お、おい！？ 穂子！？ おいッ！？」

無我夢中で地面を蹴つて穂子の元へと急ぐ。

水織が体を抱きかかえると、穂子は小さく息を吐き出し薄つすりと目を開けた。

「あ、あはは……ま、負けちやつたや。」めんね
「しつかりしろつて！　お前、骨が折れたりしてんじや……ッ」
「だ、大丈夫だよ。そこまで私は弱くないもの。それに勝負つて言つても、私たちにとっては遊びみたいなものだし
「遊び……！？」

かされるほど小さな穂子の言葉が、信じられない。
どう見たつて痛そうで、苦しそうで、今の穂子の顔は見るに堪え
ないほど衰弱している。

「……ん。ちつと加減を間違えたかね。でも、ひとまず私の勝ちだ
一杯の酒を一気に飲み干し、次いで別の酒を注ぐと右手でまたこちらを挑発する。

「困つたなあ…………」れじや、水織の探してた温泉の手がかりが手に入らないね……イテテ
「穂子？　動くなつて。まだ体が……」
「平氣。これぐらこすぐ治せるよ」

水織の腕の中、穂子がゆづくつと目を閉じ息を整える。
そして何か呪いのような言葉をつぶやくと彼女の体がうつすらと温かな輝きに包まれていく。
すると、彼女の顔色が少しずつ回復し、やがて水織の腕を抜けてひょいと軽く立ち上がつてみせた。

「ほらね。それに、このルールで致命傷を受けることはないからそ

「今まで心配してくれなくてもいいんだよ」

「そ、そり……なのか」

何だか大袈裟に心配して損したような、恥ずかしくないような。それで他の一人も平然としていたのか。余計に恥ずかしい。

「……今度は、私がお相手します！」

「さあて、どれほどのものか……期待してもいいんだよね？」

睨みあう少女と美女。

先に動いたのは静葉だった。

「枯道『ロストウインドロウ』」

オレンジ色の術符を千切り、静葉の足元から幾千の光弾が舞い上がり列を成すようにして勇儀に襲いかかる。

それはまるで、街道を吹き抜ける風に踊る枯れ葉のように、優雅で気まぐれで。

弾幕はやや不安定な軌道を描きながら勇儀の真正面へと突っ込んでいく。

穢子の攻撃よりも遙かに強力で、盛大な爆音と砂煙が舞い踊る。

「す、すげえ……！」

「お姉ちゃん、気合い入ってるなあ……」

次いで静葉は砂煙の向こう側に向けて別の術符を放ち追い打ちする。

満足に見えない視界の向こうから襲いかかってくる攻撃には、流石の勇儀でも避けるのは厳しいはず。

そのまま弾幕を張り続ければ、流石の彼女と言えど苦戦を強

いられるはず。

「秋符『フォーリンblast』
「はツ、威勢がいいのは大いに結構！　でもちょっと力み過ぎやしないかい！」

白煙の向こうから弾丸のような勢いで勇儀が踊りかかる。
その手には杯と、巨大な光。

静葉が見上げると、勇儀が手にした光を叩きつけると、それはほぼ同タイミング。

轟音、そして小さな叫び声。
穂子が吹き飛ばされたのと同じようにして静葉が白煙の向こうから飛び出していく。

「し、静葉！？」
「お姉ちゃん！」

まさしく勇儀は鬼のような強さだった。

鬼神、と言つても差し支えないのかもしれない。

これで彼女たちは“遊び”と言うのだから水織には信じられない。

……こんな危険な遊びがあつて堪るか。

「い、いたたた……」
「かーッ、弱い！　前に戦つた巫女や人間の方がよっぽど強いよ。
そんなんじゃ面白くないじゃないか」
「く、悔しいなあ……もつ！」

傷付いた静葉が怒りに頬を紅潮させながら立ち上がりまたしても別の符を取り出し弾幕攻撃を行つ。

杯を手に、勇儀はそうこなくつむか、と小さく舌舐めずり。

高速で放たれる光弾をひょいひょいと軽く避けてみせ、そして静葉の面前に立つ。

「あ……」

「まあ、残念だけど今回は私の勝ちってことで……」

右拳に集まる光の塊。

静葉は足がすくんでしまって何も出来ず、ただ呆然と勇儀の顔を見上げていた。

「いいよねッ！」

「ひッ……？」

あまりの恐怖にギュッと瞳を強く閉じ、力無くその場にしゃがみ込む。

情けない。

私は、こんなにも弱い神様なのか。

一人の人間の男の子の力にも、なれないような情けない神様のか。

迫りくる拳は、こんな自分に相応しい痛みなんだ。

覚悟を決めた静葉だが、しかし何時まで経つても勇儀の攻撃がない。

何が、あつたのだろうか。

恐る恐る、静葉が瞳を開けてみると静葉の前に誰かが立ちはだかっていた。

「……乱入者つてかい。なかなか味な真似をするじゃないか

「え……」

静葉の前に立つ、小さな影。

影は先端の尖った長い棒のよつたもので静葉をかばい、勇儀の右拳を受け止めていた。

小さな影が言った。

「……こ、この勝負、オレが預かつた！」

「み、水織君……？」

勇儀の腕を退け、スコップを構えたのは水織だった。とてもない衝撃で、腕がビリビリして涙目だが、幸いにも声が震えることがなかった。

少しば、様になつただろうか。

「ここの世界の」とも、弾幕勝負つてのはよくわからないけどな」

「……？」

静葉にだけ聞こえるよつた声量で水織が呟く。

「やつぱり、女の子が傷付くのはよくない。女の子つてのは、笑顔でなきやいけないんだ」

水織はシャベルを構え直し、切つ先を勇儀へと向ける。

「……だから、静葉と穂子の代わりに、オレが戦う」

足、腕、心……言つてしまえば、水織の全身全靈は震え今すぐにでも逃げ出したい。

だけど、目の前で女の子が傷付いているのは、どんな理由であれ見過ごせない。

それが例え遊びでも、だ。

「それに…………前にも、こんなことがあった気がする。だから」「え……？」

水織の言葉に、静葉が首を傾げる。
だから、の先は何と言ったのだらう。
訊ねようとして、しかし水織の背中は『氣づけばどんどん遠ざかって』いつてしまつていた。

「だから、今度は逃げない」

こんなスコップ風情で、こんなちっぽけなオレで、何が出来るのかはわからない。

だけど、もう逃げちゃいけない。

どうしてそんなことを、今になつて強く意識したのか……理由は一切わからない。

とりあえず今は、一人に代わつて勝たなくてはいけない。
意を決し、水織は全速力で駆け出した。

第十五話 怪力乱神（後書き）

つこわつを出来たばかりのお話ですッ！

調整に時間がかかるちゃつて遅れてしまい、申し訳ないです；

今日は誤字脱字が酷いかも……ガクブル

そして、夜斗の書く弾幕勝負は、弾幕勝負にあらず。

……ダメじやん；

勇儀の口ぶりが、何故か小町と同じような言い回しで少し引っ掛け
ております。

……とまあ、色々とすみません；

こんなんだから原作知らないだろとか突っ込まれるんだよなあ
……

シクシク

第十六話 スコップ無双、誕生

「ここの勝負、オレが預かった！」

大見得切つて勇儀と静葉の間に割り込んだ水織だが、正直勝てる見込みなどまるで無かつた。

そもそものはず、水織はもちろん弾幕使うこともできなければ能力も無いし、そもそも戦う術を知らない。

喧嘩とは違う、これは曲りなりにも決闘。

……というか、そんな決闘に単身スコップ片手に割り込んでしまつたが、ルール的に大丈夫だらうか。

水織の突然の乱入に勇儀は一瞬眉根を上げたが、やがて少し不満そうな表情で水織を見た。

「けど、お前は只の人間だろう？ 何の能力もない人間なんぞ相手にしても楽しめるとは思えないんだけどねえ……」

「そ、それは……」

今の勇儀が求めているのは強者であつて、ただの凡人や弱者を求めているのではない。

乱入してから後悔したが、よくよく考えれば水織のような一般人と戦ってくれる可能性はほぼ皆無ではないか。

困惑する水織に、しかし勇儀は意外なことにある条件を提案した。

「……相分かつた。それじゃちょいとルール変更としようじやないか」

「ルール変更？」

勇儀は手にした杯を一度飲み干し空にして新しい酒を注ぐと、杯

を水織に示しながら言った。

「『』の杯の酒、お前が私を攻撃して一滴でも零して『』じりんよ。そうすればお前の勝ちだ」

「……わ、わかつた。それぐらいなら、オレでも出来る」

かもしだれないと、こう後ろ向きな言葉は口の中で飲みこむとスコップを握り直し構える。

しかし、いくら静葉や穂子の代わりに戦うとはいえた女の人、しかも美女に對して攻撃を振ることになるなど誰が予想したか。だからと言つて逃げるわけにもいかないし、ここは覺悟を決めて戦つしかない。

……爺ちゃん、本当に七代祟つてくれるなよ。

「　　ッ、うおりゃああああ！－」

スコップを下段に構え勇儀の正面に走り斬りかかるが、何の訓練もない人間の攻撃、ましてや常軌を逸したような存在に容易く届くわけもなく、水織の攻撃は何度も何度も避けられ切つ先が虚しく空を断つ。

「アツハハ。そんな出鱈目の攻撃じゃかすりもしないぞ」「くそッ！　こんの……ッ！」

とにかく杯に一撃当たればそれで終わる。

水織は勢いに体を任せがむしゃらにスコップを振り回すが依然として変わらず。

勇儀はほんの僅かに足を動かし、身を捩るだけでその攻撃を回避し、やがて突っ込む水織の脚を軽く払った。

「うおわ……だッ！？」

情けなく倒され、成す術なく水織は顔面から地べたに激突。激しい痛みと恥ずかしさ、おまけに怒りも合わせて顔が烈火の如く真っ赤に染まる。

カツコ悪過ぎる。

女の子の前で、女の子に負ける。
自分がこの世界では、いや、この世界でも無力な存在だと痛感する。

「やつぱり、約束しただけじゃ……意味がないんだ」

「……ああ？」

蚊の鳴くような、本当に小さな水織の咳き。
身体能力の高い勇儀の耳にもそれは届いた。
よろよろと覚束ない足取りで立ち上がり、砂埃だらけのジャンパーを脱ぐと腰に袖を撒きつける。

アンダーウェア姿となつた水織はもう一度強くスコップを握りしめ直し、勇儀を威圧するかのように睨みつけた。

「……根性はあるみたいだね。それならちつたあ楽しめそうだ」「せえ……のッ！」

低く構え、自分に出せる最大速度で駆ける。

狙うは勇儀の持つ杯ただ一つ。

水織は一心不乱にスコップの切つ先を何度も突き出し、止め処なく連撃を叩きこんでいく。

「……ッ」

勇儀の表情に、ほんの僅かだが焦燥の色が見え始めた。

ただの人間と侮っていたはずの水織の攻撃精度が急激に増している。

今まで軽く身を動かす程度で避けられたはずの攻撃が、今は少し余計に動かないといけないほどに、鋭く速くなっている。

この戦いの中で成長した？……いや、違う。

今の水織の表情は、成長を確信し猛進していくような戦士の顔ではない。

「何だつてんだ……コイツ」

そして何故か、水織の顔は……酷く、辛そうな顔をしていた。

今にも大粒の涙を零しそうで、泣きだしてしまいそうなその表情は、秋姉妹の代わりに戦うと立ちはだかつた時とはまるで別人だった。

何が原因で苦痛に顔を歪めているのかわからないが、その表情は見ているこっちが痛々しく思えるほどだ酷く歪んでいる。堪らず勇儀が叫ぶ。

「おいおい！　お前、どうしたんだ？　何でそんな顔して」

「ツ、ああああ！」

「くッ　！」

切つ先が一閃して勇儀の頬に一瞬触れる。

ギリギリのところで回避したはずなのに、その頬から赤い霧が一筋滴る。

明らかに水織の様子がおかしい。

何かに取りつかれたかのような愚直で戦略の欠片も感じられない無粋な攻撃の数々。

頬の血と同時に汗を拭う。何時の間に汗をかいていたのだろうか。

「……能ある鷹は爪を隠す、つてかい」

緊迫と同時に胸の跳ね馬が昂ぶり踊る。鬼の性と言ひやつは全く空氣を読まない。読む氣など、更々ないのだ。

強いヤツであれば、事情はどうあれ全力で戦いたい。

勇儀の闘志に火がついた。

こんな面白い人間に遠慮は無用。

勇儀は姿勢を落として構え、真っ向から水織のスコップを手の甲で受け止める。

「結構結構！ 暴れるヤツってのは大好きだ！」

「ぐッ、らああああーー！」

拳に弾かれた勢いを生かし、水織は咄嗟に体を回転させ横薙ぎに払うが、勇儀は後ろに跳躍しこれを回避。と同時に光速の弾幕を放ち反撃。

「ゆ、勇儀さん！？ 水織君は、ただの人間で！」

「あれの何処が普通だい？ アイツは、ちから能力を持つているよ

「水織が、能力を……！？」

正面から襲いかかる色取り取りの光弾。

水織はスコップで、それを

「はッ、ああああッ！」

斬った。

真一文字に切り裂かれた光弾は見事に二つに裂け、水織の背後で

爆ぜた。

静葉も穂子も、その光景に啞然としていた。

「……す、す」「

「……水織、君？」

高速で迫りくる光弾を、スコップの先端に器用に当てながら、時には体をかすめることもあつたが、水織はどうにか勇儀の攻撃を捌いていた。

常人とは思えないその動き。

水織は、何の能力もない普通の少年だつたはず。

それなのに何故目の前の水織はあんなにも強いのか。

水織をそこまで強くする能力とは、一体何なのだろうか。

「はつはつは！　いいねえ！　面白い人間だ！　気に入つた！」
「せツ　　い！」

豪快に笑いながら、水織の激しい攻撃を受け往なし、勇儀の胸の昂ぶりが最高潮に達していく。

こんなに面白い人間は、あの巫女と魔法使い以来じやないか。

外の世界もまだまだ捨てたもんじやない。

ついつい拳に力が入つてしまい、本気の一撃が地面や周囲の岩壁を容易く壊してしまつ。

瞬間、勇儀の攻撃を回避した水織が高く跳躍した。

スコップを下段に据えながら、先端部分を勇儀目がけて突き出しながらの向こう見ずな一撃。

猪突猛進過ぎる攻撃など、避けるのは簡単だ。

一度姿勢を正し水織の攻撃を見据えるとほんの僅かに右足を引き体をずらす。

案の定、水織の攻撃は勇儀を捉えることは出来ず、スコップは勇

儀の足元に深く突き刺さる形となつた。

「惜しいね。今一步、速さが足りなかつた」

「み、水織君！？」

水織はスコップを握つたまま、何故か顔を上げずに俯くばかり。負けを認め諦めてしまつたというのだろうか。

「じゃあ、私の勝ちだ！ 鬼符『怪力 ツー？』

そこで勇儀の言葉が止まり、静葉も穢子も何事かと視線を向けた。すると何故か、今勇儀の立つている地面が傾斜のキツイ坂道のように斜めに盛り上がつていた。

何が起きたのか。

静葉は次いで水織の方へと視線を向け、そして驚愕した。

「お、お前の仕業か！？」
「ツ、でえやあああ！」

弓なりに撃るスコップと、体全体でスコップを持ち上げる水織。水織が突き刺したスコップは、まるでスプーンでゼリーを掬うかのように、地面を大きく掬い上げていた。

地面が、あんな風に簡単に持ち上がるなど、本来はあり得ない光景。

そしてそれが、水織の能力と氣づくのに時間は数秒たりとも要らなかつた。

「うわ、つたたた！」

何の予兆もなく突然足場が傾けば、よほどのバランス感覚を持つ

者でもないかぎり姿勢を維持するなど無理な話。

そしてそれは鬼であらうとまた同じ

勇儀は慌てて足を踏ん張り、いかにか傾斜に耐えようとしたが、傾斜はどんどん傾いていき、立っているのではら辛くなる。
再び、グググ！ と地面が震え、傾斜がさらに傾いていく。

「う、うああああああああああああああ！」

水織のスコップが地面から抜け振り上がったころには、傾斜は直角を迎えた、もはや立ちはだかる断崖となつた。

こうなつては、何人だろうと立つているのは物理的に不可能である。

衝撃で跳ね飛ばされた勇儀はそのまま、宙を舞うが、しかし勇儀は諦めなかつた。

空中で一度杯を放し、ぐるぐると体を回転させながら、手をあげて、田を見開いた。

カン！ と氣味の良い音を響かせたと思うと、木製の杯は投げつけられたスコップに貫かれ宙を舞い、そして地面で真つ二つに裂け無残な姿で転がっていた。

水織が、勇儀の着地と同時にスコップを投擲していった。

そのあまりにも突飛な攻撃に誰しもが驚き水織に驚愕の眼差しを送つた。

「……や、約束だからな。酒を零したから、オレの、勝ち……うく

三

水織君！

駆け出し水織の元へ駆け寄ると、静葉はその体を両手でひしと受け止めた。

「……な、何なんだい。アイツ。どう見たってひょろつとした只の人間のはずなのに」

水織が掬い上げた地面を振り返り、勇儀が声を震わせる。

「地底に、もう一つ大穴が出来上がっちゃったじゃないか」

そこにはたつた一人の人間が、たつた一本のスコップで掘つたとは到底思えない巨大な大穴が、旧都の外れにぽつかりと出来上がっていた。

第十六話 スコップ無双、誕生（後書き）

またまた遅れてしまい、申し訳ない；

ついに解禁、水織君の戦闘シーン！ そして覚醒！

氣絶！；

この一連の流れはもはやテンプレですね。

次回更新は11月12日。

もう少ししたら第二章、終了かな。

それでは、感想ご意見等、お待ちしています。

第十七話 ジャヤリジョーラシー

「う、ううん……？」

頬に伝わる冷たい感触に、水織がうつすらと目を開ける。目を開けたその先では、静葉と穂子がこちらの顔色を窺つよつて覗きこんでいた。

気がつけば、水織はまた静葉の膝枕の上だった。

「水織、大丈夫なの？」
「はあ？ 大丈夫つて……いつッ」

むくつと体を起こし自分の体を確かめる。

腕も動くし足も動くのだが、軽く動かすと鈍い痛みが全身に走る。何故だろうか。というか、オレは今まで何を……！

「そうだ！ 勇儀さんは？ オレ、勇儀さんと戦つて、それで……」「さん付けはしなくていいよ。勇儀でいいさ、水織」

背後から割れた杯を持つて勇儀が現れる。

真つ二つに裂けた杯を水織に示して二ツと白い歯を見せると、いきなり水織の首に腕を回した。

「へ？ うおわ！？」

「何だい何だい！ そんな強い能力を持つてゐるつてのに出し惜しみするだなんてズルイじゃないか！」

「ゆ、勇儀……痛いし苦しいし、そのむ、むむ……うツ！？」

何の遠慮も無しに勇儀の胸の膨らみが頬に押し当たられ、水織の

全身が炎が迸りそうなほどに火照る。

「」のままだと戦闘後の痛みで死ぬにじやなくて、柔らかな胸で圧殺されそうである。

……それはそれで悪くないかも知れない。

「み、水織が苦しんでるじゃないか！」は、早く離れなよッ！」

おおこどりに失敬失敬ほれ

ポイっと軽く放り投げられ、今度は穂子がそれを両手で抱えるようにして受け止める。

「おあだッ！？」

受け止められた瞬間、ゴチン、と鈍い音がした。

何か硬いものにぶつかったかのような鋭痛に水繻が顔をしかめる。

「み、水織大丈夫？」怪我とかさ、ほら、どつか痛いところがあれ
ばすぐに言いなよ？」

「お前じや臍ひみか足りた」

穰子の見事な巴投げが決まり、満身創痍の水織は再び宙を舞い、

としや
と彦面から無様に着地する

「で、一体何が起つたんだ？」
……いたた

首の根を摩りながら水織が訊ねると、静葉も穂子も、もちろん勇儀も眉根を寄せ怪訝そうな表情になる。

「ああ？ まさか水織、覚えてないのかい？」
「覚えてないって…………ツ？」

勇儀が指差す方向を見つめ言葉を失う。

地底の世界、この荒野の外れに、いつの間に出来上がったのか巨
大な大穴がぽつかりと口を開いていた。

まさか戦いの最中に勇儀がやつたとでも言つのだろうか。
確かに鬼なら、これぐらい造作もなさそうだが。

「何を勘違いしてるんだい。これはお前がやつたんじゃないか」
「…………へ？」

事も無げに勇儀があっけらかんと言い張る。

次いで指を差した方向には、まるで巨大なスコップで大雑把に掘
り起こしたかのような土砂が積み重ねられていた。

これを、勇儀は水織がやつたのだと平然と言つてのけた。

「……は、ははは！ ま、まっさかあ？ オレが、地面をひっく
り返したとでも言いたいんですか？ このスコップで？ うつそだ
あ？」

「ほ、ホントだよ？ あのスコップで、ドーン！ って」
「…………」

静葉の言葉に絶句する水織。

振り返り、半ば放心状態で大穴を見つめる。

あんな巨大な穴をオレが空けた？ こんな何の変哲もないスコッ
プで？ そんなことあるわけがない。

しかし、そんなことあるわけないのなら、この手に残る不思議な
感触は何なのだろうか。

「それが水織の秘めたる能力ちからってヤツなんだろ？よ。たまげたもん
だ」

「オレの能力……」

自分の中に、そんな得体の知れない能力おからがあるのかと思つと少し
ゾッとした。

これじゃまるで、人ではないみたいではないか。

と、水織が呆然自失していると勇儀に肩を叩かれた。

「ほら、ボケッとしてるんじゃないよ。秘湯おゆに用あがあるんだろ？」「え？ 秘湯……あ、そうだ」

「ここに来たのは噂の鬼の秘湯を探すためだ。
本来の目的を思い出し、水織は立ち上るとスコップと荷物を拾
い上げた。

「ここから少し歩くよ。疲れてるならおぶつてやるつか？」
「い、いいよ！ そんなことしなくても」

確かに疲れてはいるが歩けないほどではない。

水織はジャンパーを羽織り直すと、戦闘の疲れを微塵も感じさせ
ないような歩みで進む勇儀を追いかけた。

・ · ·

勇儀を追いかけて十分ほどだろうか。

水織たちが元いた場所からさらに奥へと進んで鍾乳洞に辿り着く
と、やがて目の前から白い煙と腐つたゆで卵のようなが匂いが立ち

込めてきた。

「つう、くつや……」

「ここの匂い……硫黄みたいだ」

硫黄は確か、硫化水素が冷え固まつたもの、だつたような気がする。

火山性のガスには硫化水素や二酸化硫黄が含まれていて、それが地表で冷やされたものが硫黄として出来上がる。

硫化水素は有毒性のある気体なのだが、勇儀は全然ものともしていないし静葉も穂子も顔をしかめているだけで特に身体に影響は無いらしい。

当然、水織は鬼でもなれば神様でもないわけで、奥へ進むにつけやや気分が悪くなつてきた。

「……大丈夫？ 頬色が悪いわよ」

「ちょっと匂いがキツイ。理科の授業とかでも、マスクしてたしなあ……」

「スカーフ、貸してあげようか？」

「ん、助かる」

パルスイから鶯色のスカーフを借りて口元を覆う。

そのまままっすぐ進んでいくとだんだんと蒸し暑くなつて、再びジャンパーを脱ぐ羽目になつた。

……どうせなら脱いだままで来ればよかつた。

腰に結び直してまたしばらく進んでいくと、視線の先に光が見えた。

「ほり、着いたよ」

「うわ……！ こりや、すげえッ！」

鍾乳洞の奥に広がる乳白色の世界。

天井に連なる氷柱のような白い石が、まるで豪邸のシャンデリアのような優雅な趣を醸し出し、その広さも秋の湯と同じくらい広々としている。

それは、水織が今まで見たこともないようなロマンチックで幻想的な天然の露天風呂だった。

勇儀がまるで自分の家を自慢でもするかのように胸を張つて威張る。

「どうだい。幻想郷中を探し回つたってこんな珍しい温泉はないよ

「すげえ、すげえよ勇儀！」

「あ、ちよいと待ちな水織！」

水織は臨界点寸前のテンションで勇儀の制止すら無視して飛び出

し、目の前の乳白色の温泉に何の躊躇もなく右手を突っ込んだ。

右腕から伝わる、まるで沸騰したお湯のような灼熱の感触に水織

は

「あつじやああああああああ！？」

この鍾乳洞が崩れるんじゃないかと言わんばかりの勢いで絶叫した。

右腕をブンブン振り回して強引に冷ましながら、どうにか落ち着きを取り戻す。

「そこは源泉だからただの人間じゃ入るなんて無理だよ。私はよく我慢比べに使つてるけどね」

「熱湯コマーシャルやってる人の気持ちがわかつたよ、くそう……

「ツ

まだ冷え切らない腕に息を吹きかけていると、勇儀が別の場所を指差した。

たぶん、そつちは常温だから入れるぞ、という意味だろ？。
気を取り直して乳白色の湯に、今度は、おつかなびっくりと一いつ感じでゆっくりと手を突つ込む。

焼けた肌に染み渡る滑らかな感触。

お湯の温度は四十度辺り、熱過ぎず温過ぎずとじょうへい温度だ。

乳白色の湯は舐めてみるとかなり酸っぱい。

「……泉質はやっぽり、硫黄泉か。となると、筋肉痛とかには効かないんだよなあ」

「何をぶつぶつ言つてるの？」

「泉質を調べてるんだよ。あの爺ちゃんはぎっくり腰つて言つてたよな。硫黄泉は神経痛にも効くから、これでも大丈夫、……なのかなあ？」

ぎっくり腰つて神経痛、なのだらつか。

「水織君、温泉とか詳しいんだ」

隣で水織を眺めていた静葉が感心した様子で呟く。
そんな大層なものじゃないと水織は首を振った。

「旅館で生活してりや嫌でも覚えるのさ。爺ちゃんも、重度の温泉

マニアだったし」

「ふうん……」

一応、硫黄泉は飲めば腹痛にも効く……が、これは別に関係ないか。

水織はリュックの中から紫の術符を取り出し、源泉の端にひつやりと張り付けた。

「これでもう片方の符を秋の湯に張り付ければ、ここのお湯が使い放題となる。」

「……何だか卑怯臭いな。」

「よし、これでやることは済んだな。勇儀、ありが……ってえ…？」
「うん？　どうした水織？」

振り返ると、何故か半裸で勇儀が立っていた。

鍛えられ引き締まつた体には晒が巻かれていて、くつきりと流線型のスタイルと豊満な胸が見て取れた。

「い、いやいやいやいや…？　あの、な、ななな何で脱いでるんっすか！？」

「何でって、入るからに決まってるだろ？　お前の世界じゃ服着たまんに入るのかい！」

「い、いや入らないけど……つてそういうじやなくて！？」

水織の前だとここの、当の勇儀は何の遠慮も無じにじぶん脱衣の作業に入る。

上着を捨て袴を脱ぎ、残る一枚布が今！　という決定的な瞬間を迎えた途端、水織の視界が突然暗黒の世界に包まれてしまった。

「だ、誰だ！？　今一番いいところがふあつ！？」

と同時に頭部に強い衝撃が襲いかかり、水織の意識はそのまま闇の向こう側へと吸い込まれてしまった。

そして意識を失った水織を、静葉が真っ赤な顔で抱え上げると勇儀に大雜把な一礼した。

「じゃ、じゃあ私たち失礼します！」

「はあ？ せつかくなんだしお前らも入つてけつて」

「結構ですッ！」

そしてそのまま、水織は姉妹に抱がれるよつな形でその場を後ろにした。

取り残された勇儀はただ呆然とその後ろ姿を田で追いかけ、やがてふうと小さく息をつき肩をすくめた。

「せつかくここまで来たつてのに入らないで帰つて行つちやつたよ。
忙しない連中だね」

「私も付き合つて疲れたし、帰ろうかしら」

「なあ、パルスイ。あいつら何で帰つちやつたんだろうな？」

「さあね

「つうん……」

勇儀は腕を組みしばらく考えたが、結局特に何も思いつかなかつた。

脱ぎ捨てた服を「そこそ」と漁ると酒の入つた瓶とお猪口を取り出し、ついでに何処に入つていたのか朱色の盆を浮かべて酒を注いだ。

「ま、いいや。久々に面白いヤツと戦えたし、満足満足」

上機嫌で酒を飲み始める勇儀を残してパルスイが洞窟を歩きだす。

……実は、静葉と穂子が勇儀の胸に対して嫉妬していたのをパルスイはちゃんと感じ取っていた。原因は言つまでもなく彼だらう。

「人に恋する神様……ね」

恋に嫉妬は付き物。それは至極当然なのだが、しかし何と人間臭い神様だろうか。

「……秋の湯か。私もちょっと行ってみようかな」

その日から、秋の湯のお湯が鬼の秘湯と同じ乳白色になった。当初は利用客から氣味悪がられたのだが、あの老人のぎっくり腰が治ったという噂が広まり、秋の湯は毎晩行列が出来上がるほどの大繁盛となつた。

里の住人は皆『秋の神様のご利益だ』と口々に言つてゐる。本当は鬼の秘湯のお陰なのだが、これは水織と秋姉妹だけの秘密である。

第十七話 ジャヤラジー（後書き）

お気に入り登録してくださった方々、ありがとうございます。

これにて、第一章終了です。

やつと目覚めた水織君の能力、そしてちょっとパワーアップした秋の湯。

これからどんなお話が繰り広げられるのか、乞う期待です。

それと途中、水織君が硫黄の匂いが～と言っていますが、厳密に言えば硫黄は無臭です。

この場合の腐った卵のような匂いといつのは硫化水素の匂いです。そここんどい、ちょっと注意です。

これ書いてると、実際に温泉とか銭湯に行きたくなりますねw

読んでる人も、そう思つたりすることがあるのかな?

感想ご意見、待つてます。

次回はやつぱり三日後、11月15日です。
では、待て次回。

第十八話 夢と、第三の美女

遠くで、女の子の泣き声が聞こえる。

やめて、やめてッ、やめてッ！

声は神社横の、普段物置として使われている蔵の方から聞こえた。水織はすぐさま駆け出し蔵の影からそっと顔だけ覗かせて様子をうかがう。

蔵の前で、少女が少年たちに囲まれていた。

栗色の髪に黒く澄んだ瞳が特徴的な可憐な少女。

彼女は水織にとつて、初めて出来た友人と呼べる存在だった。

そんな少女が今、少女よりもずっと背の高い少年たちに囲まれ苛められていた。

栗色の綺麗な髪を引っ張られたり、乱暴に蹴飛ばされたり。

少女は何度も何度もやめてと叫んでいるのに、少年たちは聞く耳を持たず苛めを続けている。

やめる！ オレの友達に、何をするんだッ！

しかし水織の叫びは誰に届くことなく虚空に響く。

何故か。それは単純に水織が叫んでいないだけだった。

今の叫びは、心の叫び。

何度声に出そうとしても言葉よりも先に体が震えだし、唇が思ひょうに言うことを探してくれない。

心中では勇気よりも先に恐怖が全てを支配していた。

恐くて、少女の前に姿を見せられない。

今の水織は少女と同じくらいの背丈で腕も小枝のように細く、とても太刀打ちできるような力は持ち合わせていない。

ここで少女の前に出ても、田の前で「テンパンに打ちのめされ逆に惨めな姿を晒してしまつ」となる。

そんなこと、絶対に嫌だつた。

あの子に、絶対にカッコ悪いと思われてしまつ。

それは子供ながらの小さくて身勝手な自尊心^{プライド}。

……そうだ、誰か大人を呼べばいい。

あの子が苛められていると報せ、誰かに助けを求めるべいいんだ。それは少女を助けるための名案だつた。

いや、違う。

本当はただこの場から早く逃げたかった。

自分ではどうにも出来ない、だから誰かに助けを求める。

それは当然のこと。力のない子供なら、もつと当然のこと。

違つッ！

本当は適当に理由をつけて逃げたかっただけ。

田の前の少女を見捨てて、ひとまず自分の身だけは守りつとこつ

矮小な防衛心。

だから、水織は

・・・

「うわあッ！…」

体を起こし、気がつくと水織は血室の布団の上だった。

そして、今見ていたものが夢であると気づくのに少々の時間がかかつた。

全身をびっしょりと濡らす汗の感触が気持ち悪くてシャツを脱ぎ

捨てると、朝の冷たい空氣に冷やされ体がぶるぶるッと震えた。
寒さだけの、せいだらうか。

「……何で、この夢…………もつ、忘れたはずなのに」

もつ、九年も前の出来事。

「最近はこんな夢など存在すら忘れていたはずなのに、何故今になつて再びこの夢を見たのだろうか。
思い当たる節など一つもないのだが、もしかしたら能力とやらの目覚めのせいで疲れているのかもしれない。

「疲れ……か。うん、そうだよ。いつも時は風呂でも入つてサッパリすりやあいいんだ」

力口に下着を突っ込んで玄関に立ち、ふとあの少女のことを思い出す。

「そりいえば、あの子も不思議な“力”を持つてたつけな……」

だが、どんな能力だつたかはすぐに思い出せなかつた。
水織は足早に男湯に湯を張り、そして誰も見ていないことをいいことに湯船に思いつきり飛び込んだ。

・ · ·

「いらっしゃいませえ。秋の湯へようこそお

静葉が入り口でお客さん一人一人に丁寧に会釈をしている。

水織たちが地底で秘湯の源泉を繋げてから秋の湯は大繁盛で、それこそ毎晩里中の人々が押し寄せてくるほどだ。

「秘湯の効果つてすごいね。売り上げがウナギ昇りだよ！」

「小さな里だから、ローミの影響が凄いんだろうな。あの爺ちゃんももう医者はいらねえって突っ返したつて自慢してた」

「あつははッ。元気なお爺ちゃんだね。あ、いらっしゃいませー！」

穢子も静葉に負けじと元気な挨拶でお客さんを迎えていた。
来てくれるお客様も、秋姉妹の姿を見るとみんな両手を合わせて拝み始める始末。

この調子なら、彼女らの求める信仰とやらも徐々に回復していくのではないか。

水織も自分の仕事を思い出してボイラー室に向かおうとした直後、
お客様の中にウサギ耳が揺れているのを見つけた。
どうかで見覚えがあるような……そうだ、確か。

「鈴仙、だっけか」

「あ、水織さん。こんばんは」

以前、ぎっくり腰の老人をなだめようとしていたウサ耳の少女、
鈴仙。

確かに医者見習いとか何とか言っていたような気がしたが、今日はあの老人と一緒にいるところを見ると今日は一人で来たということらしい。

まあ、あの老人は医者は突っ返したと言っていたのだから当然か。

「……うん？」

鈴仙の後ろでピンク色のスカートのようなものがはためいている

のを見つけ首を傾げる。

スカートとついでに、彼女と同じような白いウサ耳が見えたよう

な。

「せえい！」

「ひやあ！？」

威勢のいい掛け声とともに、突如鈴仙の膝がカクンと崩れ前に倒れかかる。

すると、鈴仙のすぐ後ろで見知らぬ少女がニシシとあくびに笑みを浮かべていた。

ピンク色のスカートに、鈴仙と同じようなウサギの耳、しかしこちらは少し垂れかかっている。

鈴仙がすぐさま振り返ると、顔を真っ赤に染めて第一のウサ耳少女を追いかけた。

「い、こりあ！ また悪戯して！」

「油断してるとつちが悪いんだよ～ん」

と、文字通り脱兎の如き速度で秋の湯正面をぐるぐると翻けまわる。

事情のわからない水織はどうしていいのかわからず、しばし呆然と立ち尽くしていると少女が水織を盾にするかのササッと背後に回った。

「あ、あのコイツは？」

「てゐ！ いい加減にしてください！」

「いいじゃないか。ちょっとぐらい悪戯したつだけ」

「てい……？」

それが名前なのだろうか。

水織の背後の少女はケラケラ笑いながら水織に手を差し伸べてき
た。

「因幡てゐだよ。今日は皆で噂の銭湯とやらに遊びにきたのや」

「オレは水織……つて、皆? とこいつと鈴仙とか」

「あ、いえ。今日はお師匠様も一緒になんですね」

「お師匠様?」

鈴仙が医者見習いだと言つたから、この場合の師匠とはもちろん医者の師匠だらう。

医者と聞くと何となく無骨な中年男性を浮かべてしまつたのだが、道の向こうから現れたのは女性だつた。

「優曇華わいじんげにてゐも少しあしゃざき過すぎぎですよ。もう少しゆくへり歩あるいてちょうだい」

「んな……ッ!」

スラリとした長身と、月明かりに反射する綿糸のような滑らかな銀の髪。

まるで夜空に浮かぶ月のように透き通るようになめらかな姿は、ある種美の女神なのではないかと錯覚してしまつほどじこ、彼女は綺麗だつた。

鈴仙がそんな美女に付き添つよつとして水織を示す。

「お師匠様。彼がこの前話した水織君です」

「へえ……彼が」

凛と澄んだ声に水織が一瞬で硬直してしまつ。

鈴仙は彼女にいつたい何を話したというのだろうか。

まさか老人を無理やり銭湯に入れたことに対し怒っているとでもいつのだろうか。だとすると、自分は何て無礼なことをしてしまったのだろう。ここは早急に謝ってイメージを回復せねばならない。この瞬間、水織が頭を下げるのに一秒と掛からなかつた。

「すいませんッ！」

「は……はあ？」

突然の水織の謝罪を受け、銀髪の美女がやや困惑したよつた表情になる。

謝罪が足りないのだろうか、水織は今すぐにでも土下座出来るよう構えを取つて、実行しようとしたところで穂子が顔を覗かせた。

「あれ。水織、何やつてんの」

「え、えっと。この前爺ちゃんを無理やり銭湯に入れたことに対しうての謝罪を」

「謝罪？」

穂子と、美女までも首を傾げる。

何故そんなことを？ と今すぐにでも言葉が出そうな顔をしていた。すると鈴仙が口ホンと咳払いしてから話に割り込んだ。

「違いますよ。湯治のお話です」

「湯治の？」

すると美女もこいつと微笑み頷くと、凛と澄んだ声音で水織に答える。

「はい。里に新しく湯治場が出来たと聞いたので、こじまでやつてきたんですよ」

「湯治場……あいや、ここにはただの銭湯なんですけど」

「でも、ここのお湯は神経痛に効くという噂で持ち切りなんですよ？」

？ それこそ、医者がいらないと噂されるぐらいいこ

「うぐ……」

鈴仙の顔が、しまつたという顔になつて慌てて訂正を入れる。

「ち、違いますよ？ お仕事がちょっと減っちゃったのは事実なんですけど、今日はせっかく出来たのなら私たちも入つてみようつて、お師匠様と話してやつてきたんです」

「そ、そうなのか。ちょっとドキッとしたじゃないか

「それにしても、銭湯なんて初めてだから、ちょっと緊張するわね」

美女がシャンプーやら何やら入つた桶を抱えながらはにかむ。

いい、すごく。今すぐ一緒にしたいっす。というか彼女らは銭湯初めてなのか。といつことは一肌脱がざるを得ない。風呂だけに。

「だ、だつたらオレが入り方をお教えしますよ！ もちろん実演しがやあああ！？」

鋭いローキックが脇腹を直撃。

もんどうり打つ水織を放つておいて、穂子が営業スマイルを作る。

キックボクサーかお前は。

「い、この馬鹿は放つておいてお入りくださいな。入り方とかマナーとかは、脱衣所の張り紙に書いてありますので」

「ありがとう。だけど、もう少し待つてもいいかしら。まだ一人来ていない人達がいて」

「じ、じゃあ、外で待つても寒いだけなんで、よかつたら中で待つて、ください……」

息も絶え絶えに水織が告げると彼女らは首肯し、三人で秋の湯の建物の中に入つていった。

しかし幻想郷に来てからとつもの、どうも欲望が漏れて外に出てしまふのは何故なのだろう。

正直なのは大いに結構ことなのだが流石に外に出てはいかん。

「……水織、お密さんに変態発言してないで一人を迎えてあげたらどう？」

「致命の一撃を浴びせた張本人が言う台詞かよ……仕方ないな」

一瞬ボイラーが気になつたが、開店したばかりだしすぐに温度が下がるという心配ないだろう。

護身用に以前役に立つたというスコップを抱えながら、水織は鈴仙たちが通つっていた西の街道に向けて歩き出した。

第十八話 夢と、第二の美女（後書き）

第三章、始動。

やつぱり永琳の口調が安定しないんで、永夜抄でまた勉強しよつ……

それとあんまし関係ないんですが、ちょいと風邪を引いたみたい？
なので今田はさっさか寝ます。

次回更新は11月18日予定。

では、また次回。

第十九話 月夜に不死鳥

夜の帳が下りた幻想郷。

今宵は満月。

空から降り注ぐ白い月光が煌々と夜道を照らし出し、僅かながらの道標を水織の前に示してくれている。

今水織が歩いているのは秋の湯から直結している西の街道。

街道と言つても、この里以外に村や町があるというわけではないので少し語弊があるかもしだれないが、水織はスコップを肩に担ぎながら月が照らした道を一人歩いていた。

夜は妖怪が跋扈する時間。夜の幻想郷を一人で歩くのはこれ一度目となる。

「今日はルーミアは出でこないのか」

以前水織は夜を操る妖怪ルーミアに遭遇し襲われたことがあった。夜、即ち闇を操る妖怪。

水織の視界を奪い、ついでに自分の視界も失ってしまった結果、通りすがつた靈夢に呆気なく撃退された……これだけ聞くとずいぶんと不憫な話ではある。

その後助けてからは一度も姿を見ていながら元気にやつているのだろうか。

どうせなら秋の湯のことを紹介しておけばよかつた、と途中まで思つたが、妖怪を招いてしまつたら大パニックになつてしまふな気がした。

「銭湯が暗がりになつたら大変だしな。覗きとかできな……」「ほん

危うくとんでもないことを言つてしまいそうになるのを堪え飲み

」む。

いや、覗きなんてしていない。断じて。気を取り直し前に向き直つて歩きだす。

幻想郷の秋も一層深まり、夜の風は急激に水織の体を冷やし包みこむ。

もう少しすれば幻想郷にも冬が訪れそうな気がする。

寒くなれば当然銭湯経営はさらに大変そうになりそつだと案じながら歩いていくと、やがて田のお前の方角から何やら話し声が聞こえてきた。

「……つたく、お前が着替えるだの何だの言つてる間に置いてかれちまつたじゃねーか」

「そういう貴方こそ、銭湯つて何なんだつてしまふ永琳に訊いていてみつともなかつたわよ。まさか怯えてるの？」

「な……！？ んなことあるか！ 聞き慣れない場所だからどんなもんかちゃんと知つておきたかつただけだ！」

「ふうん……？」

「その挑発的な田は何だてめえ……！」

聞こえてくる話し声は剣呑な雰囲気を放つていて今にも喧嘩が勃発しそうな様子。

しかも声はどちらとも女の子らしい。かぐや、と聞いたから多分女の子で間違いないと思つ。

声はちょうどこの先の少し開けた平野の方から聞こえてきたので、水織は足早に向かうこととした。

「おつと」

一応妖怪の可能性を考え、水織は手近な場所にあつた岩場に身を隠し様子をうかがつ。

口論を交わしていたのは案の定一人の女の子だった。

「銭湯つてあれだ、結局は湯浴みのことだろ。それなのにそんな着飾つてどうすんだ」

やや威圧的で男勝りな口調の彼女は、銀色の髪に赤いズボンのような着物の袴のような、見たことのないような姿をしていた。今で言うところの、オーバーオールに似ているような気もする。

「そんな格好で外を出歩くだなんて、普通じゃ考えられないわ。身だ、しな、み、つて知ってる？」

そして銀の髪の女の子を挑発するかのような視線と言動を繰り返すのは、古典的で優雅な雰囲気を醸し出す少女。

姿はまるで百人一首の絵札から抜け出したかお姫様のような格好だった。十一単、とまではいかないが全体的にゆったりとした大きなドレスを揺らしている。

何が原因なのかは知らないが両者は睨みあいながら火花を散らし平野の真ん中で対峙していた。

今にもお互いに飛びかかりそうな、そんなピリピリとした一触即発な雰囲気がこちらにまで伝わってくる。

……何なんだあの二人。

「いちいち突つかかる言い方しやがって！ 我慢ならねえ、勝負だ！」

「はいはい。どうせ私が勝つって決まってるんだから

勝負ということは、恐らく弾幕勝負だらう。

二人が互いに距離を取つて後方に飛び向かいあうと、彼女たちを中心は何やら魔方陣のようなものが浮かび上がる。

「あれも弾幕勝負……なんだよな」

物陰から顔だけ覗かせて両者を観察する。

銀の髪の女の子が軽く両足を広げファイティングポーズを取る。ちょうどボクサー選手のそれとよく似ていた。対する優雅な少女はとくにこれといった構えをせず、悠然とした態度で少女を見据えている。

「いつでもどうぞ？ 妹紅」「

「言われなくてもやつてやらあッ！」

裂帛の気合と共に少女の両手から炎が爆ぜ、優雅な少女曰掛け火の玉が猛進していく。

水織は呆気にとられていたが、次の瞬間さらに驚くことになった。

「……はあ。相変わらず単調な攻撃」

心底つまらなそうに片手だけを薙いで炎をかき消す少女。

鬱陶しい蚊トンボでも追つ払つかのように片手だけで火球を消し去ってしまった。

そして再び挑発的な眼差しで銀の髪の少女を見据える。

「最初から本気で来なさいよ。さつさと決着付けて、永琳たちと合流しないと」

「お望み通り、私が勝つて終わらせてやるぞー！」

トン、と人間では到底辿り付けないような跳躍で銀の髪の少女が跳ぶ。

そして次の瞬間、少女の背後から爆炎の翼が舞い上がり、さながら

らその姿は灰から生まれ羽ばたく不死鳥のように見えた。

「すげえ……！」

思わず見惚れてしまい、呆けるように空を見上げる。

紅蓮の翼で空を飛ぶ少女は烈火を灯した右手を素早く薙ぐ。すると今度は優雅な少女の足元に、翼を広げる不死鳥のシンボルが浮き上ると鋭い光を放ち足元から緋色の光弾が巻き起こる。

「『パゼストバイフュニッシュス』」

まるで暴風雨のように荒ぶり爆ぜる光弾。

しかし対する少女は身動き一つせず、荒れ狂う弾幕の嵐を一瞥してからやがて一枚の札を取り出し構えた。

「神宝『サラマンダーシールド』」

符から放たれる光が彼女の周囲から放射状に広がると、銀の髪の少女の弾幕をかき消すようにして広がり一つ残らず相殺していく。水織はただただ唖然とするばかりで、その場に、その光景に釘付けとなっていた。

「これが、遊びだつて……？」

ルーミアと靈夢、それと秋姉妹と勇儀の弾幕勝負は間近で見ていたこともあって凄い迫力だったが、目の前の彼女たちはそれを圧倒的に凌駕していた。

飛び散る光弾の嵐、優雅な舞踏でも舞うつかのように動き回る少女たち。

水織が今まで見ていた弾幕勝負よりも圧倒的に大迫力で、圧倒的

に優雅。

このまま終わりが来るまで見ていてもいいと思つまどに彼女たちは美しく戦つている。

だが水織も本来の目的を忘れるほど野暮な人間ではない。

「……でも、どうやって止めりやいいんだ」

あまりに凄絶過ぎて、勝負の渦中に踏み込んでいくような気が全くしないのだ。

あの弾幕の嵐に突っ込んでいけば、待つているのは恐らく死。例え死ななくとも、大怪我をするのは目に見えている。説得しようにも、弾幕の衝撃や爆風で声が届くのかどうか怪しい。

弾幕勝負が終わるまでここで待つか、しかしそれでは鈴仙たちを待たせてしまうだろう。

かといって弾幕勝負に割り込んで入るわけにもいかず、というか間に入る自信などこれっぽっちも無いわけだが。

「タオルを投げたら通じるか？　でも、それはボクシングの話だよな……」

投げ込んでも消し炭になりそしだが、岩陰に腰掛けどうにか妙案はないものかと思考を巡らせる。

ふと、今の今まで存在を忘れていたスコップが目に留まった。

「そういえば、勇儀や静葉たちがオレに能力があるとか言つてたよな……」

あの時水織は地底の底にスコップを穿ち第一の大穴を開けたといふ話だが、どうにか上手く使えないものだらうか。

スコップを握り、物は試しと切つ先を地面をコシコシと当ててみ

る。

するとスコップの先端が何の抵抗も無しにすり抜けた。それは鋭利な刃物でバターを切るような感覚に近かつた。

「どう……なつてんだ？ 普通はこんな風にならないだろ？」

切つ先が当たれば地表とぶつかり砕き地中に突き刺さる。それは物理的な法則に従つたもので、当然そこに地面の強度やスコップの精度で抵抗が生じたりする。

しかし水織の手のスコップには抵抗がまるで無かった。

このことから、自分の能力とは、何の抵抗も無しに地面を抉り掘

ることのできる能力、と水織は半信半疑ながらそう考えた。

しかしそう仮定した場合、地底での一件はどうなるのだろうか。これではただスコップが地面を無抵抗で貫くと言つだけで大穴とは直接的に繋がらない。

「む、難しく考えるのは止めだ止め！ とにかくこれで少しでも注意を反らして、それから説得する！ この作戦でいくぞ」

意を決した水織は岩陰越しに見据え、ちょうど一人の真ん中に狙いをつけると岩の根元にスコップを突き立てた。

無抵抗で地面を貫くと、スコップの柄が半分あたりまで沈んだところでグリップを握り直す。

そしてこの原理を利用して支えを作り、今までお世話になつていた岩陰にお別れを告げる。

「せえ……のッ！」

スコップに全体重を乗せ圧し掛かると、存外大きかつた岩が地面から姿を見せ水織の体重の勢いを乗せて放り投げられる。

放物線描き飛んでいく大岩は、さながら大昔の戦争で使われた投石機のように見えた。

彼女たち風に名付けるのなら『岩弾投擲』なんてどうだろうか。

……やばい、ちょっとカッコいいかも。

「コイツで終わりに……つおわー？ な、何だいきなり！」

思わず乱入に少女の手の炎が止まり、両者の視線が自然水織の方へと集中する。

スコップを構え立ちつくすその姿は滑稽でこそあつたものの、見知らぬその姿に二人とも訝しげな視線を送っている。

「誰だ、お前」

「私たちの勝負に水を差すだなんて、無粋もいいところだわ」

「こ、こつでもしないと話を聞いてくれそうになかったから仕方なくだ。アンタら、鈴仙たちのツレだよな？」

鈴仙という名を聞いて一人が顔を見合させ、やがて優雅な少女が首肯した。

「……ええ。でも、どうしてその名を知っているのかしら」

「銭湯でアンタらを待ってるんだ。んで、オレがアンタらを迎えて来たってわけ」

「つてことは、永琳たちはとっくの前に辿りついてるってわけか。こりや遅刻だな」

優雅な少女の魔方陣が消え、銀の髪の少女も炎の翼を消して着地する。

銀の髪の少女はそのまま歩み、水織の姿をまじまじと見つめるとやがて口を開いた。

「で、お前は？」

「秋の湯の水織。草津水織って言つんだ。アンタらの名前は？」

「藤原妹紅。妹紅で構わん」

「蓬萊山輝夜。待たせてしまつて悪かつたわね。この馬鹿が喧嘩吹

つ掛けるもんだからつい」

「ああ？ 先に挑発してきたのはてめえだろ？が

「さあ、どうだつたかしらね」

「こんの……！」

「お、おいおい！ 頼むから銭湯で喧嘩は勘弁してくれよな」

弾幕勝負で崩壊する秋の湯とか洒落にならない。

一抹の不安を感じつつ、背後で口論を続ける二人に水織は心の中で深いため息をついた。

第十九話 月夜に不死鳥（後書き）

お気に入りユーザー登録、40人になりました。
登録してくださった方、そしていつも読んでくれる読者の皆々様、
ありがとうございます。

次回更新は11月21日予定です。
では、また次回。

第一十話 ボイラー室の隠し機能

どうにか妹紅と輝夜を秋の湯に連れてくることに成功し、水織は一人ボイラー室でパイプ椅子に体重を預けていた。

機械油のよくなやや鼻にシンとくる匂いが若干気になるが今となつては水織の作業場。

といつてもそこまで複雑な作業をするわけではないのだが、秋の湯のお湯の温度を管理する大切な場所であることに変わりは無いので蔑ろにすることは出来ない。

「ま、スイッチとレバーとバルブしか触らないんだけどさ」

ちなみにこのボイラー室は男湯と女湯の間の地下にある。

銭湯とは公共の施設であるが故、一度に大勢の人間が利用すると若干の温度の変化が多く起こり得る。

今は鬼の秘湯のお陰でそこまで激しい温度変化はないわけだが、それでも時々水織が機械を操作して温度調整を図っているのだ。温度計を見て、既定の温度に達していることを確認すると水織は傍に置いてあつた水筒からお茶を飲む。機械が作動している間は当然この部屋も温度が上昇するので必需品となつてくる。

中身を飲み干し一息つくと、立ち上がってもう一度計器類を一つずつ見直していく。特に異常は見当たらない。

「事務室戻つて休憩するかな」

『へえ、これが銭湯ですか……』

「……んん?」

突然鈴仙の声がして辺りを見回すが姿は当然見当たらない。

空耳か、と気を取り直してボイラー室から出ようと手をかけた瞬

間またも声が響く。

『広いな。このお風呂泳げそうじやん！』

『だ、ダメですよー。』 これは公共の場なんだから、そんな迷惑な『そいい!!』

『もう！ 少しは大人しくしてくださいよ！』

今度は鈴仙と、それからてゐとやらの声まで聞こえてきた。
ここは地下であるボイラー室なのに何故彼女たちの声が聞こえて
くるのだろうか。

気になつた水織は出口へ向けていた足を一歩戻して部屋をぐるりと見回し、やがて部屋の隅にある換気ダクトに気がついた。

「...」か

どうやら彼女たちの声はここから漏れていまいしい。

しかしこれではお客様のプライベートが守られないではないか。さつさとにとりに相談して直してもらわないと。そして今度こそ水

「わざとにしてやる。お嬢様の胸にておひらくなれ……」

それは恐なくてゐの何氣ない咳き、しかし水織にとつては聞き捨てならない台詞。

今までに過出しそうにしていた扇からハケ転て一度二度跳ね回り、
一気にダクトまで引き返して聞き耳を欹てる。そばだ

え、ええ？ な、何ですか數から棒に

『いやね、私も一度でいいからそんなダイマナイトボディになりた

いなつて思つて』

『別に、胸だけなら優曇華だつて大きいじゃない』

『な、何で私を話の引き合いで出すんですかッ』

頭上で盛り上がる彼女たちの話に水織の全身がダクトの前で釘付けになる。盗み聞きとは覗きとほぼ同等に背徳的な行為。しかしこれはこれである意味、覗きより刺激的である。

ええい、話の続きはまだか。是非ともあの美女のスリーサイズは知つておきたい。

『お～お～、今日はまた珍客がいるじゃねえか』

『あ、魔理沙に靈夢だ』

ダクト越しに聞こえる威勢のいい魔理沙の声。それとビリヤリ靈夢も一緒らしい。

『どうしてアンタらがここにこるのよ。それに、アイシラまで』

『しかも何やつてんだアイシラ。お互に顔真っ赤にしてよ』

『我慢比べ。ここじや弾幕勝負出来ないから我慢比べするつても』

『普通にのんびり漫かつてりやこいじやねえか……うつと、今日もちと熱いな』

『これぐらいが普通でしょ。我慢しなさい』

『子供じゃないんだからそれぐらいわかつてるぜ。はあ……極楽極樂』

『樂』

ジャブンと、それから浴槽からお湯が溢れる音が続け様に聞こえてくる。

一般的に見れば美少女大集合、といつわけになるのだが生憎水織はお師匠様以外の雑兵に興味はない。

「さ、わしきの話はまだか！？　まさか中断とか言わないよな……？」

ダクトにべつたりと頬をつかるよつとして全神経を耳に集中させ
る。やがて話し声が再び聞こえ始めた。

『で、アンタたちは今何の話してたのよ』
『お師匠様の胸はおつきになーって話』
『…………』

…………？　この微妙な沈黙は何だ？

『あ、ゴメン』
『そ、そんなもん無くてもいいでしょ？　くつだらないわね』
『でも今胸を見てふわッふ！？』

何か言いかけていたてゐの声が突然水飛沫の音にかき消される。
というか、靈夢の話とかどうでもいいんでわしあとお師匠様の話を
をお願いします。

『私はそんなの気にしてないわよ。魔理沙だつて大したことないし』
『失礼な奴だな。このスレンダーなスタイルを見て何とも思わない
のか』
『物は言いようねえ……』
『あ、もしかして妬いてがほばあッ！？』

魔理沙の声がまるで魚雷でも爆発したかのような凄まじい音に巻
き込まれたのだが大丈夫だろうか。

『だいたい胸なんて飾りでしょ。脂肪の塊でしょ。そんなもんでか

くたつて邪魔なだけじゃない』

む、貧乳はステータスとでも言いたいのか靈夢。それは間違いだ、
大いに間違っている。

『まあ、無い物ねだつてもしじうがねえよなあ……くく』

『魔理沙、後で覚えてなさいよ』

『おー、怖い怖い』

それからしばらくは何の変哲のない世間話に切り替わってしまい、
水織としては肩透かしを喰らつたような中途半端な心持だった。
とはいへ、まさか換気ダクトがこのよつたな素晴らしい仕事をして
くれると思わなかつた。

地味で少々退屈な作業場であったが、この発見のお陰でしばらく
は退屈しそうにない。つていうか、これで退屈になるヤツ絶対男じ
やないだろ。

『さて、そろそろ出ようかしら。長湯は体に悪いわ

『えー?』

「なん……だと……!？」

まだ入浴して三十分と経つていい。男ならともかくとして、女
性はもつと長く入つているものではないのか? 少なくとも姉は最
低でも一時間近く入つていたのだが。

しかし、彼女の言うとおり銭湯ほど熱い風呂での長湯がおススメ
できないのもまた事実。

当たり前だが長い時間入浴していれば当然のぼせる。そしてのぼ
せたまま入浴を続ければ脱水状態や失神することも起こり得るし、
不整脈（動悸や胸の不快感や息苦しさを感じること）、脳梗塞の恐

れまである。少しでものぼせたかもと思つたら、すぐに上がって冷たい水を飲むなどして体を冷やす処置を取るよ。水織との約束だ。

出来上がって間もない秋の湯で死人とか是非とも勘弁していただきたいものである。

で、肝心のスリーサイズがまだなんだけど……

『じゃあ、お先に失礼するわね』

『おう。じゃあな』

『あの一人をちゃんと連れて帰つてちょうどいいよ。顔真っ赤にして何時まで続けてるつもりなのよ』

『は、ははは……』

ピタピタと裸足でタイルを踏みしめる音が遠ざかっていき、水織が期待していたスリーサイズは結局聞けずじまいに終わってしまった。

だが少なくともお師匠様が巨乳であることは判明した。大いなる一步である。

さて、と三度目の正直で今度こそボイラー室を出ようとした時、不意に魔理沙がこんなことを言ひだした。

『なあ靈夢、サウナって知つてるか?』

『サウナ?』

『サウナだつて……?』

サウナなら水織も知つている。といふか実家の旅館にも完備している。

サウナとは風呂の一種であり、非常に温度の高い部屋で汗をかく蒸し風呂のことだ。

フィンランド発祥のサウナの歴史は千年以上もあり、現代においては様々な形式のサウナが派生して出来上がっている。

焼けた石に水をかけその蒸氣で体感温度を上昇させる発祥の地オーリジナルのフィンランドサウナ。スチームバスやミストサウナ、それから塩サウナなんでもある。塩サウナは文字通り体の表面に塩を塗り付け体をマッサージしつつ皮膚の表面の汚れを落としたりする美容目的のサウナ。ちなみに、塩サウナは怪我をしている時は断じて使用しないように。軽く地獄を見る。もつとも、塩の脱水効果でどのみち体は痛くなるのだが。

『本で読んだんだけど、体に良いらしいぜ。どうせならもうこう機能も追加してくれればいいのにな』

『そんなこと私に言われてもね』

「サウナ……か」

今秋の湯は鬼の秘湯の効果もあって客入りはいいが、いくら神様の銭湯とはいえそのまま廃れてしまう可能性はある。

ここは新施設を拡張し、もっとアピールするべきかもしれない。物珍しさの効果もあって売り上げが増加したり、もしかしたら姉妹が欲している信仰とやらもさらに増加するかもしれない。となると、にとりや姉妹にも一声かけなくてはいけない。

「……んじゃ、そろそろ事務室へ戻るとするか

』のまま話を聞いていてもいいのだが興味がない。水織は適当に後片付けを済ませると、重いボイラー室のドアを開けて出て行った。

事務室の戸を開けて入るといきなり紫と田が合って水織は一瞬たじろいだ。

「あら、こんばんは水織君」

「一、こんばんは……ってどうして紫さんがここに?..」

紫紺の瞳が水織を一瞥し、そして優雅に微笑む。楽しそうに、ではなく、愉しそうに。

「貴方、能力に目覚めたでしょ?..だから使い方を教えてあげようと思つてね」

「え、オレの能力のこと何で知ってるんですか?..」

「美女は何でも知つてるものよ。ふふ」

「……なるほど」

美人なら仕方ない。

しかし、突然目覚めた能力に要領を得ていらない水織にとつてはありがたい申し出だった。ここは紫の言葉に甘えても罰は当たらないだろう。水織は快諾し首肯する。

「それじゃ閉店後に、外で待ってるわ」

それだけ残し、紫は片手を難いで裂け目を作り何処へと姿を消してしまった。

第一十話 ボイラー廻の廻し機能（後書き）

今まで書いたお話の中でお色氣要素が一番多いような気が……。
これ、全キャラ書きてえかも。w

水織君の能力の名前とか詳細は次話かな。

次回更新予定日は11月24日。

ただこの日だけ一時間遅れて10時となります。
では、待て次回。

第一十一話 埋めたい過去

本日の営業を終え暖簾を片付けると、水織は紫が待つ人里外の平野へと向かっていた。

能力の特訓なので里の中では迷惑がかかる可能性を考慮してのこじだらう。たすが紫さん。

里の門を抜けてしばらく歩いていくと視界の先に紫の後ろ姿を見つけた。

「紫さん、お待たせしました」

水織の姿を見るなり紫が小さく微笑む。

「それじゃ早速始めましょうか」

次の瞬間には、紫の足元から円形の巨大な魔方陣が広がり平野一帯を瞬く間に包みこんでしまった。足元で光る薄紫色の紋様が何処となく怪しい雰囲気を出している。

「これは?」

「結界よ。今は夜だし外だし、貴方の安全を考えて結界を張るのよ」

夜は妖怪の時間。水織と紫がこんな平野のど真ん中で一人つきりで特訓していれば自然と妖怪が集まつてくるだらう。どうやらこの結界は外敵から身を守る防御的な結界らしい。外側へ手をやると、半透明の壁がバチバチと電気のような音を立てていた。

「だけど、それなら里の中で結界張つたらいいんじゃないんですか?」

「それでもいいけど、煩く言う人もいるのよ」

「……？」

結界を張れば安全なのに、煩く言う人がいる？ 脳病な人間といふことだらうか。水織がぼんやり考え方をしているといつの間にか紫が目の前まで近づいていた。

「う、うわッ」

「まずは貴方の能力を調べるから、目を閉じなさい」「め、めめめめめめ目、ですか！？」

息も掛かりそうなほど至近距離で紫は目を瞑れと仰る。
水織は今すぐにでも火だるまになりそうなほど赤く染まり、恐る恐る目を閉じた。

「まだ半分開いてるわよ」

「は、はい！」

観念して完全に目を瞑る。

見えない視界の向こうで、紫は一体何をするつもりなのだろうか。
衣擦れの音、甘い香水の香り、頬にそよぐ風。

普段なら気にならないほんの些細なことが、今は大袈裟なまでに強く意識してしまう。

紫は今何をしているのだろうか。しかし能力を調べるためとはいへ何故目を瞑らなくてはいけないのだろうか。もしかして、実は水織にキスとかしてくれるんじゃないだろうか。いやだつて、夜で、一人つきりで目の前で、しかも目を瞑れと言つてきたのだ。これはもう能力云々とかじゃなくともつとこつ、ムフフな展開期待しているんじゃないのか。つて、キスの後つて何をするつもりなんだ？
もしかして、この後何処か人気のない場所に連れていかれちゃつた

りしてもっと凄いコトが待ってるんじゃ

「はい、終わりよ」

「……あ、あれ」

目を開き、そして自分の身を確かめる。着慣れたジャンパーにアンダーウェア。背が伸びることもなれば縮むこともなく至つて健康体。とどのつまり、何も変わっていなかつた。

「あの、紫さん」

「何かしら」

「キスはないんですか?」

「……こほん。一応、能力は調べさせてもらったわ。それで、貴方の能力なんだけど」

「ぐり、と唾を飲み込み水織は紫の言葉を待つ。

自分の持つている能力の詳細がこれでようやく判明する。水織が手に入れたこの能力は、いつたいどんな能力なのか。

「貴方の能力ね、『穴を掘る程度の能力』ですって」

「……は?」

水織の目が点になる。それとは反対に紫はクスクスと微笑を漏らしていた。

「そのまんまの能力ね。スコップがまさにお似合いな感じで「い、いやいやいや! あの、「冗談ですよね? もつところへ、大地を裂く、とか別の言い方なんじや」

「いいえ。貴方の能力は『穴を掘る程度の能力』で合ひてるわよ

「え、ええ……？」

予想していたよりも遙かにショボい名前の能力に水織が肩を落とす。

……冷静に考えてみれば地靈殿では大穴を空けていたのだし、輝夜と妹紅を止める時にも大岩を放り投げるために地面を掘ったのだからとりあえず頷ける。頷けるには頷けるのだが、どうも納得いかないというか何と言うか。

「もつという、カッコいい能力を想像してたんですけど」

「ふふふ。それにしても穴を掘る能力だなんてずいぶん変わってるわね。そんな能力持ってるのを見るの貴方が初めてだわ」

「光栄です」

投げやりな水織に紫紺の瞳がスッと細まる。
水織の心を見透かすような鋭い眼差し。

「もしかして、穴にでも埋めてしまいたいような過去でもあるのかしら？」

「それは……」

紫の言葉に今朝の夢が頭を過ぎる。

確かに、女の子を見捨てて逃げ出したあの日の記憶は埋めてしまえるものなら埋めてしまいたいと思う。だけどそれとこれとは話が別でだ。関係ない。関係ないはずなんだ。

「ま、いいでしょ。早速特訓を始めましょうよ

「……はい」

それから紫の指示に従つて術符の使い方、光弾や弾幕の作り方を

教わったのだが、どれも集中する」ことが出来ずにほとんどの失敗ばかり続けてしまった。

理由はわからない。自分ではちゃんと指示を聞きその通りに実行しているのだが、思つよつといかないし何度もやっても形にならない。そして水織が失敗するたび脳裏を過ぎるあの夢。

知らず知らずのうちに水織の頭の中にはあの日の出来事で埋め尽くされていた。

「……水織君」

「ま、まだ慣れてないだけですよー。ちょ、ちょっと」シカえ掴め

ばこれぐらい」

夜の平野で響く水織の声とスコップが鳴らす金属音。
しかし虚しく反響するだけで何も起こりず、水織は呆然と立ちつくす。

「……ッ」

奥歯を噛みしめスコップを強く、血が滲みそうなほど力で握りしめる。

あの日の出来事が頭から離れないせいで、集中も何もなかつた。忘れたはずだった。だけど、忘れられなかつた。

「どうしたの。いつもの元気がないわよ」

紫が怪訝そうな表情で見つめてくる。

水織は無言でスコップを構え我武者羅に振り回すとして途中で手を止めた。

「あの……紫さん」

「何？ もしかして体調が悪いのかしら？ だつたら少し休憩して
いや、その……」

歯切れの悪い水織の様子に紫が首を傾げる。

水織はあれから一度も紫と田を合わそつとせず顔を背けたままだ
つた。

やがてスコップを地面に突き刺し紫に背を向け歩き出して行く。

「水織君、何処行くの」

「その……ちょっとだけ、一人にしてください」

結界を抜け小さくなつていく水織の背中を見つめ紫は独りごちた。

「……案外ナイーブな子なのかもしれないわね。まあ、あの歳じゃ
無理もないか」

結界を出て行ってしまった水織も氣になるが、声をかけても恐ら
く意味はないだろう。

かといって一人で出歩かせるのも不安なため、紫はすき間を通じ
て後を追つことにした。

・ · ·

結界から抜け出すと、気が付くと水織は走っていた。

夜の平野を無我夢中で全力疾走で走り続ける。

それはまるであるの時と同じ、女の子を見捨てて逃げる時と同じだ
つた。

「……はあツ、はあツ

胸の底からこみ上げてくる不快感が水織を包み、やがて不快感は全身にまで広がる。

走り続けていた足が止まり、どうにか近くの木の根元までは歩けたがそこでへたり込んでしまった。

「…………」

もうずっと遠い昔の出来事なのに、もうとっくに忘れていたはずなの!。

それはまるで罪の十字架のように水織の背に重くのしかかっていた。逃げた自分の罰、自分の罪。何も出来なかつた自分が悔しいし、逃げた自分も悔しい。

どうしてあの時助けなかつたのだろう。ほんの一握りの勇気を振り絞ればよかつたのに。

どうしようもない後悔だけが水織を苛める。水織の心を縛りつけてくれる。しかしこんな気持ち、今更どうしてのだろうか。

「せつかく紫さんが能力の使い方を教えてくれるひでのこと、なんだつて急にこんな……」

ガサガサッ!

「ツ!?

水織のすぐ背後の草むらが「」めき音を立てる。水織は咄嗟に振り向き身構え、スコップを置いてしまつたことを思い出した。

「妖怪……か?」

能力こそ身についてはいるものの、丸腰で勝てるわけがない。

足音を立てないようゆっくりと後退りして距離を取らうとして、手に何か木の枝のようなものが触れてしまった。ハツと意識した時既に遅く、パキ、と乾いた音を響かせ木の枝を折ってしまった。

草むらが激しく揺れ動く。こちらに気づかれてしまったか。

水織が握り拳だけ作って構え、そして草むらがいつそう激しく揺れ動いて何者が飛び出す。

「う、うわあッ！？」

月明かりに照らされ、何者かの姿が照らされる。

紅葉のように鮮やかなスカートに、頭には紅葉と同じ形の髪飾り。

「あ、水織君だつたの？」

「……し、静葉かあ。脅かすなよ」

「えへへ。『メンね

草むらから飛び出してきたのは静葉だった。

しかし何故草むらの中にいたのか、水織が訊ねると頭に葉っぱをつけたまま静葉が答える。

「んつと、何となく心配だつたからかな

「そつか……悪い」

「どうして謝るの？」

「いや、何となく……

「……？」

静葉が水織の顔を覗きこむようにして顔を近づけると、紫の時と同じく水織は顔を背けてしまった。

「どうしたの水織君、元気無いね」

「そ、そんなことねえよ。ちよつと一人になりたくてさ」

「もしかして、私邪魔かな？」

「えつと……」

若干返答に困る静葉の言葉に、水織はどう答えたものかと悩む。別に邪魔ではないし、かといって一緒にいてほしいとこうほどこもないし。

水織が振り返ると静葉の瞳がまっすぐこちらを見据えていた。間近で見るオレンジ色の瞳は思わずドキッとするほど綺麗で、水織は自分の頬が少し熱くなるのがわかつた。よく見れば、いや見なくとも静葉がかなり可愛らしい容姿なのは初対面の時から知っているのだが、ここまで至近距離で見るとちよつとドキドキして、そのドキドキが少し懐かしいような気がした。

「……似てるんだよな
「え？」

静葉はあの時の女の子によく似ている気がする。

髪とか仕草とかは違うのだが、何となくあの子と同じ雰囲気が漂つていて。しかし、彼女は幻想郷の住人があるので当然別人だ。

「水織君、何かあつたの？ 私でよければ協力するよ
「協力つて、そんな大袈裟な。……でもまあ、気持ちは嬉しいよ。
ありがとな」

不意に、水織は静葉にあの子のことを話してみよつかと思った。別にその行為に深い意味があるわけではなく、ただ本当に気まぐれなのだが彼女になら別に話してもいいんじゃないかと思つた。

最後の最後までじりじょうかと悩んだ末、水織が口を開く。

「……ずっと前、オレがまだ小さい時の話に、初めて友達が出来た時の話なんだけど」

あの日の出来事を、親以外の他人に話したのは今日が初めてだつた。

理由はわからない。けど、何となく話しておきたかった。静葉が興味津津といった様子で水織の言葉を待っている。

「その子が、不思議な力を持つてる子だつたんだ」

あの日の出来事の少し前、初めて出会った時を思い出しながら水織は語りだした。

第一十一話 埋めたい過去（後書き）

バイトが少し長引いて調整に時間が取れなかつた……orz
とにもかくにも第一十一話です。

そして次回は水織君の夢にも出てきた過去のお話が始まります。

次話は三田後27日予定。
では、待て次回。

第一十一話 秘密の友達

遡ること九年前、それは水織が初めての入学式を終えてちょうど半年を過ぎたころ。

水織はこの時、現在の実家である暁の湯に越して來た。

元々は遠く離れた都心部に両親と暮らしていたのだが、両親の仕事の都合と実家の経営事情などが重なりこの旅館に引っ越すこととなつた。

田舎で何もないことは水織も以前から知つていて、せっかく慣れ親しんだ学校の友達と別れることにもなるため当初は引っ越しに反対だった。しかしそんな水織の我儘が通るわけも無く、簡単なお別れ会の後に水織はこの暁の湯へと辿りつく。

「……つまんない」

両親は祖母と旅館経営の話をしていく相手にしてくれないし、かといって姉の場合はガサツで乱暴で凶暴で一緒に遊ぶのは御免被りたい。

苦し紛れに何度も読み返した漫画を開じると、自室として宛がわれた部屋の真ん中で大きく大の字になつて寝転がつた。見上げても、質素な天井が飛び込んでくるだけで、ただそれだけ。

古ぼけたカビのような匂いが微かに漂うこの部屋でこれから永劫暮らすのかと思うと水織は少しゾッとするような思いだつた。テレビはあるにはあるのだが何故か白黒でしか映らないし、ゲームなんて娯楽に使えそうなものもない。どどのつまり、何もない。結局何かするでもなく水織はじょりょりと部屋で寝ることにして田舎を閉じた。

「水織ちゃん、お昼寝かい？」

と思つたのだが、両親との話が終わつたのか部屋に祖母が来たので田を開けた。上ト逆さまの世界で祖母がこちらを見ている。水織が姿勢を正すと、何となしに祖母が窓の外の方を指差した。

「すぐ近くに大きな神社があるわよ。暇ならちょっと探検にでも行ってきたらどう?」

「それなら知つてるよ。何回もお爺ちゃんに行つたんだ」

「せつかくだし、お姉ちゃんと一緒に遊んできたら? 良い天気なのにもつたいないわ」

祖母の言つとおり外は雲一つない秋晴れで、山間のといづ立地も相まって空氣は澄んでいて綺麗だ。

水織はあまり気乗りしなかつたものの、このままここにいても退屈なことに変わりないと思い出かけたことに決めた。

「お姉ちゃんはどこ?」

「わっしき一階のロビーにいたわよ。出かけるなら気をつけに行ってらっしゃいね」

「うん」

一階のロビーには絶対に近づかないと心に留めておく。

簡単な身支度をしてお気に入りのジャンパーを羽織ると水織は部屋を飛び出し、旅館の裏口からこいつそり抜け出すようにして出て行つた。

旅館正面に通る道を抜けてまっすぐ東へ。誰も掃除をしていないような、半ば荒れ放題の山道を上つていいくとそこにはちよこんと小さな神社がある。

通称『名も亡き神社』。

朱色の鳥居が立ち並ぶその様は明かるいこの時間に見てもやや不

氣味だ。

水織が鳥居をくぐつしていくと、寂れ果てた小さな社が見えてきた。

「……でも、お爺ちゃんは何度も来てるんだし別に何もないんだよなあ」

ここまで来て何もしないのもつまらないし、落ち葉でも拾つて帰らうか。

社すぐ横の藪の近くには大きなイチョウの木やモミジの木々が並んでいる場所まで歩いて、水織はそっと足を止めた。

「あれ……？」

イチョウの木の下に、見知らぬ少女がぼーっと枝を見上げていた。後ろ姿だったので顔はわからないが、肩ほどまで下ろした栗色の髪がとても綺麗だった。

水織の気配に気づかないのか、少女は依然として木々を見上げたまま呆けている。

声をかけるべきかかけないべきかと悩んでいると、先に少女が水織の方を振り向いた。

「あ……！」

見知らぬ人間の存在に驚いているのか、黒く澄んだ瞳はまん丸く見開かれ水織を呆然と見つめている。

「えっと……あの、私は……その」

あたふたと忙しなく両手を動かし取り乱しながら、少女が何か言おうと口をパクパクさせるが、上手く言葉にならない。そんな姿が

意外にも間抜けで、水織は思わず吹きだしてしまった。

「ふツ、あははは

「あの……？」

あ、二ツノ二ツノ、可笑しくて笑いたい。

「第一回」

「え、だつて私は……」

口にいる少女を水織は今一度見つめる。

栗色の髪に新月のように黒く澄んだ絶麗な瞳

春物の少女——を足りて體験したが、これが才媛の思話が林檎の少女に分と同じ年の少女とは思えなかつた。

見た目は確かに水縞と同じ小学生程度なのだが……何と言うか、

上手く口で言えないのだが、何処か普通の人と違う雰囲気を彼女は纏っているような気がした。

「もしかしてキミ、この神社の子？」

一
え?
あ
一
批
一
応

... 1

視線を泳がせながら答える少女に、水織はちょっと変だなと思つたがあまり深く考えなかつた。

少し困ったように顔を視線を反らす少女の横顔が、今まで見た誰よりも綺麗で少しどぎマギしていたというのもあるが、単純に込み入った話が面倒だとか、彼女への興味が勝つたというのもある。

「あのさ、よかつたら一緒に遊ばない?」「ふえッ? わ、私と……ですか?」

「 もうねん。他に誰がいるのさ。」ここに越して来たばかりで退屈なんだ。……あ、神社のお仕事か何かで忙しいなら別にいいんだけど

巫女さんなんて初めて見たもんだから、ほんの少し遠慮がちに接してみる。

少女はほんの少しポカンとした表情を浮かべて、それから小さく首を縦に振った。

「 わ、私なんかでよければ喜んで」

「 本当? えへへ、ありがとう。オレ水織って言つんだ。キミは何て呼べばいい?」

「 え? えつと……うんと……」

名前を名乗るだけなのに、どうしていつも何度も口جاるのか。よっぽどの恥ずかしがり屋なのか、それともただ水織を警戒しているだけなのか。後者であれば、少しガッカリである。

「 じゃあ……そうだ千秋、千秋ちゃんとでも呼んでください。私も、水織君って呼ばせてもらいますから」

「 うん。……それでの、一つこい?」

「 は、はい。何でしょうか」

水織は苦笑しながら囁く。

「 敬語、いらないよ。オレと遊ぶ時は敬語禁止ね」

「 え、ええ! わ、わかりまし……わ、わかった、です
「 です付こりやつてるじやん」

「 す、すいません……」

「 ほりまた。あははは、変わった子だなあ

何時まで経つてもなくならない敬語を指摘された少女は、顔を紅葉と同じぐらい鮮やかに染めて俯いてしまった。

これが、彼女との最初の出会い。

それから水織と彼女は、まるで雪解けのようにゆっくつと、少しずつお互いの距離を縮めていった。

神社の境内で走り回ったり、落ち葉や木の実を集めたり、時々銭湯のお菓子を持ち歩いて食べたり。

越して来たばかりの水織にとって地元で出来た最初の友達で、ほとんど毎日のように神社に通った。

ある日、水織は神社で遊ぶのにも飽きてきて彼女を家に招待しようと声をかけたのだが。

「あの、それはダメなんです」

「え？ どうして？」

「その……私はここから出ちゃいけないんです。それと、水織君」「何？」

□元で指を立て、少女は神妙な面持ちでいつ続けた。

「私のこと、他の人には言っちゃいけません。私と水織君だけの秘密、ということにしていてください」

「ええ？ なんですか？」

「すみません。でも、これだけはお願ひなんです」

「……わ、わかった」

剣幕という程でもないが少女の頑なな表情に水織は頷くことしか出来なかつた。……しかし、何故誰にも話してはいけないのだろうか。

「その代わり、もしも黙つていてくれるなら、ちゅうとした手品を見せてあげますよ」

「手品?」

少女がぐるりと踵を返し、一枚の葉を指でちゅんと摘まんでみせた。

まだ紅葉しきれていない青いモミジの葉だった。

「えつと……それ、普通の葉っぱだね」

「はい。でも、私がいつやつて手で^{かざ}齧^{かじ}すと……ホラ」

千秋がそつと手を齧ると、摘まんでいた葉が一瞬にして真っ赤に染まった。

手を齧しただけで一瞬で葉が紅葉してしまった。こんな世にも珍しい現象を、水織はまじまじと見つめて。

「……もしかして、一瞬ですり替えた?」

水織の夢も希望の欠片もない言葉に、千秋の肩ががくんとずり落ちる。

「ち、違います! も、もう一回よく見てください! ほら、この葉っぱをじゅりやつて……はー!」

先ほどと同じように、手にしていた葉っぱが一瞬で紅に染まる。水織は何度も田を瞬いて葉っぱを注視してみたが、どう見てもそこにはじゅりに落ちている落ち葉とすり替えたよじにしか見えなかつた。

「ははは。そんなんじゃ手品つて言わなこよ。手品つて言つのは種も仕掛けもないものでしょ？」

「種も仕掛けもありませんよ。じゃあ、試しに水織君が一枚葉っぱを持つてきてくださいよ」

「はいはーいっと。んじゃ……これとか」

水織が手にしたのはまだ色付いていない緑色のイチヨウの葉。千秋は造作もないと言わんばかりに（そんなに無い）胸を張り同じように手で翳してみせる。

緑色のイチヨウはわっさの落ち葉と同じく千秋の手の中で鮮やかな黄色に染まっていた。

「す、す！」

「うふふ。どうですか、驚きましたか？」

得意氣な千秋の様子を見て、水織は苦笑いを浮かべた。

「う、ううんと……何か地味な手品だね」

「グサツ！ と何かが刺さる鋭い音が聞こえたようなそういうよくな。うな。

千秋はみるみるうちに青ざめ、涙を浮かべ、そのままなじ崩しこその場でへたりと頃垂れてしまった。

「…………いいんです。地味なのは重々承知してるんです。どうせ私の力なんてそんなものです……う、うう……」「

「わ、わー！？ な、何も泣くことないじゃんか！ えと、ほら、その……凄かつたよ！ ビックリしたよー！」

千秋を泣かせまいと水織は必死のフオロー。

出会つた間もない女の子を泣かしてしまつたら天国のお爺ちゃんに怒られてしまつ。

凄い！とか、天才！とか、思いつく限りの世辞を連発していくうちに、千秋の体がゆっくりと起き上がり、やがて満面の笑みになつて戻ってきた。

「ほ、ホントに私凄いですか？ 水織君驚きましたか？ なら、嬉しいです！」

「う、うん」

まさかこの歳で氣を遣うだなんて、普通の小学生なら考えもしないだろ？

と、水織が心の隅でため息をついていると、千秋が突然駆け出した。

「あれ？ 千秋ちゃん、どうしたの？」

「こっち、来てください！ もつと凄いもの、見せてあげますよー。」

いつの間にか声だけしか聞こえてなくて、水織は少し慌てながら駆け出す。

すると千秋は別の木の根元で水織が来るのを待っていた。

それはまだほとんど緑色の葉ばかりの大きなモミジの木だった。

「もつと凄いことつて、何？」

「ふふ、水織君だけの特別サービスですッ」

そう言つて千秋はくるりとその場で回り、モミジの木正面で神様にでも祈るように両手をギュッと握りしめ瞳を閉じる。

何をしているのか気になつた水織が千秋の方に回り込もうとした瞬間、突然神社に轟々と唸りを上げるような激しい風が吹き荒れた。

「う、うわー？ ち、千秋ちゃん！」

一瞬でも気を抜いたらあつという間に吹き飛ばされてしまうそ
な嵐にも似た暴風。

今にも水織は吹き飛ばされそうなのに、風が吹き荒れる中で千秋
は黙々と祈りを捧げている。

このままじゃ千秋も危ない。吹き飛ばされなかつたとしても、木
々の枝が折れて飛んでくる危険性だつてある。水織は荒れ狂う風の
中でどうにか手を伸ばし、千秋の方へと近づけていく。

そして水織の手が肩に触れたのと同時に、ピタリと風が収まつた。

「……はあッ、ビックリした。千秋ちゃん、大丈夫？」

「はい、大丈夫ですよ。それより、どうですか？」

あれほど激しい風が吹き荒れていたというのに、千秋は髪の毛一
本も乱れていない。

どういふことなのかと疑問に思つ水織に、千秋は不意にこんなこ
とを聞いてきた。

「どうして……何が？」

「じゃあ……」

「な……ッ！」

ちよんちよん、と千秋が指で上を示す。

指示の通りに水織が首を斜めに上げて

そして言葉を失つた。

「な……ッ！」

水織の頭上に広がる、深紅の紅葉。

今さつき見ていた時はほぼ全てが緑色のままだつたというのに、

視界全てが紅に染まっていた。

啞然とした水織が千秋の方を見つめる。

「うふふ。これが私の本気です」

水織はただただ呆然と少女を見つめ、少女は無邪気な笑みを浮かべていた。

第一十一話 秘密の友達（後書き）

水織君の過去話。

あと1話2話程度続く予定。

一応今作のキーポイントであり、オリジナル設定が最も濃い部分になります。

それと、少し遅れてしませんね；

最後の一文がどうも納得いかなかつたもので調整に時間が掛かってしました。

今も若干引っ掛かっております……；

そして次回は30日更新予定。

では、待て次回。

第一二三話 解れた絆

旅館から望む赤月山が深紅に染まり、千秋と出会いてからあつと
いう間に数週間が過ぎていった。

凜と澄んだ空気が包む神社の境内。

ジャンパーのポケットに冷えた両手を突っ込みながら水織は千秋
を待っていた。

「水織君」

「あ、千秋ちゃん！」

着物とスカートを足して割つた格好の千秋が音も無く水織の背後
から現れる。

水織は一瞬ドキッとしたが、見慣れた栗色の髪を見つけると自然
と笑みがこぼれた。

「こんにちは、水織君」

「！」「こんにちは！　えへへ」

あの手品を見せられて以来、水織はすっかり千秋の虜となつてい
た。

手を翳せば落ち葉は皆赤く染まり、風を起こせば木々が一瞬で紅
になる。

そんな常人離れした力を目の当たりにすれば普通の人なら拝みひ
れ伏すことだろう。

しかし水織は純粋に千秋を尊敬し、憧れ、焦がれていた。

千秋はまさしく不思議な力を持つ女の子。

退屈な日常に飽き飽きしていた水織にとつてはこれ以上ない程最
高の刺激であり、越して来て最初に出来た友達だったということも

あつて大切な友人だつた。

水織はポケットから小さなお菓子を手に取ると千秋の手の平に乗せた。

「はい千秋ちゃん、今日も家から持つてきたよ」

「わあ、ありがとう！ 水織君の持つてくるお菓子いつも楽しみにしてるんだ」

そう言つて包み紙を剥がして菓子を頬張る姿は何とも微笑ましくて、見ているこっちまで幸せな気持ちになるような気がする。

水織からしてみれば普通のお菓子なのだが、千秋にとつては物珍しいものらしく水織が菓子をくれるまでは一度も食べたことがなかつたといつ。

神社の家だとそういうことに厳しいのだろうか。水織は子供心ながら勝手にそう解釈していた。

菓子を食べ終えた千秋が砂糖のついた指を舐めながら水織に向き直る。

「そうだ、いつもご馳走してばかりでは悪いですし、今日は私が水織君に何か御馳走しますよ」

「え？ 千秋ちゃんがご馳走？ いいの？」

「はい。じゃあ早速落ち葉を集めましょうか」

「……落ち葉？」

言つたが否や、千秋は蔵に立て掛けた簾で辺りの落ち葉をせつせと集めていく。

その速さは相当なもので、水織が何か手伝おうと手を伸ばした時には既に落ち葉を集め終わつていて、次いで紙袋と古新聞を取り出す。

何を作るのか見当がついた水織は慌てて千秋に声をかける。

「だ、ダメだよ。子供だけで焼き芋なんてさ」

「あれ？ 焼き芋つてばれちゃつてました？ でも美味しいですよ
ね焼き芋」

「うん、そりゃオレも好きだけど……つて違う違う… 子供だけで
焚火とかやつちゃダメだつて！ 危ないよ」

「大丈夫大丈夫。心配しないでくださいな」

水織の制止も聞かず、千秋は落ち葉を山積みにすると新聞紙に包^{くる}んださつまいもを放り込み火を点ける。

乾いた空氣の中、落ち葉の山はあつという間に勢いを増して燃え
上がる。

マッチの小さな炎はまたたく間に大きな炎となつて、弾けた火の
粉が水織の鼻先をかすめる。

「わっちち。千秋ちゃん危ないって。こんなとこ誰かに見られたら
怒られちゃうよ」

「ふふ。水織君は意外と臆病なんですね」

「そ、そうじやなくてさ……」

マイペース過ぎる千秋にやきもきしつつ、何度も何度も周囲を確かめる水織。

今のところこの神社には水織たちの他には誰もいないのだが、焚火の黒い煙がどんどん上つていくことが心に引っ掛かつた。

これじゃ神社で焚火してますよとアピールしているのと同じだ。

「はい、出来上がりましたよ」

そんな水織の不安を他所に、千秋は焚火の中から新聞紙の塊を取り出していく。しかも素手で。水織は火傷してるんじゃないかと心

配して手を取つてみたが、白く滑らかな手の平には傷一つついてい
ない。

「 もう、心配し過ぎです。私はそんなに弱い女の子じゃありません
よ」

「 だ、だけど……」

心配し過ぎだせいで水織は引きつったような笑みを浮かべて頷いた。

千秋が丁寧に新聞を剥がしていくと、ほんのり焦げ目のついた表面が何とも香ばしい香りを漂わせてくる。無意識のうちに腹の音がくうと情けなく鳴いた。

「 じゃ、私と水織君とで一個ずつですよ」

「 うん、ありがとうございます。でも、まだたくさん入ってるみたいだけど……？」

「 それは私の分です

「 へ、へえ……」

そんなに食べて大丈夫なのだろうか。

焼き芋つていつぱい食べるとおならが止まらなくなるとかで女の子は嫌つてゐるんじゃないのか。少なくとも姉はそれが恥ずかしくて人前じゃ食べない。

出来たての焼き芋は輝くような黄金色をしていて、香ばしさと優しい甘みが絶妙で今まで食べた焼き芋の中で間違いなく一番美味しかった。

思わずもう一つ食べようと手を伸ばしたら、既に新聞紙の塊は影も形も見当たらぬ。

「 ……もう食べちゃったの？」

「ええ。食欲の秋ですし、私焼き芋大好きですから」

いくら大好物でも流石に速過ぎやしないか。

しかもそんなに食べたのならお腹がいっぱいで動きづらいだろうはずなのに、千秋は焼き芋食べてご機嫌なのが軽くステップを踏んでくるりと小さく踊つて見せた。

「うふふ。水織君と一緒に菓子食べて焼き芋も食べられて、私幸せです」

「幸せ？ そんなオーバーな」

からかうようにして笑いかけると、千秋は急に真顔になつて水織を見つめ返して来た。

吸い込まれそうな黒の瞳に漂う歳に不相応な色香、水織は思わず目を丸くして固まつてしまふ。

「大袈裟ですか？ でも、私は本当に幸せです。いつもやつてお友達が出来て、一緒に遊べるつてすゞしく素敵なことだと思いますもの」「そう……なのかなあ？」

「ふふ。水織君も、もっと大きくなつたらわかると思しますよ」

それはまるで、自分が水織よりもずっと大人であるよと誇示しているような言い方。

水織はほんの少しムッとしたが、神社の厳しい教えの中で生きている彼女の方が水織よりもずっと大人なのだろう。

「さ、そろそろ遊びませんか？ 今日は何して遊びます？」

「じゃあ、また落ち葉を真っ赤にするやつやってよー。あれ、すつごく面白いじゃん」

「ふふ。承知しました。でも、水織君だけの秘密ですよ？」

境内の裏手に向かつて走り出す千秋の後ろ姿を追いかける。ずっと、千秋とこんな風に一緒に遊べたらいいなと純粋に思つていた。

なのに、あの日水織は……

・・・

それから数日後、空は今にも压し掛かってきそうなほど陰鬱で大きな灰色の雲が占めていた。

いつもの時間よりも遅くなってしまった水織は神社に向かつて大急ぎで駆けていた。

この日に限つて実家の手伝いを強いられたため出かけるのが遅くなってしまった。その侘びと言つのも何だが今日はいつもより多く菓子を貰えたため全部ポケットに突っ込んで旅館を飛び出した。

千秋はまた喜んでくれるだろうか。

こんなちやちな菓子でも、千秋は美味しい美味しいと幸せそうな笑顔を水織に返してくれるのだろうか。

「千秋ちゃん……ん？」

鳥居をぐぐり境内まで辿りつくと、冷たい秋風が吹いているだけでそこには誰もいなかつた。

いつもなら水織が到着と同時に姿を現すか、千秋が出迎えてくれるはずなのだが千秋の姿は見当たらない。

水織が遅かつたせいで機嫌を損ねてしまったのだろうか。……いや、前にも同じように遅れた時があつたがその時はちゃんと待つてくれた。もしかして今日は遊びない日だったのだろうか。

「……やめて！」

境内の裏手から小さな悲鳴が聞こえ水織が振り返る。声は物置として使われている蔵のある場所から聞こえてきた。

水織はなるべく音を立てないよう、しかし素早く向かうと顔だけ覗かせて様子を探つた。

「な……！」

蔵の前で、千秋が見知らぬ少年たちに囲まれていた。

見た目は水織や千秋よりも頭一つ分大きな子たちで恐らく学校の上級生だろう。少年たちに囲まれている千秋の様子は不明だが、その声は震え今にも泣き出しそうだつた。

少年たちは千秋に向かつて何か言葉を浴びせ続けている。語氣は荒く、それが暴言だと気づくのに難くない。水織は一瞬飛び出そうと身構え、そして足が動かないことに気づき足元に目をやる。

「……ツ！」

膝頭が揺れ、足が根を張つたかのようにぴたりと動かない。

訳がわからず水織は足を叩くが、叩いた感触がわからなくなるほどに水織の両足は麻痺していく。

「や、やめ……！」

助けるために叫ぼうとするが今度は喉が思うように言つことを聞いてくれない。

かすれた声だけが虚しく漏れ、しかしその声も風にかき消されてしまつほど小さく弱い。

何度も、何度も水織は叫ぼうとしたが、声にならない。

心の中では必死に叫んでいたのに、どうして声に出ない。そこで

水織は自分の体が震えていることに気がついた。

「え……？」

手も、足も、そして心までもが震えている。そしてそれは、圧倒的な恐怖感からだった。

細枝のような自分の腕。千秋と大差ない身長。

対して少年たちは水織よりもずっと大きく、太刀打ちできる自信など皆無。

そんな自分が出ていても何の役にも立たない。いやむしろ、千秋の前で無様な格好を晒してしまうことになる。

水織が勝てる見込みなど微塵もない。

勝てないという事実も然る事ながら、あらうことか水織は千秋の前で醜態を晒すことの方を強く恐れていた。

無意識のうちに、右足が後方に動く。

進もうとすれば拒むくせに、去ると決まった途端水織の足はすんなりと動いてみせた。

プライド
自尊心とでも言えば恰好がつくのだろうか。

子供ながら身勝手な、いや、子供故に身勝手な自尊心。

自分を守ろうとする水織の決断は早かつた。

そうだ、逃げよう。自分で助けられないのなら、家まで逃げて誰かに助けを求めればいい。

踵を返し、ここに来た時よりもさらに駆け足で走り出し山道を滑るよにして下っていく。

弱い自分ではどうにもならない。だから誰かに助けを求める。

水織は千秋を助けるためと決めつけながら山道を走った。

本当は違うくせに。

本当は傷付くことを恐れ、我が身可愛さに逃げ出したに過ぎない。

結局、水織は千秋を見捨てたのだ。

大切な友人と我が身の保身を天秤にかけ、自分の指で我が身の方に天秤を傾けた。

涙が、零れる。

そして頬を伝っていた涙が零れるのと、雨が降り出すのとが重なり赤月山に大粒の雨が降り出した。

旅館の戸を乱暴に開け放ち、接客をする両親の姿を見つけると構わず大声で叫んだ。

「お母さん！　お父さん！　助けて！　友達が、友達が……！」

水織の必死の形相に両親は驚き顔を見合わせていたがすぐに頷き合い、着物姿のまま水織に付き添い傘もささずに駆け出してくれた。山道を抜けて鳥居をくぐつたその先、蔵の前には千秋をいじめていた少年たちの姿も、千秋の姿も何もなかつた。

第一二三話 解れた絆（後書き）

ふと思つたのですが、東方キャラの両親ってどんな人だつたんですかね？

あいや、キャラの元ネタ云々とかでの話ではなく、ただ単純にいるとしたらどんな人なのかなあと唐突に思いました。

……特に深い意味は無いですよ？；

次回更新は12月3日です。

感想やご意見等、いつでもお待ちしております。
では、待て次回。

第一十四話 一田千秋

「それで……その子はどうなったの？」

月明かりに照らされた静葉の横顔が水織を見つめる。俯き、膝に顔を埋めるようにしながら水織が消え入りそうな声で呟いた。

「……その後は、知らない。父さんと母さんと一緒に神社に来たけど、その時は誰もいなかつたんだ」

・・・・

大急ぎで駆け付けたのに、神社には千秋どころか千秋をいじめていた少年の姿すら見当たらない。

それでも、両親は水織の言葉を信じ神社の周囲を一緒に探していくのだが、結局千秋たちの姿は見当たらなかつた。訳がわからなかつた。確かにこの目で千秋たちの姿を見たというのに、旅館と神社とを往復して戻つてきたら、千秋たちは忽然と姿を消している。

この短い時間に何があつたというのだろうか。水織は余計に不安が心に募り気が気でなくなつていた。

しかし後日、水織は移動教室の最中に千秋をいじめていた少年たちを見かけた。案の定、二つ上の上級生だつた。

この時ばかりは友人と一緒だったということもあってすんなりと声をかけられたのだが、少年たちに話を聞くと思いもよらない答えが返ってきた。

「神社？ あんな何にもねえ場所に行くわけないだろ

「え……？」

その時、少年たちは同じメンバーで公園で遊んでいたという。千秋という少女も知らない一点張り。水織は何度も何度も訊いたが無駄だった。

おかしい。

放課後になつて千秋を探しに岡かけたが、神社には入どころか鴉の一匹さえ見当たらない。

「何で……？　だつてこゝで、千秋ちゃんがアイツらに囲まれてて、それで……そうだ」

千秋はここの神社の子だと言つていた。ならば千秋の両親がいるはず。

水織は父にあの神社の神主さんの所在を訊ねると、父は少し困ったように首を傾げた。

「いや……あの神社はずいぶん前に神主さんが亡くなられてからほとんど手つかずの状態だからなあ」

「そ、そんなわけ……！」

父は困惑する水織の頭に手を置き、夢だつたんだよ、と優しく諭した。

夢？　千秋と一緒に遊んだり、お菓子をあげたりしていたのは、全部夢か幻だつた？

「……違うー」

父の腕を振り払い、前も見ずに走り出し姉にぶつかるのも構わず神社へと疾駆する。

違う。

あれは夢や幻なんかじゃない。

絶対に現実の出来事だ。

千秋が水織をほんの少しかつていてるだけで、本当は神社の何処かに隠れているに決まっている。

「千秋ちやーん！」

本殿正面に立ち、名を叫ぶ。声は秋風に吸い込まれ虚しく消えていく。

境内を駆け回り、物置として使われている蔵の中も、本殿下の小さな空洞も全て探し回つたが、千秋の姿は何処にもない。

「なん……で……？」

振り返り社を仰ぐ。

朽ち果てた社が、ただそこに在るだけで

・・・

全てを話し終えると、水織は突然バッと顔をあげて立ち上がった。

「う、ゴメンな。こんなつまんない話してさ」

微かに水織の声が震えている。しかしそれを見せまいと、水織は静葉に最大限出来る限りの笑顔を作つて見せた。

「無駄話ばつかしてちゃいけないな。紫さん待たせてるんだし、早いとこ戻らないと」

衣服に付いた草や土をそそくさと叩いて落とすと、水織はまた闇

の中へと駆けて行つてしまつた。

ポツンと残された静葉が、何気なく空を見上げる。月は中天を過ぎ去り、やがて彼方の空が白み始めている。

「……千秋ちゃん、か」

一体どんな人物なのだろうか。

現世にいながら“能力”を有し、水織と過ごしていたといふ謎の少女。

果たして本当に、人間だつたのだろうか。
もしかしたら、彼女は……

「もしかしたら……もしかするのかも」

彼女は私たちと同じ、神様だつたのかかもしれない。
しかし不思議なこともあるものだ。

紅葉を自在に操り焼き芋が好物な神様だなんて、まるで私たち双子とそつくりではないか。

・・・・

「それで、能力の特訓とやらはどうなつたの？」

翌朝、事務室の机にべつたりと突つ伏す水織に穂子が声をかけた。げつそりとやせ細つた顔に生氣は無く、息を吹きかけたら今にも死んでしまいそうなほどに見えた。

「めっちゃ怒られて、鬼軍曹並みの特訓受けて、死にそう……」

「あ、あはは……」

「だけどああいう美人に叱られるのも悪くはないかも」

「……水織、どうせなら朝風呂浴びてきたり。お湯なら準備してあるから」

「む……サンキュー」

よろよろと立ち上がり事務室のドアに手をかけ、不意に水織は振り返つて穂子を見る。

「ん？ どうしたの水織？」

「いや、ずいぶんと用意がいいなと思つてさ。それに、オレボイラーの動かし方教えたつけ？」

「にとりから軽く聞いておいたのよ。万が一、水織が動けなくなつたら大変でしょ」

「そうか」

今度こそ浴場に向かおうとして、再び足を止め振り返る。穂子が怪訝そうな顔をしてこちらを見返す

「どうかしたの？ お湯冷めちゃうよ」

「……ありがとな、穂子」

疲れのせいでとろんとした水織の優しげな瞳に見つめられ、穂子の頬にカツと朱が刺す。

「は、早く行きなさいってば！ その後はこつものよつて仕事してもらつんだからね」

事務室から追い出すように水織を押し出し乱暴にドアを閉める。水織が出ていった後、動悸の激しくなった自分の胸に手を当て深呼吸をする。

「わ、私も帳簿書がないと。えつと、えつと……」

しかし、帳簿は今しがた書きえ終えたばかりであった。

・・・

「ツ、はあ～～～～～～～～」

真っ白な湯氣の立むこめる浴槽のど真ん中、肺の中の痰をすべて吐き出すような勢いで水織が呆けたようにため息をつく。前回は気分を吹き飛ばすために飛び込んでしまったが、今日はゆつたりと肩まで浸かる本来の入浴スタイル。

田の前にはがらんどうとした浴場。振り返れば妖怪の山に紅葉が舞い散る風情溢れるペンキ絵。

この広い空間を自分が独占するといつ何とも贅沢な時間。

「……何か、落ち着く

乳白色の湯が水織の体を優しく包み、特訓や夢で疲弊した水織の心を癒していく。

体の芯から温まり、やらやらと揺れる湯の中で水織の意識まで揺らいでいく。

このまま揺られていると、だんだん、ねむ……く……

「水織くーん！ 湯加減どうですか～？」

「……うはわ！？ え？ あ、し、静葉の声？」

何処からともなく響いてきた静葉の声に水織はハッと我に帰る。危うくそのまま湯船の中に沈むところだった。辺りを見まわしたが、もちろん静葉の姿は無い。

「ふふふ。今、私は何処にいるでしょ～か？」

「え？ えっと……ボイラー室？」

よくよく考えれば、ボイラー室のダクトは浴場に繋がつていて声が聞こえるのだから逆もまた然り。会話が出来ているのは不思議ではない。

「当たり～。ボイラー室つて凄いんだね。そつちの声、ちゃんと聞こえるよ」

「う、うん……す、す」「によな……ははは」

今ボイラー室にいるのが穰子でなくてよかつた。

もし穰子にこのことがばれたら、せっかくのボイラー室お楽しみ機能が修正されてしまうところだ。だがそれとは別に、静葉にボイラー室を任せて大丈夫なのかという疑問が浮かび上がる。

「……静葉、お前操作できるのか？」

「うん、出来るよ。さつき穰子から聞いたから」

「そ、そうか」

それでも若干不安が残る。……突然沸騰したりしないだろうな。

「あのさ、水織君」

「何だ？」

ダクト越しに聞こえる静葉の声のトーンは低く、耳を澄ませないと聞こえないほどだった。

壁に背を預け、静葉の言葉を待つ。数十秒ほど間を開けてから、やがて声が響く。

「や、やつぱり何でもないよ。仮にしないで」

「……そつか？ なら、こいけどや」

「うん。じゃ、しゅりくつ。でも、今日もお仕事あるからあんまり
気を抜いたらダメだよ？」

「わかつてるつて」

そうしてしばらくして静葉の声が聞こえなくなつた。恐らくボイ
ラー室を後にしたのだろう。

再び一人となつた水織はのんびりとペンキ絵を眺めながら、これ
からすべきことを考える。

田下、すべれことは一つ。

「一つは新しいペンキ絵を描くことか。それとも一つせ……」
いい頃だし。それとも一つせ……」

昨日の魔理沙の言葉を思い出す。

もう一つやるべきこと、それはこの秋の湯に新たな施設を建設す
ること。

「サウナだな。上手くこなせばもっとお客さんが増えるかも……あ」

そして水織はあることに気づく。

最初はあまり気乗りがしなかつたのに、今では秋の湯の経営にす
っかり夢中になつてこむところだ。

「……ううん、やっぱつ魁の子は魁つてことなのかなあ

氣恥ずかしさを紛らわすため、水織は水面でぶくぶくと泡を立て
ながら体を沈めた。

第一十四話　一田千秋（後書き）

あつという間に12月。今年最後の月となりました。
読者の皆々様方、いかがお過ごしでしょうか。

秋もすっかり過ぎ去り、所によつては雪が降り始める季節となりましたが、我が故郷サイレントヒルでは雪なんぞ滅多に降りませぬ。一度でいいから、一面銀世界の朝を迎えてみたいものです。
……新潟の友人にそんなコトを言つたら半眼で睨まれましたけど；

さて、過去のお話も一段落し今後やるべきことが決まりました。
これから水織君たむけじ期待くださいませませ。

次話は12月6日を予定しております。

それと評価ポイント追加してくださいた方、ありがとうございますといました。

感想等、お待ちします。

長々とあとがきしちゃいましたがこれにて。
では、待て次回。

PS オリジナル、始めました。

そちらの方も読んでいただければ幸いです。

第一十五話 女教師と忘れ傘

結局、水織はその後はずっとのんびりと過ごしていた。

入浴後は牛乳を飲み、その後は特にすることも無く自室で寝転がつたり、洗濯物干したりまた昼寝したり。それはまるで、宿題の無い冬休みを過ごしているような気持ちだった。つまり自由であり、退屈である。

西の彼方に夕日が沈んだ頃、水織がカウンターに顔を出すと、何やら一人の女性が静葉と話をしているのを見つけた。

薄く青みを帯びたような長い銀髪に古風なロングスカート。何となく教鞭が似合いそうな後ろ姿だと思いながら向かうと静葉が水織に気づき、女性もまた静葉に釣られて同じように振り向いた。

「んお……ッ！？」

涼やかな眼差しに、慈愛と知性を兼ね備えたかのように、クール且つエレガントな姿容。

それはまさしく幻想郷版見返り美人図と言つたところか。水織は心根から震えあがり、一瞬で頬を染めあげてしまう。

「……？　どうした、そんなに私の顔をじろじろ見て
「や、ええええと、その……そのッ！」

涼やかな麗容と違わぬほどに、まるで清水のように綺麗な聲音で女性が言つ。

水織の脳内がほんの数秒でオーバーヒートし思考が一切機能しなくなってしまう。マズイ。このままだと勢いに任せて口クでもない事を口走ってしまいそうな気がする。

例えば

「結婚してくださいッ！」

「断る」

水織の心が、ビルの解体作業の如き勢いで根元から崩壊していく。膝をつき、血の涙を流さんばかりの勢いでおいおいと泣き崩れる水織に、当然と言えば当然なのが女性は訝しげるような視線を送る。

「……何だこの変態は。こんなヤツと一緒に銭湯経営して大丈夫なのか」

「えと、そんなに悪い人じゃないんですよ？……たぶん」

「違う……そんなことを、言いたいんじゃないくて……こんな……」

「あれ？ 何してんの水織。お腹減つたら大学芋作つてあげよっか？」

「……何故大学芋？」

ようよりと立ち上がり、静葉と女性を交互に見やつてから水織が訊ねる。

「えっと……それで、この人は？」

「慧音先生。寺子屋で先生をやつてるんだよ」

「寺子屋……」

幻想郷で言うところの学校と言つことか。教鞭が似合いそうだという水織の目測は正しかつたらしい。

慧音先生と呼ばれた女性はスッと手を差し伸べ水織に握手を求める。

「かみしらさわけいね上白沢慧音だ。紹介に預かつた通りこの里で子供たちに学問を教

えているよ

「ど、どひむ。草津水織です」

それにしても、寺子屋の先生が静葉と何を話していたのだろうか。水織が訊ねようとするとき静葉の方から先に口を開いた。

「あのね水織君。今度、慧音先生の授業でここを貸してほしいんだつて」

「はあ？ 錢湯で授業するつてのか？ ……ハツ！？ つ、つまりそれつて慧音先生と保健体育的な」がばあツー？」

まだ最後まで言い切つていないので、頭蓋を碎くような凄まじい衝撃が水織の脳天に襲いかかり地べたに叩きつけられる。穢子の所為かと見上ると、額から煙をあげる慧音の姿があった。

「ば、馬鹿者！ そんなことわ、わわ私が教えるわけなかろう！？」

「そ……それ以外に、いったい何に使うんですか……」

「ペンキ絵だつてさ」

「……ペンキ絵？」

慧音がこほんと咳払いして氣を取り直して話し始める。

「以前この銭湯を利用した時にあの絵を見て感動してな。是非とも美術の授業に使いたいと思つてな」

「ペンキ絵を美術の授業に……へえ、そりや画期的と言つか何と言うか」

実際、元いた世界ではペンキ絵はある種の芸術的価値はあった。ペンキ絵と言うその性質上売り買いなどはされないのだが、博物館などで飾られてくるペンキ絵がごく僅かだが存在していることもあ

る。

しかし、あの絵は水織と霖之助とで描いた絵でそういうた価値はほとんど無いのだが、いつやって誰かに感動されるとやはり嬉しいものである。

「……ん？ 子供たちと、ペンキ絵……か

「水織君、どうかしたの？」

ふとあることを思いつき、水織は思考する。

いつも、子供たちにペンキ絵を描かせてみるのはどうだろうか。見るだけよりも触れた方が勉強になるだろうし、子供側としては絵を眺めているだけと言つのも味気なくつまらないものではないだろうか。

「あの、慧音先生。よかつたら寺子屋の生徒さんに絵を描かせてみたらどうですか？」

「え……？ あんな大きな絵をか？」

突然の水織の提案に慧音は驚き目を丸くする。

キャンバスが大きい分、生徒たちへの危険性が高まる可能性もある。だが、教師側としても生徒側としても大きなメリットにはならないだろうか。

それを考慮しながら水織は提案したのだが、慧音は腕を組みやや難しそうな顔で返答に困っている様子。

「……私としてはその申し出は嬉しい。だが、ペンキ絵といつもの銭湯の象徴なのだろう？ それを生徒たちに描かせて大丈夫だろうか」

「そろそろ絵を新しくしたいと思つてたし、どうせならちょうどいいかなつて思つたんですよ。ただ、やっぱりテーマ的なものがある

と嬉しいです。流石に落書きはマズイし

「ふふ、確かにな。ふむ……よしわかった。君の申し出を聞けよ。ペンキ絵のデザインは生徒たちに考へさせておく」といふよ」

「うん、了解です」

話が綺麗にまとまり、水織のアイディアに静葉も「ハーハーハ笑顔で頷く。

「へえ、寺子屋の子たちの絵がペンキ絵になるのかあ。なんだか楽しさだねえ」

「用意が出来たらまた連絡して貰ください。道具とかはハーハーハ用意しますんで」

「助かるよ。子供たちも喜んでくれるだら」

「ハーハーハと頷く慧音の顔はハーハ満悦。美人に協力するのはいいことである。

さて、と慧音はカウンターに置いてあつた小さな桶に手を伸ばす。どうやら彼女の私物のようであるが。

「では、話も一段落ついたし風呂を使わせてもいい

「まいどあり~。女湯は左手ですよ」

「つむ、ありがとう」

「慧音先生、よければオレがお背中流しちゃあああッ!~」

「お前はさつさとボイラー室行け!~」

しかしこれで新しいペンキ絵に関しては一段落ついた。

首筋の激痛に悶絶しながら、水織は薄れゆく意識の片隅でサウナのことを考えていた。

・・・

翌日、幻想郷は雨。

秋の雨は心無し寒く感じる。こんな日は秋の湯が忙しそうだと思
いながら水織は出かける支度をしていた。

動きを阻害しないように腰に付けたウエストポーチに、お気に入
りのジャンパー。玄関に立て掛けたスコップを取ると玄関を
出ていく。

秋の湯の正面に唐傘をさした穂子の姿があった。

「おはよ、水織」

「おう穂子。今日は案内頼むぜ」

「いいよ。妖怪の山なら私の庭みたいなものだし」

今日、穂子に妖怪の山への案内を頼んだのは他でもないサウナのことだ。

前に世話になつたにとりにサウナのことを話そうと思ったのだが、
水織はにとりの家への道がわからなかつた。そこで穂子に案内を頼
んだのである。

「……何か、いつもより芋の匂いがきつくなかったか？」

「え？ そ、そんなことないさ。それよりもうして私に案内を頼ん
だの？ ほら、お姉ちゃんだけ妖怪の山の道わかるんだし」

「ん？ 穂子に頼んだ理由？」

穂子の何か期待しているような眼差しに、水織は正直に答える。

「……たまたま田の前を通りかかつたからだな。それ以外には特に
何も」

「……あつそ」

「な、何で不機嫌そうになつてんだ？」

「不機嫌じやないわよ。それよりにとりの所いくんでしょ？ 早く
しなさいよ」

「わ、わかつたつて」

しかし、怒つている理由がさっぱりわからない。

水織は自分の傘をさして大股で歩く穂子の背中を追いかけた。人里の北門から抜けて妖怪の山を田指し平坦な道をまっすぐ歩いていく。

天気が悪いせいもあつて、いつもは正面に見えているはずの山が薄靄に包まれていてよく見えない。

そのまま歩き続けて山道入り口が見えてきたところで足を止め穂子が振り返る。

「どうした？」

「水織、ちゃんとついてきてよ？ 私たちこの山の住人だからいいけど、天狗たちは排他的で外部からの侵入者を許さないんだ」

「はいたてき……って何だ？」

「えつと……と、とにかく危ないの。だからちゃんと私についてきて、いい？」

「り、了解」

穂子の妙な剣幕に圧され思わずゴクリ、と唾を飲み込む。

雨降りの妖怪の山は湿氣と冷気が漂っていて、不気味さと寒さとで体が芯から震えてくる。そんなことを考えながら踏み出し、未だ残る紅葉のアーチをくぐつて進んでいく。ふと、水織の元にはらり、と小さなモミジが落ちてきたので掴んでみると、端の方が既に色が失せて枯れていた。確かに寒くなつてはきたがまだ秋が終わるには早いような気もする。ただ単にこのモミジが紅葉を終えただけだろうか。

「水織、何してんの？」 こちだよ

「あ、ああはいはい。すぐ行く……って？」

水織が穂子の呼びかけに気づきハツと顔をあげると、大きな木々が広がるだけで穂子の姿が見えない。右を見ても、大木。左を見ても、同じような大木。前後左右、何処を見ても同じような木々が延々広がっているだけだった。

「お、おい？ 穂子？ みのり」 おツー

水織の声が山中に虚しく響く。返事は無く、ただただ木々の向こう側へ吸い込まれていく。

「……おこおい、まさかはぐれたつてか。何やつてんだ穂子のヤツ」

自分の所為とは微塵も思わない水織。

すると、空から降り注がれる雲が幾分強くなつたような気がして、堪らず木の根元へと駆け込む。

薄暗い山の中で一人、水織は灰色の空を見上げ、ふとその先に小さな影を見つけた。

「……何だ、あれ？」

曇天の向こう側から、傘をさした少女がふわりふわりと下りてくる。

紫色の、まるで茄子を開いたかのような若干センスの悪い傘の少女はやがて水織の前に着地し、傘でおつと顔を覆い隠す。

「え、えつと誰……？」

「つりめしやー」

何事かと水織が声をかけよひと手を伸ばした瞬間、少女はサッと傘から顔を出してそんなことを叫ぶ。

「ああ、アレだ。赤ちゃんをあやす、こないいぱあ！ に似ていろ。」

不思議なことに少女は左右で瞳の色が異なり、左目が赤、右目が水色である。所謂オッドアイといつものだ。水織も見るのは初めてである。

冷静に少女を観察してみると、舌を出しつまなしの少女が氣まずそうにうるさいに皿配せしていく。

「……何だ？」

「こや、あの……ひりぬき……やめ……」

しかし、そんなこと言われてどう反応したらいいのか。確かに雨が降りしきる妖怪の山は不気味だが、こんな真昼間にそんなこと言われても困る。水織が若干冷めたような視線で返した。

「な、何よ。あなた普通の人間でしょ？ 田の前で妖怪が出たのに、ひつとも驚いてくれないの？」

「こや、えと……わーす」「こー……」

「……しくしく。私、本当に人を驚かせる力あるのかなあ」

何だか「ジヤビュ」を感じる。前にいた感覚のやり取りをしたよつな……

オッドアイの少女はためめめと泣きだし、その場でじょんじょんとしゃがみ込んでしまつ。

「お、おこじんなとじで座つたら……シー？」

パンツ濡れるわ、と注意しようとした瞬間、少女の傘にぎゅうつと大きな田玉が一つと長い舌が飛び出て水織は思わず飛び退く。少女の傘はあるで意思を持つていてるかのように田玉と舌をぐるりと動かし、一つ田玉は水織を睨む。

唐傘お化け、というヤツだ。水織もよく知ってる、一本足で歩く古びた傘の付喪神。

すると、少女はやりと立ち上がり、口の端をつり上げ不気味な笑みを浮かべる。

……だが、元が可愛いのでそこまで不気味ではない。むしろちょっと可愛い。

無論、水織の好みではないのだが。

「つふふ。」うなつたら弾幕で脅かしてやるんだから。覚悟しなさい！」

「また弾幕勝負……か。女の子と戦うのは嫌なんだけど……」

かと言つて尻尾を巻いて逃げるわけにもいかず、水織はスコップを構え対峙する。

しかし、紫との特訓の成果を試すにはちよつといいかもしない。スコップを上段に構え、内に眠る能力を呼び起^{ちから}すとオッドアイの少女を見据える。

「私は多々良ただらじがわ小傘！　ござ尋常に、慄け！」

少女の放つ七色の光弾を前にし、水織は姿勢を低く構え少女の弾幕の中を掻い潜るようにして駆け出していく。

第一十五話 女教師と忘れ傘（後書き）

何気に小傘を書くのは初めてだつたりする。
……ちよつとコレジヤナイ感がするけど気にしない。

そして何度も微妙な地の文。
精進したい。

次回更新は12月9日予定。

オリジナルは予定より少し遅れて、今週の金曜日辺りになります。
では、待て次回。

第一十六話 満身創痍の相合傘

「もう！ 水織つたら、案の定ちょっと田を離した隙に迷子になつてゐるじゃない！」

妖怪の山上空、灰色の空から落ちる雪に打たれながら穂子が腹立たしげに咳く。

ほんの一瞬、本当に一瞬だけ穂子が田を離した瞬間、水織の姿は影も形も無くなっていた。

穂子は慌てて飛び上がり空から水織の姿を探す。雨降りの山は薄靄もやをまとつていて視界が悪く、人を探すのは困難を極めた。焦りに心を駆られながら、穂子は眼下の景色を隅から隅までくまなく探していく。

「……何かあつたら、私の責任だ」

手にした傘の骨が軋むのも構わず、穂子は速度を上げた。

・・・・

「んの……」

田の前から飛来する弾幕を、手にしたスコップの切つ先部分で器用に切り裂く。

小傘は一つ田の傘をくるりくるりと、まるで催眠術でもかけていふかのように回しながら七色に輝く光弾を四方八方にばら撒いてくる。

不規則に飛び交う弾幕の中で水織は自分に向かってくる光弾を切つては伏せ、それが出来ないものは横つ跳びで回避したりスコップ

で受け止めたりする。

しかし、自分からは決して攻撃しなかつた。

「ほりッ、ほりッ！」

遠慮無しに襲いかかる弾幕に舌を巻く。

このまま受け続けていては水織の方が圧倒的に不利だ。木の背後に回つて身を隠すと、ウエストポーチに手を伸ばして小さな札を手に取る。

それは紫との特訓の成果であり、水織お手製で初の術符

スペル・カード

大木が軋む音を聞きながらスコップの先端に術符を張り付ける。ギシ、と一際大きな音が真後ろから響き、やがて大木が爆ぜ水織を吹き飛ばしてしまう。

「うふふ、このまま勢いで勝っちゃうよー。」

「やつは問屋が何とやらッ！」

白煙の向こうから踊りかかり、水織は術符のついたスコップを地面に突き立て、そして詠唱する。

やり方は紫から教わった通り。使う技を頭の中に意識し、内なる力の高まりを術符に一気に注ぎこむ。

「これが、オレの術符だあッ！」

スコップを突き立てた地面が白く発光したのを確認し、水織はてこの原理で地面を持ち上げる。

隆起した地面が小傘の放つ光弾を全て弾きそのまま水織を守る巨 大な盾となる。

今の今まで平凡な人間だと思っていた少年が“能力”と思わしき力を使い、小傘は面喰つて驚く。

「な……！ 普通の人間じゃないの！？」

「盤符『ちやぶ台返し』。成功して助かつた」

「なら、私も！」

小傘は空中で大きく後退し、スカートのポケットから同様に小さな札一枚取り出す。

藍色の術符が手の中で踊り、煌びやかな光を生み出す。

「大輪『からかさ後光』」

その術符の名の通り、小傘の背後から後光のように光弾の雨が舞い起こり、水織目がけて一直線に突っ込んでくる。

水織は自分が掘り起こした盾に身を隠し弾幕をやり過ごうとしつて、ピシィ、と亀裂の入る音を耳にし戦慄した。

「やば……！」

水織が呻いた直後、盾は轟音を立てて派手に碎け散ってしまった。飛び散る破片と小傘の弾幕とが同時に襲いかかり、水織は成す術なく吹き飛ばされる。

そのまま大木に激突し、肺から空気が強引に吐き出される。

「が……はッ」

全身が軋むような激痛に呻き、苦悶の表情を浮かべる。

いくら不思議な能力があるとはいえ水織自身は至って普通の人間。靈夢や秋姉妹とは体质的に違うのだから受けるダメージは遥かに大きい。

初めて直撃した小傘の弾幕は想像以上に痛かつた。

「私の攻撃に驚いたかな？ ふふ」

「……ぐつつつ。驚いた驚いた。ついでに死にかけたよ」

「ふふふ。死んでもらっても構わないけど、死ぬ前に心を食べさせてもらわないとねえ」

小さく舌舐めずりする小傘の表情は、不気味なような可愛いやうな、何とも中途半端な顔をしている。

一応、彼女もルーミアと同じ妖怪なはずだが、……この世界の妖怪は総じて恐怖を感じないような気がする。

しかも今は、どちらかと言えば怖いというよりかは痛い。ほんの少し体を動かそつとするだけで体が悲鳴を上げる。

「……こつから、どうじょうか」

スコップを杖代わりにして立ち上がるが、膝ががくがくと震えてしまつていて使い物にならない。

こちらも応戦すればよかつたのだが、水織は決して女の子相手には手を出さないし、出したくない。

この性質上、水織の弾幕勝負は必然的に耐久勝負となってしまう。相手は専ら人ならざる者たちばかり。体力的にも技術的にも、全てが不利に回ってしまう。

だからこそ、水織はそれを少しでもカバーできるよう、防御や自衛に秀でた術符を思い描き創つたのだ。

ジャンパーのポケットから鈍色の術符を取り出し、先ほどと同じようにスコップに張り付けようとして 手を伸ばした瞬間、水織の手からスコップが弾かれた。

「うッ、わ ！」

「観念なさい。キミはこのまま大人しく私に食べられちやうのよ

「やば……スコップがないと…」

しかし、取りに行こうにも距離があり過ぎる。

絶体絶命のピンチ。悠然と空に漂う小傘の背後に、水織は再び何者かの影を見つける。

「アレは……」

「ハッタリのつもり？ そんなものに引っ掛かるわけ ふざや！？」

「水織！ 大丈夫！？」

新たに現れた人影の正体は穂子だった。

文字通り急転直下の勢いで飛び込んできた穂子は、小傘の脳天に見事着地し、そのまま落下速度も乗せて地面に叩きつける。激しく地面がめり込み、穂子に潰された小傘はぴくぴくと小刻みに震えていた。

穂子はそんな小傘を歯牙にもかけず、傷だらけの水織の元へと駆けつける。

「……おい。流石にやり過ぎじゃ」

「何言つてんの水織！ これでも足りないくらいだよ！ 水織、こんなにボロボロになつて……」

「弾幕勝負つて、見た目以上にかなりハードだよなあ……よくこれ遊びつて言えるよ」

「骨は……折れてないね。打撲とか、打ち身が酷い……」

「さ、触んなつて。余計に痛い……つつ」

「もう。じつとしてて」

穂子は水織の腕や腿の部分に手を当て、祈るよつとそつと瞳を閉じる。

陽光にも似た柔らかな光が水織を包みこむとその傷を少しづつ癒していく。

やがて光が消えると、身体の痛みが幾分か和らいだような気がした。

「応急処置だけど、これで少し歩けると思つ」

「ありがとな、穂子」

「ううん。水織が怪我したのは私が田を離した所為だから……」

「それなら、オレだつて責任が……」

「私を無視するなああああッ！？」

地べたに沈んでいた小傘が起き上がり、穂子と水織に向かつて無視し続けられた怒りを爆発させる。

頬を紅潮させ、その瞳には小さく涙が浮かんでいる。

「な、何よ何よ！　いきなり私を踏みつけて、しかも白昼堂々田の前でいちやついて……！　一体何なのあなた達！？」

「い、いちやついてなんかないわよ！？　わ、私は水織君を探しに来て、そしたら貴方に襲はれてるのを見つけて助けに来たの！」

「くう……空で人に出会えば茄子みたいな傘だと笑われ、せっかく見つけた安住の地は変なヤツに追い出され、ついにや妖怪の山で人間襲えればラブラブカッフルだし……私、自分でも驚くくらいに不幸……」

「だ、だだだ誰と誰がラブラブカッフルよ！？」

「……カップル？　誰と誰が？」

「う、うるさい！」

田の前の二人は泣き崩れたり、顔を真っ赤にしたり、全く意味のわからない水織はぽかんと呆けていた。

「！」、この怒りを弾幕でぶつけやるー、うわあああッ！？」

小傘の理不尽な怒りが弾幕となつて一人に襲いかかり、水織と穂子が同時に術符を構える。

「盤符『ちやぶ』台返し』」

水織は落ちていたスコップをすぐさま拾い上げ、地面を隆起させ壁を作り小傘の弾幕を全て受け止める。

そして勢いの落ちた一瞬の隙に、穂子が壁から躍り出ですぐさま術符を発動させる。

「実符『ウォームカラーハーヴェスト』

朱色の散弾と針のように鋭い金色の光弾とが重なり、一陣の弾幕となつて小傘を包囲し一斉に貫く。

集中砲火を受けた小傘は叩かれた虫のよじてぐるぐるとキリモニ回転しながら、べしゃ、と泥溜まりの中に墜落した。

全身泥まみれの小傘を見て、水織も穂子も少し居心地の悪そうな表情を浮かべる。

「……これ、やり過ぎだろ」

「……うん。反省してる」

一応背中を突つついでみたのだが、今度はぴくりとも反応しない。完全に氣絶しているらしい。

もちろん、水織は雨降りで泥まみれの状態の小傘を残して進むほど冷血な性格ではない。

徐に小傘に近づき、自分の体が泥に汚れるのも厭わず小傘を肩で担いだ。

「み、水織？」

「サウナのことも大事だけここの子も放つておけないからな。今日は一旦帰らうぜ」「だけど……うん。わかった」

灰色の空は依然として冷たい雨を幻想郷に注いでいる。妖怪とはいえ、このまま放つておいたら小傘だつて風邪をひいてしまう……と、思う。

今の自宅は銭湯なのだ。どうせなら静葉と穂子とに手伝つてもらつて彼女を助けてあげたい。

と、急に雨が止んだ。かと思つたら、横で穂子が小傘の唐傘を抱えていた。

「ほら。それじゃ傘持てないでしょ。水織まで風邪ひいちゃう」「おひ。サンキューな」

唐傘の方も小傘同様に氣絶してるようだ。その証拠に田玉がバツ印になつてる。この分なら勝手に使つても怒られないだろう。

「……水織つて、優しいよね」

「ん? 何か言つたか?」

「んーん。何でもない。ほら、早く秋の湯に帰らうよ」

水織と穂子が同じ傘をさして歩く。

氣絶してる小傘さえいなければ水織と相合傘となるのだが……今回は我慢しておく。

一緒に傘にいるだけで、それだけで十分温かかった。

第一十六話 満身創痍の相合傘（後書き）

お気に入り登録件数、100件！

登録してくださった方々、ありがとうございます。

これで100件を迎えたお話は空想夢と合わせて一作となりました。

本当にありがとうございました。

ついでに、よろしければオリジナル作品の『Blaze Snow ~焰雪~』の方も読んでいただければ嬉しいです。

……まだ序章しか公開出来てないけど；

なお、此方の方の更新は今日の深夜を予定しております。
出来なければ、恐らく明日かと。

そして次回更新はやつぱり3日後の12月12日。
では、待て次回。

P.S

テガミバチ1-2巻を一気買いましたw

漫画でもアニメでもやつぱり泣ける……ッ！

第一十七話 予想外の来客

小傘を助け、その翌日ににとりへサウナ建設を依頼して、その更に次の日水曜日。

本日秋の湯は休業日。なのだが、今日は朝から水織たちはいろいろと大忙し。

「穂子、ペンキとか筆は？」

「え、えっと。寺子屋の子供たちは三七人だつて言つてたから三十七本で、ペンキの缶は……いつぱい頼んだ！」

「静葉、脚立とかヘルメットとかはどうだ？」

「あ、あるよ！ 白いのとか黄色いのとか、青いのも…」

「青……？ 明らかにおかしいだろ。変えてくれ

「り、了解！」

ドタどたバタばた、どたドタばたバタ。

水織たちは朝から事務所やら近くの道具屋やらあちこちへ行つたり来たりを繰り返していた。

それというのも、今日は前に慧音と約束をした日、つまり寺子屋の生徒たちがこの秋の湯にペンキ絵を描きに来る日なのだ。

水織たちは慧音と生徒たちのための道具一式を用意している。

ペンキや道具の一部は香霖の店から借りたのだがほんの少し数が足りず、里の雑貨屋から筆を借りたりペンキを借りに走つたり。

「用意するとか言つておきながら、直前でこんなに焦るとは情けないよなあ」

ペンキ絵を描いてくれるのは寺子屋の生徒たち、つまりは年端もない子供たちだ。

秋の湯の浴場というただでさせ滑りやすいタイルの上で作業するのだから、安全面に關しては細心の注意を払いしたい。

脚立の下にはクッショーンを敷き、万が一転落した場合もヘルメットと合わせれば怪我を極力防ぐことが出来る。脚立には念のため支えを付け足す。ペンキも子供達では匂いがきついかもしれないのにマスクも用意した。準備は万全、だと思つ。

「そういえば静葉、慧音先生は何時頃来るって？」

「確か、五限の授業に合わせて来るって言つてたから……」

水織の学校と同じものだと考えるなら恐らく昼を過ぎたころだらう。

あらかたの準備を終え、ふうと一息つき水織は事務所の机に腰をかける。

フツと時計を見上げる。

朝から忙しなく作業したおかげか、時計の針は十一時半辺りを指していた。休憩するにはちょうどいいかもしねれない。

「ん……それじゃ、ちょっと休憩しようぜ」

「さんせーい」

「お昼、何にする？ お芋ふかす？」

「お前はホント芋ばっかだな……まあいいけど」

穢子は鼻歌交じりに事務所のコンロで芋を蒸すための鍋に火をかけた。

ふんわりとただよつ甘い香り。

……しかし、あのやつまいまほは一体何処から出でてくるのだらうか。

「『』のペンキ絵が出来上がつたら、その後にサウナ建設だな」

「にとりも驚いてたね。それじゃ蒸し鍋と一緒にないかつて」

「まあ、原理は一緒だしなあ……」

「それってつまり、サウナの中でお芋抱えたら蒸せるってこと?」「それじゃ穰子も一緒に蒸し上がりますよ。つーかそこまで熱くねえって」

「ねえねえ、その後つてどうするの?」

「その後……?」

ベンキ絵を描き終えサウナを増設したその後……か。

サウナまでは水織も考えてはいたが、その後となると何も考えていなかつた。

また秋の湯に施設を追加するのか、それとも別の何かをするのか。水織は小さく唸つた。

水織には、特別何かをしたい、と思うことがない。

そもそも水織は紫の気まぐれに巻き込まれこの秋の湯を秋姉妹と協力することになつたわけで、特にこれといった強い目的がない。

静葉に言われる今まで、全く気付かなかつた。

自分はこれからどうしたいのだろうか。確かに秋の湯を静葉や穰子たちと一緒に経営しているのは楽しいのだが……

コン、コン。

控えめなノック音に水織がドアを開ける。

そこには知的な顔立ちの女性が一人立つていた。

「あ、慧音先生!」

「やあ。今日は一日世話になるよ

恐らく授業の前に挨拶に来たといふことのだひつ。

水織たちは慧音を浴場へ案内して軽く説明を始めた。

「ふむ、これなら生徒たちも安心して絵を描くことが出来るな」

「最初に絵を見てもらって、それから絵を描いてもらうつて感じで

どうですか？」

「ああ、それで頼む。しかしすまないな水織。生徒たちのためにここまでしてもらつて」

「いえいえ。美人の教師のためなら喜ぶつはあツ！？」

「け、慧音先生。生徒さんたちは何時、こり来ます？」

「ん、すぐ外で待つているよ。こちらの準備は整つている」

「じゃあ、すぐにでも始めよつか」

昏倒してゐる水織を残し静葉と穂子が玄関に向かうと、既に暖簾の向こうで帝子屋の生徒たちが集まつていた。

「Jーんこーちはー！」

子供らしく無邪氣で元気のいい挨拶。静葉も穂子はその笑顔にほんのりと癒されたような気持ちになつた。

生徒たちはざつと見て男の子が6、女の子が4といつ割合でまばらに並んでいる。

皆一様に、服の袖を動きやすくするために捲つたりしていた。

「じゃあ、まずは絵を見るぞ。大浴場は滑りやすいから気を付けるようだ！」

「はーい！」

慧音先生の指示の元、生徒たちはぞろぞろと行列を成して進み、男女分かれて浴室に入る。そして三十分ほどして見終わると交代する。

生徒たちは壁一面に広がる大きな絵を見上げ、へーとか、ほーとか、感嘆の声のようなものを漏らしている。

「おつきな妖怪の山だね」

「私、何度も来てるから知ってるもん」

「綺麗だねえ」

「つお、つおお重いって……」

純粋な賞賛は、やはり純粋に嬉しい。

戸口の影でこいつそり様子を見ていた姉妹は、顔を見合させて微笑んだ。

失くしつつあつた信仰も、この秋の湯のお陰でみるみる回復しているし、何より毎日が格段に楽しくなった。

当初はどうなることかと心配だったのだが、外の世界から來てくれた水織のおかげもあって今では心の底から銭湯経営を楽しめている。

当の水織は、何故か生徒に踏みつけられているのだが。

「何だかんだ楽しいよね、お姉ちゃん」

「うん、そうだね。前よりも、もっと人の生活に身近になれた感じ」「今なら、山の紅葉も心配ないんじゃない?」

「そう……だね。でも、今度念のため見に行く」

「そつか。じゃあ、そん時は水織とお留守番かあ

「ふふ。何言つてるの穰子。当然穰子も一緒よ」

「ええ? だけど、そしたら水織一人になっちゃうよ?」

「じゃあ……私と水織君とで一緒に山に行くわ」

「それなら、お姉ちゃん一人で行きなよ。代わりに私が水織と留守番してるから」

「穰子一人でも留守番出来るでしょう? それに、水織君の気分転換にもなるし」

「……やけに水織君を気遣うんだねえお姉ちゃん?」

「み、穰子こそ。そんなに水織君と一緒にお留守番したいの?」

「べ、別に! だけどほら、水織だけ一人に出来ないっていうか何とかうか……」

姉妹一人で口論して顔を真っ赤に染め、同時に顔を俯かせる。その間に傷だらけの水織がぬつと顔を出す。

「……何してんだ」

「ひやあ！？」

「な、何でもないよ！ み、水織こそ大丈夫なの？」
「ちつちやい子つてのはちょっと苦手なんだけどまあ……ね。弟とか妹を持つヤツは大変そうだよなあ」

背中を摩りながら水織がしみじみといった口調で呟く。

振り返ると、大浴場で芸術鑑賞している生徒たちとその教師。何とも不思議な光景である。

元の世界でこんなシーン見れるだろうか、いや、恐らく見れないだろう。

今日限りの珍しい光景を眺めながら、水織は元いた世界をふと頭に思い描いた。

田舎で、温泉旅館で、姉がいて
この世界を知ることがなければ、今頃は水織は平平凡凡と暮らしていただのだろう。

でも、今自分は幻想郷という不思議な世界にいる。

いつそ、この状況を心の底から楽しんでみたらどうだろうか。
こんな経験、滅多にない。

自分が元いた世界に帰るその日まで、この幻想郷を楽しんでみようか。

そんなことを考えて

「たのも——！」

背後から響いた声にハツと我に帰る。

振り返ると、静葉と穂子も同様に玄関に目を向けていた。

そこには、少女が立っていた。

青いスカートに同じく青い髪。

そして極めつけは、その背に生えた透き通る氷の翼。

明らかに人、ではない。

かといって妖怪なのかと言わると、それと断言するのが難しい何とも奇妙な身なりの少女。

威勢よく声を張り上げた次は、これまた堂々と胸を張つてふんぞり返っている。

パツと見、バカっぽい少女だった。

大声を聞きつけ、浴場の方から慧音が顔を覗かせると、む、と小難しい表情を浮かべた。

「チルノ……か。こんなところに何をしに来た？」

「ふつふーん！ 私を差し置いて楽しそうなことじてるじゃない！」

私も混ぜてもらっていいわよ！」

「……あの、アイツ何者ですか？」

すると慧音はううんと唸り少し顔をしかめる。

その表情は何といふか、問題児を抱えた教師、といふそのまんまな感じだ。

「アイツもまあ……一応生徒だ。一応

一応を強調する慧音。

見た目からして彼女は人間ではなのは明らかで、ならば妖怪なんか、それともまた神様なのか。

「アイツは妖精だよ。害はない。けど、悪戯が好きなヤツらでね」

「ふうん……？」

チルノと呼ばれた少女はトントンと素足のまま秋の湯に侵入し、浴場の真ん中辺りで元気よく叫んだ。

「おー！ めー！ すいこじゅんせんとー！ 大ちゃんから聞いた通りだね！」

「大ちゃん……」

一瞬、元の世界のテレビ局のマスコットが出てきてしまったので首を振る。

何かしでかさないかと心配した水織はチルノの後を追い、そのまま女湯へと踏み込む。

「おい、お前何するのかわかつてるのか？ そもそもじいが何か知つてるのか？」

「あたい知つてるよ。じい、お風呂する場所でしょ？」

「お風呂する……って」

さつぱり訳のわからないチルノに、水織も小首を傾げ対処に困ってしまった。

それにしても、この背中の翼（？）は一体何なのだろう。透き通った結晶は、まるで氷か氷柱のように見えるのだが。恐る恐る、水織は手を伸ばしてみた。

「うお、冷たッ」

「はえ？ そんなの当たり前じゅん。私は氷の妖精なんだからな」「妖精？」

「そうだよ。あたいは氷の妖精なの！ だから弾幕でバリバリー！ つて凍らせるの！」

「凍らせる……ねえ？」

疑いの眼を向ける水織に、チルノは腕をブンブン回しながら意気揚々と答えた。

そしてすぐさまポケットから青い札を複数枚取り出し両手に握りしめる。

それは、水織もすっかり見慣れた、スペル・カード術符だった。

「お、おい！ こんなところで何をする気だー？」

「お風呂つて熱いんでしょ？ だったら」

「一ヶと笑みを浮かべ、そして術符を弾く。

符から凄まじい冷気が舞い起こり、浴場を一瞬にして吹雪が包み込む。

「きやああッ！？」

「ぐ……！ 嘘、ここは危険だ、逃げなさい！」

慧音は生徒達を素早く非難させ、水織はそのまま浴場へ残る。

「うわ……ぐッ！ ち、チルノ！ 何をするんだー？」

吹き荒れる吹雪の中、水織は片足を踏ん張つて吹き飛ばされないよう堪えながら、半眼でチルノを見据える。
得意気な表情で、チルノは答えた。

「熱いお風呂は嫌い！ だから、あたい専用の氷風呂を作るのぞー。」

第一一十七話 予想外の来客（後書き）

に「あのさあ、作者」

夜「何だにとり。というか、このあとがき久しぶりにやつたな」
に「私のシーン、カットし過ぎじゃない？」

夜「気のせいだ……多分」

いつも読んでくださる方々、ありがとうございます。

こつそり恋心のようなものが芽生え始めた秋姉妹、そして突如現れたチルノ。

何とも波乱な第三章です。

ぐだぐだな展開ですが、これからも応援していただければ嬉しいです。

……それと、オリジナルは今考案し直しています。

どうも世界観で引っかかりが生じてしまったので、大至急修正します。

更新は、何時頃になるかなあ……；

また活動報告で報告します。

では、待て次回。

第一十八話 氷精乱舞

秋の湯に突如乱入した小さな氷の妖精チルノは、水織に向かって声高らかに叫んだ。

「氷風呂……だつて？」

想像するだけで体が芯から冷え切つてしまいそうな代物である。ここは銭湯だ。銭湯とは公共の施設であり、寒い体を温めるための施設だ。

そんな中に氷風呂を作ろうだなんて、何を考えてるんだこの子は。

「……チルノ、とやら。ここが銭湯なのは知ってるんだよな？」
「知ってるよ。だからお風呂する場所でしょ」
「間違つてはいない。けど、銭湯つてのは皆で使うモンだ。誰かに一人のために新しい風呂を作るわけにはいかないぞ」
「そんなのズルーア！ 私だつてお風呂入りたいもん！」
「なら、普通に夜に来てくれれば」
「熱いのいやー！」

氷の妖精なのだから尤もな話である。しかし、だからと言つて許すわけにはいかない。

ここは心を鬼にしチルノをしつかりと説得しなくては。水織が歩み寄りうと踏み出した瞬間、突然視界が天井に向いた。

「チル……うおわッ！？」

右足が完全に宙を舞い、そのまま重力に引かれ派手に転ぶ。
臀部の痛みに顔をしかめながらふと足元を見ると、いつの間にか

浴場のタイルが、まるで鏡のように自分の顔を反射するほど見事に凍りついていた。

「んな……！ 大浴場が銀世界になつてゐるじゃねーか！」

床のタイルは凍りつき、シャワーには滴つていたであろう水で氷柱までもが出来ている。

目の前に広がる氷の世界はとても銭湯の中とは思えない。何も知らず裸のまま踏み入つたら間違いなく凍死してしまうだろう。滑りそうになるのを堪えながらどうにか立ち上がり、チルノを見据える水織。

「お、おいー いい加減にしろー このままじや秋の湯が使い物にならなくなつちまつ！」

「えー？ なんですか。あとはお水を張つて完成なのに」「じ、冗談じゃない。ここは銭湯なんだ、銭湯なのに体冷やしてどうするんだってのー！」

「もう、さつきからひるさいな。お前誰？」

「この秋の湯の従業員だよー！」

こうなつたら仕方ない。手荒い真似はしたくないがチルノを止めなくては。戸口を支えにしながら水織は静葉を呼んだ。

「静葉、オレのスコップ貸してー！」

「は、はい！」

「水織、私も手伝つよー！」

静葉が投げたスコップを受け取り、穂子が水織の肩を掴んで浴場へ飛翔する。

この床では足で移動するのは不可能だ。穂子の機転に感心しながら

らスコップを構える。

「おー！ 合体攻撃とかカツコいいな！ でも、撃ち落としてやる！」

チルノは自分の服と同じ青い術符を手に取り、水織と穂子に目標を定め発動させる。

「吹氷『アイストルネード』

激しい風と鋭い氷柱とで織りなす術符が天井を駆ける水織と穂子に襲いかかる。

穂子は浴場を縦横無尽に飛びまわるが、さすがに狭過ぎる。

「水織！」

「任せとけ！ おりやああああッ！」

いつか見た、カツコいい勇者や機動戦士が剣や槍をくるくる回して敵の攻撃を弾くアレ。

ほとんど見よう見まねでスコップを振り回すと、思いの外簡単に氷柱を落とせた。

「しかしスコップってのは綺まらねえよなあ……」

「水織、チルノの正面に行くよー！」

「お、おつー！」

氷の弾幕を撃ち落としながらチルノの真正面を捉える。

チルノはこちらを落とそうと必死に弾幕を張るが水織のスコップがそれを全て叩き割つていく。

「今だ、穂子！」

水織の合図とともに穂子の手が肩から離れる。

戦闘機がミサイルを発射するかのように、穂子の手から放たれた水織はチルノ目がけて一直線に飛んでいく。

「うわ、うわわわ！？」

チルノは慌てて術符で迎撃しようとするが遅い。

「もうつたッ！」

「こちらを迎撃とうとする氷柱を全てへし折り着地し、チルノの正面でスコップを振りかざし、チルノは迫りくる恐怖に顔を引きつらせうずくまつてしまつ。

「ひツ！」

「うえ、ツ、んわああああッ！？」

しかし、水織は勢いをそのままに顔面から凍った床面をぎゅりぎゅりと派手な音を立てながら滑り壁に激突してしまった。何が起こったのかわからずチルノは恐る恐る顔を上げ振り返ると、妙に体を曲げながら浴場の端で転がっていた。後から着地した穂子が声を上げる。

「み、水織！ 大丈夫！？」
「なんだアイツ……？」

氷の床を滑空して向かうと、程なくして水織が起き上がる。

「こつてて……す、すまん穂子」

「何してるのよ。せつかくチルノの正面を取ったのに」

「いや、そのな……」

壁に手をつき立ち上がり頬をかきながら水織はちうとチルノの方に田をやる。チルノも田があつてバツと構えをとる。

「……やつぱし、女の子と戦うのはどうもな」

「え、ええ！？ 何言つてんの水織、戦わないと秋の湯が氷河期になっちゃうよー。」「う、ううん……」

しかし、女の子には手を上げたくない。これは水織にとつて絶対の信条だ。

それに、と水織は凍つた床を慎重に歩いてチルノに近づいていく。当然、チルノは低く構えて警戒している。

「な、なにさ」

「ふむ……」

間近で見ると、チルノは相当可愛い女の子だった。

ほんのりとウェーブのかかった青い髪に、幼さと活発さとを備えた意外とすつきりとした顔立ち。

あと十年、いや二十年ぐらいすれば相当な美人になると想つ。

「あのや、チルノ」

「何よ。降参するってんなら認めてあげるわよ」

警戒するチルノに対し、水織は腰を落として田の高を合わせると、ぽふ、とチルノの頭に手を置いた。

「チルノ、銭湯は公共の、この里や皆が使う場所なんだよ。だから、チルノだけの風呂なんか作つたら不公平だろ？ 他に入りたい人が入れなくなつちまつ」

「そ、そんなの知らないわよ」

「チルノ一人だけで風呂入つて楽しいか？」

「そ、それは……」

せつかくの大浴場なのだ、友達や家族と入るのだって銭湯の楽しみ方の一つである。

……まあ、そもそも氷風呂なんぞに誰が一緒に入るのかという疑問が浮かぶのだが。大ちゃんとやらも氷の妖精なのだろうか。

「それにさ、オレ女の子に手を上げたくないんだよ。可愛い女の子ならなおさらな」

「か……？ か、かかか……！？」

聞き様によつてはもの凄く気障な台詞だが、水織にとつては本心そのものである。他意はもちろん無い。

しかし、本人に何の下心が無くとも聞き手がじつ受け取るかで事態は変わる。

その証拠に、チルノは茹で上がつたか蟹のように顔を真つ赤にさせ口をパクパクさせている。ついでに、穰子も口をパクパクさせている。

「ば、ばばば馬鹿じやないの！ アンタ、ロリコンでしょ！ このロリコン！ 変態！」

「ち、違うわ馬鹿！ 年下に興味はねえよ！ むしろ逆！」

「近寄るなああああッ！…」

「うおわああああああッ！…？」

零距離で吹雪が舞い起こり水織の田の前が真っ白に染まる。

チルノはあれやこれやと何か叫びながら大浴場を出て行き、雪だるまと化した水織はその場にばたりと倒れる。

「み、水織！？ ちょっと、返事して！ お姉ちゃん、水織が大変だから、早く来て！！」

・・・

「う、うう……ん？」

揺らめく視界、揺らめく体。

田を覚ました水織を待ちうけていたのは真っ白く染まつた世界。

「オレ……確かに、チルノと話して、それで……それで……ん？」

記憶を遡ろうとしてふと視線を下げて言葉を止める。

乳白色色の何処かで見たようなお湯、というか浴槽。

何故か水織は湯船に浸かっていた。何時の間に着替えたのか、何時入ったのか全く記憶にない。

チルノと話をしたのはハツキリと覚えているのだが、しかし、そこからどうすればこんな状況になるのか見当もつかない。

「寧に服まで脱いでタオルが腰に巻きついている。いや、服を脱がないと風呂には入れないので当たり前なのだが、しかし」で一つ疑問が浮かぶ。

「何時、どうやって服を脱いだのか、だ。

水織自身には全く脱いだ覚えはない。というか、そもそも風呂に

入った覚えもない。

「……どうなってんだ？」

念のため周囲を見回す。

何度見てもここは見慣れた秋の湯の男湯だった。しかし、不思議なことに水織以外の利用客の姿は見えない。

「まあ、今日は休みだからな。……休み、のはずなんだけど」

休みなのに何故お湯が張つてあるのか。ますます疑問が大きく深くなつていく。

謎だ、謎過ぎる。

このまま長々と考え方してゐる場合ではない。まずは外に出て事態を確かめなくては。

浴槽から立ち上がりとしてフツと視界が暗くなり一瞬足が止まるが、そのままぺたぺたと足音を立てながら脱衣所へと向かつ。心無し脱衣所までの距離が長いような気がしたのは今の立ち眩みのせいだろうか。

戸を開け棚に向かつと、自分の衣服がこれまた丁寧に収納されていた。

「ううん……？ オレ、脱いだらそのままにしちゃうはずなんだけどな」

下着に手を伸ばし足を上げた辺りで、真横から、がらがら、と引き戸が開く音がした。

「さて、水織の様子はどうだ……む……な」

戸を開けて姿を見せたのはバスタオルを抱えた様子。

水織の着替えに直面した穂子は抱えていたタオルを全て落とし、その顔はみるみるうちに赤く、紅く染まっていく。

場の空気を読んだのかそれとも偶然か、不意に水織の腰のタオルがはらりと舞い落ちて

全身全靈、腹の底から声を絞り出し、水織と穂子は今まで生きてきた中で一番の大声を張り上げた。

第一一十八話 氷精乱舞（後書き）

予約投稿機能を使っての初投稿。

出来てる……のかな？

ちょっと不安ですが、第一一十八話です。

お気に入り登録数も伸びて、作者としても嬉しい限り。

評価ポイントが空想夢を越えれたら、個人的にはもっと嬉しいかな。

それと、このお話内の外伝を考案してます。

といつても、オレの大好きなキャラを無理やり出そうとしてるだけ

なんですが……w

そして、次回更新は12月18日予定となります。

オリジナルも頑張らないと！

では、待て次回。

第一十九話 人妖無用の錢湯を

「……普通、いつこう展開は逆だと思つんだけ」

着替えを済ませ、水織は事務所で「じ」と乱暴にタオルで髪を拭いていた。

まさか穰子に着替えを覗かれるとは思わなかつた。まだ顔が火照つていて恥ずかしさが残つてゐるような気がする。

当の本人は真つ赤な顔を見せまいと顔を反らして事務所の隅で不貞腐れていた。

「別に、見たくて見たわけじゃ、ないわよ……」

「でも大変だつたんだよ。雪だるまみたいに固まつちゃつた水織君を助けるの。穰子と私とでボイラーモカして浴場の氷を溶かして、それからお湯を張つてさ」

「む……そ、そうだつたのか。それならそうと早く言つてくれりやいいのに」

不貞腐れている穰子の方へと歩いていくと穰子が振り返る。
ほんの少し恥ずかしくて、水織は頬を搔きながら少しだけ視線を反らしながら言つた。

「あ、ありがとな。そつとも知らずに叫んじまつて悪かつたな」

「……い、いいよ。私も、ノックとかすればよかつたんだし……」

「静葉もありがとな」

「ううん。どういたしまして」

思えば、この姉妹には何度もお世話になつてゐるような気がする。そのうち何かでお返しをしなければ、と頭の片隅で考えつつ、水

織は先刻のチルノとの出来事を思い出していた。

「……そういうえば、この幻想郷つていろんな人がいるよな」

「えっと、突然どうしたの？」

水織のような普通の人間もいれば、秋姉妹のような神様もいる。勇儀のような鬼も、紫やルーミア、小傘のような妖怪に、チルノのような妖怪。

水織は改めて、この世界には人妖様々な人々が生活していることを実感した。

十人の人がいれば、十通りの需要ニーズがある。

それは妖怪や妖怪だつて同じことだろう。つまり、水織が言いたいことは

「つまりさ、妖怪には妖怪の銭湯を、妖怪には妖怪の銭湯が必要なんじやないかな」

いつか見た二人のように、我慢比べしたい人もいるのかもしれない。

チルノのように、特殊なお風呂を楽しみたい妖怪や妖怪もいるのかもしれない。

水織が今いるここは幻想郷なのだ。

外の世界と同じような銭湯を経営していくは、外の世界と同じ人しか楽しむことが出来ないのではないか。

ついさっき自分がチルノに言った言葉が思いもよらないとこりで返ってきた。

このままで不不公平なのだ。

水織の提案に、しかし静葉と穂子の表情は難色を見せた。

「だけど、それは難しいと思うよ水織君。水織君はともかく、里の

人は妖怪を怖がる人だつているんだよ」

「その逆も然り。隙あらば人を襲うのが妖怪の本分なんだし、逆に人を苦手とする妖怪もいるんだし」

「そこは……ううん」

水織が描いた人妖無用の銭湯はそう簡単にはいかないらしい。確かに水織も何度か襲われ命を狙われている妖怪と一緒に風呂は遠慮したい。いや、美人の妖怪なら一向に構わないが、里の人や子供の場合はそうもいかないだろう。

「……まあ、この話は追々でいいや。とりあえず今日はもう寝る。明日はにとりのとこもつ一回行かなきゃいけないし」

部屋を出てから布団に入るまで、水織は幻想郷の住人全てが平等に銭湯を楽しめるアイディアは無いものかと考え耽っていた。

・ · ·

「人と妖怪とが一緒に……？」

翌日、不可思議な機械が並ぶにとりの自室。

水織は昨日静葉や穂子に話をすることにとりにも話してみた。特にこれといった理由はなく、ただ一人の妖怪の意見を単純に聞いてみたかったのだ。

「そうだなあ。私は人間が大好きだし、別にそういうのは気にしないよ。むしろ私はもつと盟友らしく、仲良くしていきたいと思ってるし」

「ふむ……」

「そ、それにまあ……その、水織とだったら別に一緒でもいいし……」

「一緒？ 何が？」

「え、ええ？ いや、秋の湯に混浴施設でも作るつて話じゃ……？」

「紫さんと混浴だつて！？ 是非ともお願ひしがつはあー…？」

背骨に鈍痛が響き水織が前のめりにヘタレ込む。ちゅうぢ繪文字

でいうこ、みたいな感じになつた。

その背後で穰子が拳を握りしめながら顔を紅潮させている。

「一」、混浴なんて水織には早いわよー。」

「どういう意味だ！？」

「は、ははは……」

乾いた笑いを浮かべながら、にとつはははりとため息をついて
サウナの設計図を広げた。

秋の湯をこれ以上増設するのは若干難しいので、サウナは本館である秋の湯とは別に隣に新しく建物を作り、そこをサウナ専用の建物とすることにした。これなら連絡通路で繋ぐだけで秋の湯から直通で利用できる。

「ただ、ちょっと時間が掛かっちゃうし、予算とかまあ……色々と
ね」

「……そういえば、秋の湯の利益ってどうなつてるんだ？」

「はい、帳簿

手渡された帳簿を適当にペラペラと捲つてみる。

思いの外儲かっているらしくほとんどが黒字である。ただ気な
るのが、所々に“所場代”と赤く線を引いてあって幾らかマイナス

の部分がある。

「……おい、この所場代って何だ」

「実は紫さんが『この建物は私が見つけてあげたでしょう？　だから時々銭湯の売り上げを所場代として少し貰うわね』って」

「あれじゃヤクザよヤクザ。銭湯をやらない？　って持ちかけたのは向こううなのに」

「でもまあ、悪女つてのもあつだあああー！？」

穂子の鋭いローキックが水織の泣き所を貫く。

飛び上がる水織を放つて穂子がにとりの設計図を指差した。

「これ、どれぐらい掛かりそう？」

「仲間たちと一緒に、最低三日は掛かりそうだよ。その間はお休みだね」

「まあ仕方ないか。だけど、その間暇になっちゃうから……」

そこに静葉が顔を出し、小さく微笑を浮かべた。

「じゃあ、穂子にお留守番お願ひしてもいい？」

「へ？　留守番？」

「ほら、前に言つたでしょ。私と水織君で山に行くて話

「……あー」

前に話していたことを思い出し穂子がハツと顔を上げる。当然にどりは事情を知らないし、水織は遠くで痛みに悶絶している。

「だ、だからお姉ちゃん一人で行けばいいのに、どうして水織を巻き込むのー！」

「巻き込むだなんて人聞きの悪い。私はただ水織君と一緒にお出か

けしたいだけだよ」

「だ、だけど秋の湯の方は」

「秋の湯はサウナ作るからお休みだよね、にしおりちゃん?」

「う、うん……」

静葉の穏やかだが、重圧を感じさせるような笑顔に気圧され、
にとりはコクコクと頷くことしか出来なかつた。

そのまま穂子にも同じ笑顔を向けるが、僅かにたじろぐだけでど
うにか踏みどどまる。

「だけど念のため、穂子は秋の湯でお留守番」

「や、やだよそんなの! それに水織だつて妖怪の山の調査何か興
味無いと思うよ?」

「じゃあ……水織くーん」

「ん? 何……うおッ?」

脛の痛みから解放され安堵した水織が振り返ると、目の前に静葉
の張り付いたような笑顔が迫つて、次いで穂子も接近してくる。

「水織君、私と一緒に行こ?」

「は? 行くつて何処に?」

「水織、私と一緒に留守番!」

「いやあの……どうした、お前ら?」

鬼氣迫る一人の表情を見て、頬に冷や汗を一つ垂らす。

よくわからないが、何か決断を迫られている。それが何なのかわ
からないので決めるに決められないのだが。

困惑する水織に、にとりが遠くから助け船を出してくれた。

「サウナ作るから銭湯は休みだろ? だから出来上がるまで何す

るかつて話で」

「私と一緒に妖怪の山に行こう。」

「留守番…」

「……とこつわけや」

「はあ……よくわからんけど、オレはまだどうも」

『どちらか決めて…』

恐ろしい剣幕にドコドコと体が震え、思わず腰を抜かしそうになつた。

話によると、静葉と一緒に妖怪の山に向かつか、それとも穂子と一緒に留守番をするかの一択。

「じ、じゃあ……そうだな」

ほんの少し考え、決める。

サウナが出来上がるまでの間、水織は

第二十九話 人妖無用の錢湯を（後書き）

これにて第三章終了です。

ううん、長かつた。

今後の展開はどうしていこうか……

それと、そろそろお正月外伝とか考えておいた方がいいかな？

いつも読んでくださる方々、ありがとうございます。

評価ポイントも上がっていて嬉しいです。

感想、コメント、お待ちしております。

次回更新は12月21日予定です。

では、待て次回。

第三十話 秋姉妹の秘密

「……で、結局三人で妖怪の山に行くのね」

真つ青な秋晴れの下、穂子は不満げな表情を浮かべながら山の中腹へと向かう山道を歩いていた。隣には姉の静葉が、その後ろに水織が続いている。

「別に嫌なら留守番してもよかつたのに」

「留守番するより、一緒に動いてた方が楽しいしな。穂子だつて家で一人で残るのも嫌だろ?」

「だから水織が残つてればよかつたのに……」

先日、というか昨日。

サウナ増設の話の後、何故か水織は姉妹に迫られ、穂子と一緒に留守番をするか、静葉と共に妖怪の山を調査するかと二択を強いられた。

正直水織はどっちでもよかつたのだが、せっかく出かけられるなら皆で行けばいいと水織は提案した。

そして現在に至るのだが、何故か両名とも若干機嫌が悪い。朝に待ち合わせをしてからずつと二人の間にピリピリとした空気が漂っていて、水織は訳がわからず少し気まずかった。

そんな気まずさを紛らわすため、水織は静葉に訊ねた。

「そ、それでさ。妖怪の山の調査つて言つてたけど何を調査するんだ?」

「水織君が幻想郷に来た時にね、山の紅葉が気になつてたの」
「紅葉つて……」

前後左右、その目に映るは紅一色に染まつた森。

傍から見ても何の問題もなく葉は色づき秋らしさ満載なのだが、これ一体何処が気になつたというのだろうか。ひらり、と水織の手に舞い落ちるイチョウの葉も見事に黄色く染まつてゐる。

「……氣のせいじゃないのか？」このイチョウだつてさりやんと色付いてるじゃん」

「信仰は秋の湯のお陰で回復してゐるんだし、もう大丈夫だと思つよお姉ちゃん」

「……でも、やっぱり氣になるから見に行くの。ほら、穂子も水織君も歩いた歩いた」

中腹を過ぎたころから山道は徐々に険しくなつていき、山道も獸道のようにほとんど手つかずの状態になつていた。

傾斜のきつい山道をスコップで杖代わりにして進む水織。ふと、水織は先を行く一人に再び訊ねた。

「なあ。そういうえばお前らの神社つてあるんだよな？」

何氣ない水織の問いに、静葉と穂子の歩みが同時にピタリと止まる。

そうとも知らず水織は歩き続け、穂子の背中に額をぶつけてしまつた。

「うわーと。お、おい。どうした？」

ピタリと止まつたまま、一人とも時間が止まつてしまつたのかのように動かない。

神社のことを聞いてはいけないのだろうか。一人の琴線に触れてしまつたような気がして、せっかく紛らわせていた気まずさが戻つ

てきてしまった。

どう声をかけたものか、水織が悩んでいると静葉がゆっくりと振り返った。

「……静葉？」

「その、別に隠してゐつもりじゃないんだけど……」

「……？」

少し遅れてから穂子も振り返る。

指で頬を搔きながら、明後日の方向を見つめながらぼそりと呟いた。

「……あのね水織、笑わないでくれる？」

「へ？ ……あ、ああ」

「そのさ。実は私たち……」

穂子が人差し指同士をちゃんと合わせる。

それは子供がいじけたり恥ずかしそうにしたりするあの仕草だった。

「私たち、自分の神社の場所……忘れちゃってさ」

「……は？」

ポカソんと口を開ける水織。

何を言っているんだこの神様は。いつたい何処の世界に、自分が祀られているであろう神社を忘れる神様がいるというのだろうか。

「いやあの……冗談だよな？ だつてお前ら、それって自分の家があるのに忘れたつて言つてると同じじゃないか」「えへへ……誠に恥ずかしながら、本当に忘れちゃつたんだ……あ

はは

「じゃあ、今までどこに寝泊まりしてたんだ？」

「それは……ほら、安全そうな大木の洞とかで寝泊りを」

「ホームレス神様！？」

大仰に天を仰ぎ額に手を当てる。

こんな神様つてありなのだろうか。自分の家を忘れた神様に、よくまあ信仰とやらが集まつたな。

水織は嘆息しながら、苦笑する姉妹を交互に見やつた。

「……それでよく神様やつてるよな」

「アハハ……返す言葉もないや」

「そ、そんなことはさておいてさ、調査だよ調査。私たちは妖怪の山の調査に来たんだから」

ふわり、と静葉が宙に浮かび上がり大木の葉を注意深く観察する。同様に穂子も周辺の木々の合間を飛んで何やら作業を始めていた。何をやっていいのかわからず、水織は見よつ見まねで作業をしていく。

「……紅葉がどうとかって、オレにはよくわかんないんだけどなあ」

イチヨウやモミジを指でくるくると手で回しながら、水織はぼつりと呟いた。

・・・・・

一方、そのころ。

人里の商店で一人の少女がペンを片手に店主と話を交わしていた。

「はあ……なるほどなるほど。つまり、供物などは収穫祭の時に手渡すばかりで、社に直接奉納したということはないのですね」

「そうだよ。あの方々はいつも気の良い人たちで、我々と一緒に収穫祭を楽しんでくれるからね。そんな神様が銭湯をやるだなんていうのはビックリしたけど、銭湯つていつものもす」快適でこれまた驚かされたよ」

「ふふ。流石は外の世界の文化とこうことだけあります」

「だけど、何でまたそんなことを聞くんだい？ そういう祭事のことならうちみたいなしけた商店なんかより、神社とか稗田家のお屋敷に聞いた方が早いんじゃないかい？」

「いえいえ、そんなことありませんよ。それに彼女たちは里の人たちと密接な関係を築いていますからね。こうやって私が直接里の皆様方に訊ねて回った方が確実なんです。百聞は一見に如かず、ってヤツです」

インタビューした内容を手帳に素早くメモすると、簡単な謝辞を述べ少女は漆黒の翼を広げ秋空へと羽ばたく。

少女、射命丸文は空の上に漂いながら、里で入手した情報を簡潔にまとめていく。

収穫祭を開くのにも拘らず、意外と明かされていないその素性。里の人からの供物は全て、収穫祭で降るまい社に奉納するということはしない。

そもそも、彼女たちの社の有無すらわからない。

「『謎に包まれた秋姉妹』これはなかなか面白い記事が書けそうですね」

新たな記事を手にした文は上機嫌でメモを閉じると、自宅兼作業場のある妖怪の山へと戻っていく。

妖怪の山の奥、この山を支配する天狗たちの拠点から少し南下し

た場所に、射命丸文の作業場がある。

大木の上に作られた作業場の戸を開くと、デスクの上にメモを放り投げて特製のタイプライターを用意し、ついでに助手を呼ぼうとして、止めた。

「おつと。いけないいけない。彼女は今出張中でしたね。作業は私一人でこなしませんと」

今はいよいよ下の存在を思い出し、文は集めた資料を片手に素早くタイプライターで文章を作っていく。

大きく目立つ見出しに、その内容を深く掘り下げていく本文。手製の新聞作りは若干の難こそあれど、慣れた彼女の手に掛ければものの数分で出来上がってしまう。

出来上がったばかりの新聞のチェックをしていると、その新聞が突如ひょいと持ち上げられた。

「相変わらず早いわね」

「わ！ 誰です……って、紫さんですか」

何時の間に現れたのか、文の背後で八雲紫が出来上がったばかりの新聞をしげしげと見つめていた。

「……相も変わらずホントかウソなのか曖昧な記事ね」

「失礼な。私はこの幻想郷の真実しか記事にはしませんよ」

「真実……ねえ」

真実という言葉に紫が眉をひそめる。

記事を見たところ、内容は今まさに秋の湯を経営している秋姉妹の記事がほとんどだった。

「あ、そうだ。紫さんは彼女たちの神社とか、そういういた類の建物のことは何か御存知ですか？」

「まあ……そういうえば聞いた

「不思議ですね。神様なのに、自分の社がないだなんて。里の人た

ちも知らないみたいで、そもそも存在しているのでしょうか？」

「知りたいのなら、調べればいいじゃない。私は特に興味がないから

۱۷

「……………アーヴィング、元気になりましたか？」

卷之三

卷之三

卷之三

りと微笑を漏らした。

「ええええ。元気によつてるみたいよ。慣れない環境に四苦八苦し
てるでしょうけど」

「だけど、どう

みたいなんと思ってたんですけど、

ふふふ。これは私の気まぐれ。特にこれといった理由なんてない

「はあ……」

「気になる？あの子の」と

「そりやあもちろん、上司としては心配です。人様に迷惑をかけて

いがいが三三が色少

「貴女の口から二ヶ月が過ぎた後だ」

卷之二

適切な報告の後、紫はその場で右手を難いですき間をひじ開けるとそつと踏み出した。

上げた。

「心配なら、素直に言えぱーいのこ」

「へ？ な、なんのことです？」

「ふふ。まあいいわ。また何かあれば報告してあげるから」

そう言つてすき間を閉じると、作業場に静寂が広がる。
椅子に思い切り体重を預け、文は窓の遠くに広がる青い空を見上げた。

「……つぅん。ホントに彼女で大丈夫だつたんでしょうか」

遠く広がる青い空。

今自分が見上げてこむこの空と、向こいつの世界の空と繋がっているのだろうか。

そんな柄にもないことを思いながら、文は再び作業に戻った。

第三十話 秋姉妹の秘密（後書き）

こつから第四章。

お話は銭湯から、秋姉妹の方に移り変わるようで……？

そして文と紫が話していた、向こうの世界に行つた者とはいつたい？

相変わらずぐだぐだつと進んでおりますが、それでも読んでくれる

人がいて嬉しいです。

感想ご意見等、お待ちしております。

次回更新は12月24日予定。

では、待て次回。

第三十一話 水織の恩返し

妖怪の山の調査を終え、それから数週間が経過した。

現在十一月半ば。

北に臨む妖怪の山は、未だ赤く染まるところ在れどその紅は徐々に失われ始めていた。

「紅葉……ねえ」

そんな妖怪の山を眺めながら、水織がふと呟く。

前回の調査では結局何の進展もなくそのまま調査を切り上げてしまつた。

穂子は考え過ぎたと姉を笑い、しかしその静葉は今でもしきりに妖怪の山を確認しに出かけたりしている。

相変わらず成果はないようだが。

「……ふむ」

「あら、どうしたのよ水織」

声の方に振り返ると、赤と白の巫女服姿の少女が突っ立っていた。
この里から少し離れた場所にある博麗神社の巫女、博麗靈夢。心配している、といつよりは好奇の眼を向けているといった感じだった。

「アンタでも呆ける時があるのね。何を考えていたの?
いや、そんな大したことじゃないけど。てか、靈夢にひんなどこで何してんだ」

「ん」

「年がら年中神社にこもってるわけじゃないもの。たまにはこいつして必要なものを買うために外出もするわ。前にアンタんとこの銭湯を借りに来たでしょ」

「まあ、そりゃそうだよな。……あのさ」

数瞬迷つた後、水織は靈夢にこんなことを訊ねた。

「靈夢は、静葉や穂子の神社って知ってるか？」

「焼き芋姉妹の神社？……「うん」

額に手を当て思考するが、やがて小さく首を横に振つた。

「……いいえ。でも、アイツらの神社だなんて聞いたこともないわね。それがどうかしたの？」

「いや、この前妖怪の山に行つた時にそんな話をしたからさ。私は自分の神社を忘れちゃつただなんであっけらかんに言つてて」

「ふうん……」

「ふうんって、それだけかよ？ 他にもひとつ二つ、ないのかよ？」

「探してやろうとかそういう……」

「何で私が？ 賴まれたわけでもないのにそんな面倒なことを

「面倒つて……」

存外冷たい靈夢の態度に水織は心底驚いた。

もつところ、巫女と言つたら清らかで優しいんじゃないのか。

それなのに目の前の巫女と言つたらまるで関心がない。良心は全てその腋から漏れ出て消えてしまつたのか。

水織の不服そうな視線に気づいた靈夢は軽く眉を上げ、今度は逆

に水織の方に訊ねた。

「そつちこせ、急にそんなこと聞いてどうしたの？ アイツらの神社何か探して何をするつもり？」

「べ、別にビービーハシヨウハツわけじゃないさ。ただ……」

一拍置いてから水織が言葉を続ける。

「オレ、いつの世界に来てから静葉たちに世話をになつてばっかだからさ、少しぐらに何か恩を返そうと思って」

「それで恩返しに神社探しってわけ？」

「恩返しつてほど大袈裟なものになるかは、わからないけどな」

「……そうねえ」

再び思考するポーズ。

やがて妙案が浮かんだのか、あ、と小さく声を漏らした。

「古い文献とかそういうので調べたらどう？ 寺子屋をやつてる慧音は知ってる？ アイツなら幻想郷の歴史をぼんやり死んでるから何か聞けるかもよ？」

「慧音先生……」

そういうえばチルノの乱闘の所為で、寺子屋の子供たちにペンキ絵を書いてもらう事が出来なかつたのを思い出す。

前回の侘びも兼ねて一度挨拶に行こうと思つていたから、ある意味都合がいいかもしない。

それに、未だペンキ絵は白紙のままだし。

「寺子屋はここから北の方角よ。近くに立て看板でもあるからすぐわかるはずよ」

「わかった。慧音先生のところに行つてみるよ。ありがとな、靈夢」「……別に、礼を言われるようなことしてないわよ」

頬を指で搔きながら、靈夢はそれくわと神社の方へと向かつてしまつた。

ひとまず、やることが決まつた。

「よし、それじゃ慧音先生のところに行へか」

静葉と穂子には少し出かけるだけ伝え、水織は早速慧音の寺子屋を田指して歩き出した。

・・・

秋の湯からちょうど北に向かつて数分後。寺子屋を示す立て看板がすんなりと見つかり、水織は今寺子屋の玄関に立つていた。

「いじが寺子屋……」

大きさは秋の湯ほどとまではいかないが、横長に伸びた日本家屋といったところ。

玄関のすぐ傍に小道があり、どうやら縁側に繋がつていて微かに文机が並んでいるのが見える。恐らく授業を行つてゐる教室だ。そこから子供たちの元気の良い声が聞こえてくるので、授業の真つ最中なのが窺えた。

「流石に授業中にお邪魔するつてのもアレだよな。どうしたもんか

……ん?」

玄関の奥から足音が聞こえ、水織は何故か慌てて近くの植木の裏

側に身を隠した。

戸口から出てきたのは、何処かで見覚えのあるよつた銀色の髪の少女だった。

「あれ、確かこの前弾幕勝負してた……」

顔だけ覗かせ少女を観察していると、水織の気配を感じ取った少女が振り返る。

「誰だッ」

「は、はッ！？」

思わず飛び上がり姿を晒した水織に、少女は一瞬驚いたような表情を見せ、それから口を開く。

「お前……？ 確か、銭湯の」

「そ、そうです。草津水織、そういうアンタは確か、妹紅……だけ？」

如何にも、とふんぞり返っていたわけではないが、若干水織よりも高身長なせいか少し威圧されているような気がした。

「ああ。寺子屋に何か用なのか？」

「え、まあ……はい。ちょっと慧音先生に聞きたいことがあって」「慧音に聞きたいこと……？」

呼び捨てにしていることは、親しい間柄なのだろうか。

慧音も同じような銀髪をしているから、もしかしたら家族だと、親戚関係なのかもしれない。

水織がそんな妄想を膨らましていると知つてか知らずか、妹紅は

小さく唸つた後ちょいちょいと手招きした。

「立ち話も何だ、上がつたらどうだ？」

「あ、はい。お邪魔します」

この寺子屋は彼女、妹紅の家でもあるのだろうか。何の遠慮も無しに履物を捨てて上がり込んでいく妹紅を追いかけしていくと、突き当たった場所に応接室のような場所に着いた。そこで待つようこそと妹紅は一言だけ言い残してから何処かへと消えてしまった。

座布団の上で律儀に正座して待つていると、ほんの数分後に妹紅が慧音と一緒に戻ってきた。

「やあ。待たせてすまないな」

「いえ、今来たところですので」

妹紅が茶を用意してくれたので水織は遠慮なく一口いただく。そういえば、幻想郷の食べ物や飲み物はほとんど元いた世界と同じようなものばかりだ。

このお茶も昆布茶という何とも渋いチヨイスである。

水織は特に茶に好き嫌いがあるわけではないので美味しいだけた。

「それで、私に何か用かな？」

「は、はい。えと、まずはこの前のお詫びをと思つて」

「お詫び……？」

「チルノの乱入で、結局ペンキ絵の話があ流れになつりやつて。もうちょっと、こつちがしつかりしてれば」

「いや、それなら此方にも責任はある。彼女もまたこの寺子屋で学ぶ生徒の一人でな」

「チルノが、寺子屋に？」

少し苦い顔をしながら慧音が頷く。

「里の子供以外にも、時々だがチルノのような者に教鞭をとる時もある。ごく稀に、だが」

「へえ……慧音先生ってやつぱり凄いですね。美人だし知的だし、今すぐ結婚したいです」

「は？」

「いえ。気にしないでください」

どうも最近、自分の発言で墓穴を掘っているような気がする。軽く咳払いしてから水織は自分の目的を告げた。

「あの、実は聞きたいことがあって」

「ふむ。私に答えられることならお答えしよう」

「静葉と穂子の神社のこと、何か知りませんか？」

「秋姉妹の神社？ それなら彼女たちに聞けばわかるのではないか？」

？

「それが……」

水織が簡単に事情を説明すると、横で立ち聞きしていた妹紅が呆れたようにため息をついた。

「おいおい。祀られる神様が自分の神社を忘れたって？ そんな間抜けな話あるわけないだろ？？」

「だけど全然知らないって言つんです。静葉はともかく、穂子は頭の中まで焼き芋なのかもしだせん」

「それで、私に神社の場所を訊ねに来たというわけか。ふむ……妹紅、ちょっとアレを持ってきてくれませんか？」

「ん、わかつた」

銀の髪を翻し妹紅が部屋を出していく。

戻ってきた彼女の手には、やたらぶ厚くて大きな本が握られていた。

……あの本、タウ ページで換算したら何冊分ぐらいになるのだるい。

「あの、それは？」

「ここの幻想郷の歴史を集めた文献だ。私が編纂してまとめたものだ」表紙の先に広がる圧倒的な量の文章に、水織は思わずめまいを感じそうになつた。

教科書や小説なんかとはレベルが違い過ぎるほど 文章量。これが全てこの世界の歴史全てを記したものだというのも、何となく領けるような気がした。

パラパラとページをめくつていき、やがて慧音の指が止まる。そのページには、何やら文章とは他に小さな地図が描かれていた。

「彼女たちの神社、あるじゃないか」

「え？ 何処ですか？」

「ここだ」

慧音が指をさした地図の一点、その場所には水織も覚えがあつた。というより、そこは水織にとっては何度も行つた場所であり、この世界に来て初めて目を覚ました場所。

「……妖怪の山、だな」

第三十一話 水織の恩返し（後書き）

突然ですが、次回の12月27日の更新を以て年内最後の更新とさせていただきます。

来年の更新日は、今のところ1月5日辺りを予定しています。

読者の皆様方には大変ご迷惑をおかけしてしまい、申し訳ないです。

……その代わり、と言つては何ですが、今までのオリキャラでお正月短編を公開する予定です。

こちらは、早ければ元旦にでも第一話を公開できるかな。
もしかしたら活動報告でちよろつとメモつたりするかも……？
そちらもお楽しみに。

では、待て次回。

第三十一話 水織、妹が出来る？

「それにしても、水織何処に行つたんだろ？」

秋の湯のカウンターで穂子はぼんやりと呟いた。静葉も帳簿を片手に小首を傾げる。

「水織君が出かけるつて、何処にだろね」

「……本当は、銭湯がめんどくさくなつてサボつてるんじゃない？ 全くしょうがないヤツだね」

「でも、ちょっとぐらいいいんじゃないかな。水織君は外の世界の人間だし、まだ幻想郷が珍しいんだよきっと」

「水織が幻想郷に来てから、もう一ヶ月経つたんだよねえ」「うん。時間が経つつて本当に早いよ」

帳簿をパタリと閉じ、静葉がカウンターで頬杖をつきながらぼんやりと呟く。

時が経つのは早い。それが楽しい時で、あれば尚更に。

静葉は水織と出会つたときのことを思い出しながら、一度大きく伸びをしてから穂子に言った。

「じゃあ、今日は私たちだけで頑張らないと。水織君は、お休みでいいでしょ？」

「しようがないね。……あ、そついえばお姉ちゃん

「なあに？」

満面の笑みを浮かべながら、穂子は静葉に告げる。

「そろそろ、収穫祭の時期だね」

・・・

一方そのころ、水織はとうとスコップを片手にしながら妖怪の山入り口にいた。

空は晴天。雲一つない快晴である。

しかし、日差しこそあるものの晚秋の風は冷たく、水織の体を容赦なく凍えさせる。地図を持つ手までもがふるふると震えていた。

「……コートとか、マフラーとか、そろそろ防寒具が欲しいなあ」

秋の湯の収入から少しばかり頂戴出来ないだろ？ か。 そうすれば霖之助の店で何か買えると思うのだが。

マフラーとか手袋、あと耳当てとかホッカイロ、ついでに温かいココアとか……しかし、脳内で思い描いても別段暖かくなるわけもなく、水織の傍を虚しい風が吹き抜けていく。

「うう寒ッ。でも、早く見つけて静葉たちに知らせてやりたいし、頑張るとしますかね」

それが終われば、防寒具でも何でも揃えればいい。というか、普通に銭湯に浸かるのでもいい。

早く神社を見つけて暖まろう。水織は気持ちを切り替え早速山道へと歩き出す。

何度も来たせいもあってか険しい斜面にも幾分慣れてきてその足取りは軽い。

一步一步着実に進んでいく ふと、水織は足を止め振り返る。

「…………？」

一瞬、見られていたような気がして振り向いたのだが、背後には誰もいない。

今まで歩ってきた山道には舞い落ちたモミジやイチヨウがまるで絨毯のように敷き詰められていて、それ以外は特に気になるようなものはない。視線の主も、もちろん見当たらない。

「氣のせい、なのかな」

仮にもここは妖怪の山。もしかしたら、また水織を狙う妖怪の類が潜んでいるのかもしれない。

念のためとスコップを握りしめ全方位に注意を向けながら再び歩みを再開する。

「しかし、妖怪の山ってだけあって広いよな……こんな適当な地図じゃしつかりとした場所がわからねえや」

慧音からもらつた簡単な地図を広げ、自分のだいたいの位置を確認する。

慧音の情報によると、秋姉妹を祀っている神社は妖怪の山の東側にあるらしい。

山道をまっすぐ北に上り、中腹の辺りでコンパスを使って東を確認し、進む。

しかし、行けども行けども紅葉で彩られた木ばかりが立ち並ぶ同じような景色で、目的の神社など到底見えてこない。

持ってきた水筒も、気が付けば空になっていた。

同じ景色ばかり延々と続く所為なのか、だんだん方向感覚が麻痺しているような気がしてきた。

さっきまでは正常に動いていたコンパスの針は狂つたようにぐるぐると回転している。実際、狂っている。

歩き疲れ、水織は近くの木の根元に腰掛けるとはあと大きなため

息をついた。

「……疲れた。里から出で、どれぐらい経ったんだろう?..」

日は中天をとうに過ぎてゐる、ような気がする。

ハツキリとした時刻がわからないので、水織はそわそわと何だか落ち着かない。

冷たい秋風を頬に受けながらしばらく呆けていると、背後の方からがさがさ、と草木を揺らす音が聞こえてきたので振り向く。

「……?」

視線の先に立つ人物も、今の水織と同じような表情を浮かべた。お互いの顔にはハツキリと『「コイツ、誰だ?』』と書いてある。水織の前に立つ人物は、白い道着のような着物に長い鼻が特徴的な赤い仮面を付けていた。さながらその姿は、妖怪の天狗のようにも見受けられる。

しばし見つめあい、沈黙。

先に口を開いたのはその仮面の人物だった。

「……貴様、何をしている?」

低い、重く響くような声。どうやら仮面の人物は男らしい。水織は念のために立ち上がり、嘘偽りなく言った。

「えつと……神社を、探してます」

「それは、ここが何処だかわかつて言つているのだな

「は? いや、ここは妖怪の山……ツー?」

ヒュツ、と鋭く風を切り裂く音に水織はすかさず飛び退く。

いつの間に取り出したのか、目の前の仮面の男の手には薙刀が握られ、水織が今まで腰掛けていた場所に刃が深々と突き刺さっている。

もう少し反応が遅れていたら、真つ二つに両断されていたかもしない。

「お、おい！ いきなり何するんだ！」

「侵入者は、排除する！」

「侵入者あツ！？」

迫りくる薙刀を寸でのところで回避し、水織は一目散に逃げ出す。侵入者ってどういうことだ？ 前に静葉と穂子と来た時は何ともなかつたのに、何故今になつて攻撃されなくてはいけないのか。走りながら振り返り、水織は戦慄する。

仮面の男は木々の上をまるで獸のよつた速さで駆け抜けながらこちらに猛進してくる。

木々と木々とを吹き抜ける疾風のような男。常人であるとは到底思えない。まさか、あれが天狗とでも言うのだろうか。しかし、前に見た新聞記者の天狗とやらは仮面など付けてはいなかつたが。

「うおつとお！？」

突如悪寒を感じしゃがみ込むと、水織の頭上を薙刀が通り過ぎ大木に突き刺さる。

と同時に、仮面の男が突き刺さった薙刀の上に器用に着地していた。

「哨戒の任を任せられた以上侵入者を逃すわけにはいかん、覚悟ツ！」

「う、く……うわああああツ！？」

立ちはだかる男の手が発光し、荒れ狂う暴風が水織に襲いかかる。山の地形を破壊しながら吹き荒れる風は水織をいとも容易く吹き飛ばし、大木にその身を叩きつけられた。

全身が軋む。

肺の中の空氣を無理やり吐き出され、水織は一瞬意識が遠くに消されそうになるがどうにか堪えた。

叩きつけられてもスコップを手放さなかつたのは幸いだった。杖代わりに立ち上がり、男の方を静かに見据える。

男はほお、と少し感心したような声を漏らした。

「ただの人間にしては頑丈なヤツだ」

頭が微かにふらつくがそれも気合いで捻じ伏せながら右手でスコップを構え、左手をそつとジャンパーのポケットに忍ばせる。

弾幕勝負以外でも使えるかどうかわからないが、使わないで死ぬよりは幾分マシだ。

水織は男を睨みながらゆっくりと後方に距離を取ろうとしてすかさず男が動いた。

「逃がすか、喰らえ！」

再び襲いかかる爆風。

地面を深く抉るように突き進む風を前に、水織は左手で掴んだ術符を構え叫ぶ。

「貫符『一六点螺』」
イッケツテンラ

発動した術符を、水織はそのまま襲いかかる風に向けてまっすぐ投げ入れた。

小さく発光しながら符は暴風の中心を貫き、やがて暴風の真ん中

に大穴を開けた。

激しい暴風の中に突如出来上がった無風の空間。それはいわゆる台風の目と同じものだった。

出来上がった大穴から抜け出し逃走を図れりとして しかし、その先に仮面の男が仁王立ちしていた。

「な……ッー?」

「逃さんと、言つただろう?」

大きく振り上げられた薙刀の刃が水織に迫る。至近距離の攻撃に、水織は成す術がなかつた。

「ここまでかと諦めかけた瞬間、水織が田をギュツと瞑る前に、突如世界に闇が落ちた。

「な、何だこれは!?」

「え……? 何も、見えない……?」

狼狽した男の声から察するに、水織やこの男ではない誰かの仕業だとわかる。

しかし、一体誰が? 何のために?

水織が思考しようとした瞬間、何も見えない闇の中から腕を掴まれ思考が中断される。

「お兄ちゃん、じつちー!」

「お、お兄ちゃん?」

闇の向こうから聞こえる声と、腕に伝わる不思議な温もりに逆らえず、水織は声の主と思わしき者の腕に引かれ走る。

「ど、何処だ貴様! 面妖な術なんぞ使いおつて! 出でこー!」

焦りの声と、我武者羅に薙刀を振るう風切り音を遠くに聞きながら、水織は闇の彼方へと姿を消していく。

……どれくらい、走つただろうか。

腕を引く力がだんだんと弱くなり、その感触が消えたと同時に闇が瞬時に晴れた。

陽の光に眩み、一瞬視界が白くなりかける。

しかしそれも一時的なものだったらしくすぐに慣れて視界が元に戻っていく。

視界の先、水織の腕を引っ張っていたであろう人物の姿がゆっくりと浮かび上がる。

漆黒の衣服に、それに相反して輝く金色の髪の少女。

それは一度水織に襲いかかり、そして靈夢に返り討ちにされ水織が助けた、いつか見た妖怪の少女。

「お前、たしかルーミア……？」

「えへへ。助けに来たよ、お兄ちゃん」

「ぱーっと天真爛漫な笑みを浮かべながら、ルーミアは水織の腕の中に飛び込んできた。

第三十一話 水織、妹が出来る？（後書き）

夜『はい、モブ天狗さん』苦労様でした。あなたのお仕事はこれで終わりです』

天狗『ちよ、おま

ということだ、泉遊録、今年最後の更新となります。

それで年末年始についてですが、二つほど外伝を予定しております。一つは忘年会。もう一つは初詣です。

ただ、忘年会の方はお話といつほどものものではないので、活動報告でやるお遊び的な感じです。

忘年会は今年ラスト、初詣は1月3日を予定としております。

泉遊録に関する感想コメント等、これに限らず他の作品への『意見などなど、いつでもお気軽にどうぞ』。

では、待て次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1252x/>

東方泉遊録 ~autumn hot spring!~

2011年12月27日21時52分発行